January 20th 1910.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 214

大日本蠶絲會報

第百拾四號目錄

▲關西製絲界の泰斗 龜井甚三郎君▼

▲優等賞の光榮を擔へる 白石製絲所▼

●明治四十三年を迎ふ　松平正直
●蠶業教育に就て　農學博士 横井時敬
●膿病に就て　農學士 林驛作
●雌雄の掛合せと算數の掛合との關係　農學博士 稻垣乙丙
●蠶の觸肢の研究　愛媛縣立農學校教諭 池田榮太郎
●日本の夏秋蠶に就て（續）　農學士 石渡繁胤
●蠶種貯藏用風穴（續）　農學士 廣瀨次郎
●生種と黑種　埼玉縣農事試驗場技手 水野辰五郎
●催青溫度標準表を呈し春蠶種の風穴貯藏を勸む　農學士 庭屋千壽
●印度に於ける春蠶　侯爵夫人 須田金之助
●昔を忘れぬ談話の一二　農學士 佐々木貞子
●米國絹業談　農學士 紫藤章
●犬頭の絲　學藝委員 綠木喜三
●蓖麻子の葉を以て飼養する蠶兒　孟買領事 藤田敏郎
●蠶絲の統一に就て　岩手縣農學校教諭 田村兼藏
●生繭賣買禁止　金谷權之助

▲優等賞の光榮を擔へる 鮎澤房太郎君▼

TOKYO.
The Association;
No. 18 Nishikicho Sanchoma, Kanda, Japan.

特許中原式 乾燥器佛國第三九貳三三九號 煮繭器伊國出願中

本器ハ煮繭分業沈ミ繰法唯一の良器ナリ
類節ノ過多纖度ノ不均抱合不良ノ三大缺點ヲ防グニハ
煮繭分業沈ミ繰法ニアリ○品質ヲ整一ナラシメ貿易
品トシテ海外ニ名聲ヲ博スルニハ煮繭分業沈ミ繰法ニアリ
○優美ナル生絲ヲ製造シ算盤
ノ持テルハ煮繭分業沈ミ繰法
ニアリ

賞狀抄載

羽前多勢丸多製絲場ヨリ乞ヒ得タル同場及ヒ横濱生絲檢査所同生絲合名會社等ノ試驗成績表其外詳細ハ說明書ニアリ

東京市本所區德右衛門町三四
特許中原式合資會社 電話浅花二千二百二十六番 振替貯金口座五六五〇四番

新年之辭

昇平古今三千載、茲に庚戌の新歲を迎へて、江海の潮、龜龍の紋、更に新なるを覺ゆるものあり、本會亦創立以降十有九の春に遭ひ、新世の福祉を得たるは洵に是れ聖代の餘澤なりといふべし、然れども惟ふに本會蠶業界に旗幟を樹てゝより年一年會務の繁劇を加へ漸く重要の地位に進み日本蠶業界に多少の貢獻を爲すに至れるは又以て英資比なき我　總裁宮殿下の御懿德と熱誠なる會員諸君の援助との賜ならずんばあらず、本會同人茲に三盃の祝酒を酌みて新年を賀し併せて　總裁宮殿下並に會員諸君の多幸多福を祈らざるを得ず、之を新年の辭となす、

明治庚戌元日

大日本蠶絲會

大日本蠶絲會報　第二百拾四號

目次

口繪

●本會より日英博覽會へ出品せる富士の模型
●東京蠶業講習所より日英博覽會へ出品せられたる蠶絲業品の模型
●佐々木侯爵及同侯爵令夫人の肖像
●關西製絲界の泰斗亀井茜三郎君の肖像
●宮城支會第一回總會に於て一二等有功章を授與せられたる寺田丹羽二氏の肖像
●宮城支會品評會並山梨支會品評會に於て優等賞の光榮を擔へる鈴木鮎澤二氏の肖像

論叢　一―二

●明治四十三年を迎ふ　會頭男爵　松平正直
●蠶業教育に就て　農學博士　横井時敬
●膿病に就て　農學士　林鄂
●雌雄の掛合せと算數の掛合せとの關係　農學博士　稻垣乙丙
●蠶の觸肢の研究　愛媛縣立農學校教諭　池田榮太郎
●日本の夏秋蠶に就て（佛文）　農學士　石渡繁胤
●蠶種貯藏用風穴（佛文）　農學士　廣瀬次郎

集芳　二―三〇

●生種と黑種　埼玉縣農事試驗場技手　永野辰五郎
●生絲整理改善及統一の急　生絲檢査所　庭屋千壽
●催青溫度標準表を呈し春蠶稚風穴貯藏を勸む　農學士　須田金之助

調査　三一―三三

●印度に於ける春蠶　三三―四三

甲門

●昔を忘れぬ談話の一二　侯爵夫人　佐々木貞子
●米國絹業談　農學士　柴藤章
●犬頭の絲　學藝委員　練木喜三

會報

●養蠶年中行事　愛媛縣立農學校教諭　池田榮太郎
●關西製絲界の泰斗亀井茜三郎君　農學士　馬場由

心影

●優等賞の光榮を擔へる白石製絲所　編者
●優等賞の光榮を擔へる鮎澤房太郎君　重富三男三

外報

●蓖麻子の葉を以て飼養する蠶兒　編者

絲況

●横濱市場　孟買領事　藤田敏郎

問答

●蠶種貯法に就て質問並答●輕便殺蛆法に就き質問並答●膿病に就き質問並答●清潔乾燥法に就き質問並答

林說

●蠶絲の統一に就て　岩手縣立農學校教諭　田村兼蔵
●生繭賣買禁止　金谷權之助

會務錄事

●宮城支會第一回總會●山梨支會品評會褒賞授與式●富山支會品評會褒賞授與式●支會職員の嘱託●特別會員の推薦●會員增減●府縣別表　六三―六五

蠶桑雜觀

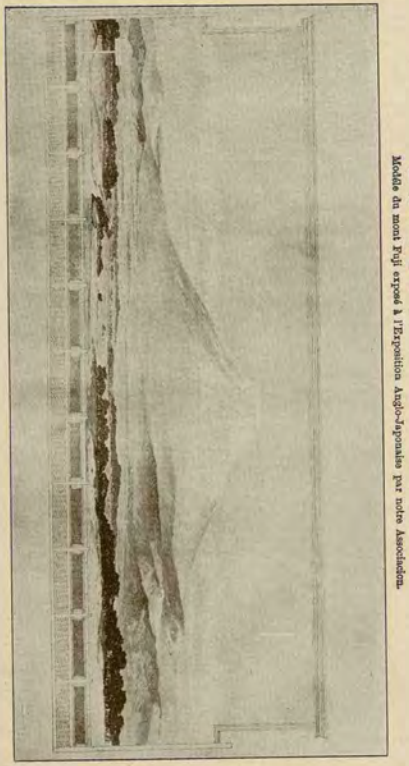
●十ヶ年生絲輸出●元日の郵便●伊太利蠶業の狀態●蠶合會標準調査●北海道廳の蠶業補助●蠶絲業組合調査●生絲檢査の改善●農商務省の新中業●昨年に於ける世界の蠶況●日繭の解●文藝●蠶海消息●叙任辭令●寄附書目　六六―六八　六九―八一　八二―九〇

豫告

本會は三四月の交府縣聯合大共進會の開催地たる中京名古屋市に於て第五回總會を開設し以て功績表彰の式典を擧げ且つ斯業上の重要問題を審議せんと欲す會員諸君陸續來て東海道の名勝を探ると共に聯合共進會の實況を視察し併せて本會總會に臨み大に斯業發展の善後策を講ずべく今より之が旅裝を整ひられんことを敢て希望に堪へざるなり

質問者への注意

近來本會へ質問書を送らるゝ方が隨分澤山になりました、是も斯業勃興の結果と喜ぶことですから、本會は質問書の到着するなり下には置かず、直に之を學藝委員に送り之が解答を請ふやうにして居りますけれども併し學藝委員の方々も夫々公職にありて御忙しいとですから、質問書を送るなり直に解答し貰ふといふ譯に參らぬこともある、故に會員諸君は豫じめ此事を御承知の上質問せられたい、尙解答の有りたる分は可成會報に載せたいと思へど紙面に限りのある爲に悉くゝといふ譯に行かぬから解答は直に之を質問者へ通知する樣に致しておきます、て若し餘り永く解答を送らなかつたら一應督促して敲きたいが其際には乍御手數再び質問の事柄を明記して申越されたい、又中には匿名で質問せらるる方もありますが、之は甚だ失禮の遣方と考へます、のみならずたとへ解答を願ひましても其通知の出しやうに困る故に質問の場合には必ず住所姓名を明記せられたい一言御注意迄に申上げておきます。



雲橋の上富るせ品出〜會覽博英日ゝよ會本
Moddle du mont Fuji exposé à l'Exposition Anglo-Japonaise par notre Association.

侯爵佐野木侯夫人

同侯爵令夫人

雅有の人夫令同及侯爵佐野木々佐

Portrait de Monsieur le Marquis et Madame la Marquise Sanoki.

模模の品業特露るたれら出へ會覽博英日りよ所習講業露露東京東

Modèle des produits sélectionnés exposés à l'Exposition Anglo-japonaise par la Station sélectionnée de Tokio.

東京東の(露露東)習講業特露るたれら出へ會覽博英日りよ所習講業露露東京東

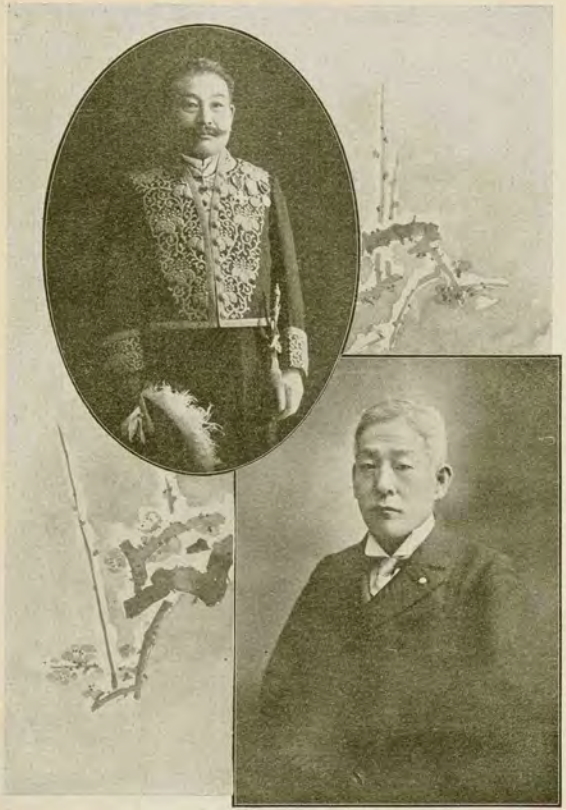
東京東の(露露東)習講業特露るたれら出へ會覽博英日りよ所習講業露露東京東

東京東の(露露東)習講業特露るたれら出へ會覽博英日りよ所習講業露露東京東

宮城支會第一回總會に於て一二等有功章を授與せらるたる寺田羽丹二氏の肖像

Portrait de Messieurs Terada et Niwa, honorés du premier et du deuxième ordre de mérite à l'occasion de la première Assemblée générale de notre succursale de Miyagi.

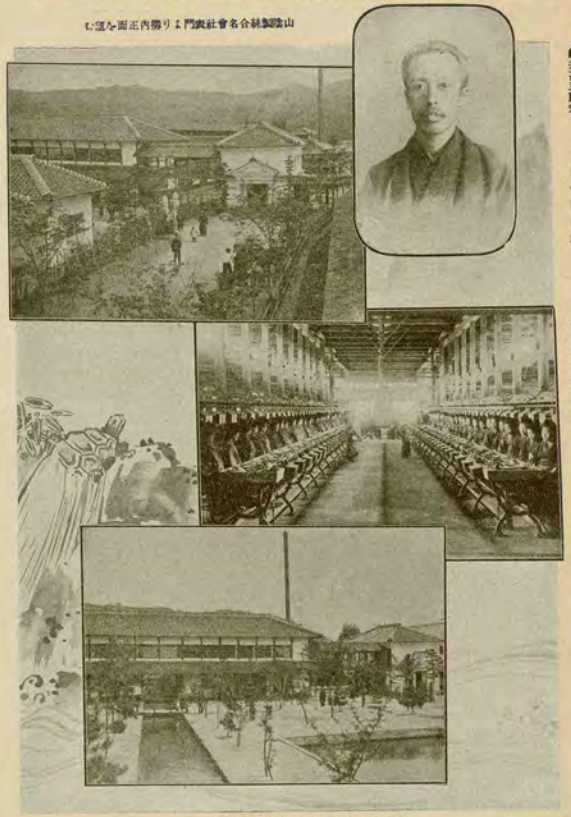
宮城支會長寺田祐之君



宮城支會幹事羽丹敬太郎君

關西製絲界の泰斗亀井甚三郎君と山除製絲合名會社の景

Portrait de Monsieur J. Kamei, éminent filateur à Kwansei et la vue de la Filature "Sanin."



亀井甚三郎君

山除製絲合名會社第一繰絲場

山除製絲合名會社表門より構内正面を望む

山除製絲合名會社寄宿舎より庭内を望む

宮城支會品評品並に山梨支會品評會に於て優等賞の光榮を擔へる鈴木鮎澤二氏の肖像

Portrait de Messieurs Suzuki et Ayuzawa, décorés du grand prix à l'occasion des Concours de nos succursales de Miyagi et de Yamanashi.

鈴木清之輔君と君の經營に掛る白石石製繭所

鮎澤房太郎君と君の蠶室

大日本蠶絲會報　第貳百拾四號

論叢

明治四十三年を迎ふ

會頭男爵　松平正直

地軸一旋轉茲に四十有三年の佳辰を迎へ光輝燦爛たる御代に勇氣と希望とを以て太平の春を祝ふ五千萬同胞の福祉は雖ふるに物なく、本會又茲に十有九回の歳を重ね拾萬有餘の會員諸君と共に瑞氣洋々たる新春を寿ぎ迎つるを得るは洵に慶賀に堪えざる所なり、依て此に聊か所感を述べ以て迎年の辭に代へんとす。

顧ふに昨年に於ける我蠶絲業界は、之を半面より觀れば洵に憂ふべく悲むべきの現象を呈し、更に之を他の半面より觀れば喜ぶべく慶すべきの趨勢を露せり、何ぞかは憂ふべく悲むべしと爲す乎、疑食を忘れて飼育せし蠶兒は全國を通じて多少の例外なきにあらざるも豐作を告げたるを以て蠶家は喜色滿面なりしも繭の價格は餘りに香かならずして收繭の增加は懷を温かならしむるに至らず殊に秋蠶繭の如きは低廉も亦甚しく骨折損に終りしが如き觀あり、製絲家に於ても春期原料の仕入時期は蠶絲の價格相當なりしも、從て製造すれば從て下落し到底敗北はざるのみか多大の創痍を負ひたるものさへありと聞けり、噫是れ昨年は我蠶絲業界に於ての厄年なる平實に憂ふべく悲むべき現象と謂はざるべからず、此に悲しむべく憂ふべきの秋に於て何をか喜ぶべく樂むべきの趨勢を看取せりとなす乎、其一は我蠶絲業家は。

奮鬪努力一大厄年を通過

せること是なり、若し夫れ絲家にして價格の廉なるが爲に絲荷を賣惜み空しく横濱阜頭に堆積せしめん乎必ず早曉投賣等の難局に遭遇し如何なる悲慘の出來事を演ずるやも知るべからず、此時に於て悠揚迫らず其時價に應じて販賣せしに依り空前の產額なりと稱せられるにも係はらず、悲喜しき絲荷の堆積を爲さず常に圓滑の取引を見しは天晴の功名なりと賞賛するを憚らず、此に於てか其輸出の數量は空前の額に上り前年より多きこと三萬實に拾參萬餘俵とふ新なるレコードを作らしめたり。

斯の如くなるを以て價格は低廉なりしにも拘らず開港以來の數字たる一億二千餘萬圓を刻ましむるに至れり、是れ吾人

が富饒を熱ずる能はざる所なり、又其の一低廉なれば其販路は殆ど無限にして生産過多を憂るは痴人の夢なるを知り得、更に此低廉なる價格を以て未だ日本蠶絲の眞價を味はざるものに之を使用せしめ幾多の販路を開拓せしむるを見たり、故に今日の繭は轉じて明日の繭となるは鏡に懸けて觀るが如し、是れ洵に喜ぶべく慶すべきの事實なりと謂ふも驕れるかの之を拒むものあらんや。

余は昨四十二年の新春に於て聊か諸君に警告せり、曰く其要を摘めば奮闘努力して多數の收獲を得、此の增收獲を以て廣告費の看做し、其生産品を低廉に販賣すれば之が販路の擴張に從て需要增加し價格も亦適當の位置を占め事業を安全に經營する基となるべきを以てせり、是れ蓋し諸君の記憶に新たる所ならん。

幸に會員諸君は

實行者の位置に立ち努力と奮闘とに依りて多大の增收を贏ち得、而も廣き甘んじて之を需買したるは即ち奮闘と努力とを以て余が所謂增收額を廣告費に充て其販路を擴張せられたるものにして、洵に斯業の爲め慶賀に堪へざる所なり、蓋し他の品目は其數量品の不振にして而も數量多く大額の增收を示せるは需要の增加を意味し、其需要の範圍奈侈の境を超へ必品の消費を刺戟し其暗示を解剖し茶らば出來得る大蠶絲は廣價に供給するときは其需要は無限也との眞意を覺るを得べし、驕れか又生産過剰の痴

繭を繰返すものあらんや、此に於て吾人は我國の民情と風土に適したる蠶絲の斯かる境遇に在るを衷心より喜ぶものなり、世に國産と稱するもの少きにあらず、此等は如何に廣價ね制限せらるゝを常とす、然るに蠶絲は之と其趣きを異にし、經濟其他の關係に依り、多少其波動は之を感受せざるにあらざるも、滔々たる需要の大勢は販路を沮止するを許さざるなり。故に

過去の事實を以て鑑

となし、將來を付度すれば、徹頭徹尾蠶絲業者に採りて必要なる條件は奮闘努力天然の給源を利用し以て廣價に需ぐの一事也、換言すれば堅忍自彊努めて止まざるに在り、敢て吾人は難事を强んとするものに非ず、既に過去一年に於て蠶絲業者の奮闘努力が如何に、我國の對外貿易の上に將た又國家の經濟の上に有力の材たるかを推知するに難からざるべし、故に更に一段の努力と奮闘とを以て精良の蠶絲を多量に産出し之を廣價に販賣するの策を講ぜざるべからず、是れ個人の福祉を增進し惹て國家の富源を涵養する所以なればなり。

然らば如何にして

其生産を增し自己幷に國家を有利の域に進め得るか、是抑も吾人が新春の劈頭に叫ばんとする骨子たり、即ち過去に現實せる奮闘努力の効果を一層有効に收めんには、其同組合の

發達を圖ること其一にして、蠶業の智識を增進すること是其二なり、而して前者は共同蠶種購入、共同蠶種販賣、共同殺蛹乾繭、共同蠶種貯藏、共同繭販賣、共同生絲荷造販賣等に依て勞力を省き消耗費を減少し生産費を節約して而も收獲を確實に絲場返、共同生絲檢査

脚か達ぶる所あらんとす、敢て智識の向上を要するは蠶絲業のみに止らず、總ての方面皆然れも急務とする處なりと雖も蠶絲業は婦女子の勤勞に待つ多大なるを以て之を男子に比すれば保守的にして且見聞少き女性には殊に智識の普及を計るを以て保守的にして且見聞少き女性には殊に智識の普及を計るを以て最も切に其成効を早からしむるの途なるを信ず、前述る處の共同經營にして實行せらるゝとき、之を運用し之れが病に常るものにして其智識に缺くる處あらんか、其奏功比較的遲々たるの域みは免れざるべし、之を實例に徴するに先進地に於る蠶業の經營と、新開地に於る蠶業の經營とは、其面目を異にするに見て明なり、之れ即ち進開地は新智識に依り其經營を進むるにも拘らず、先進地は舊慣を固守する風習に據るか、智識を練磨し之を實行するの勇氣に乏しきに歸すべきか、兎に角不識の間に一歩を後進地に譲るの感あるに見ても如何に智識の向上が必要なるかを知るに足らん。

故に盛に講話會、講習會の如き速成的方法を以て智識の普及を圖るも必要なりと雖も其區域廣汎に亙らず且其細節を穿つの能はざるの憾みあり、故に本會は此蠶業界に於る這般の缺陷を補はんが爲に、否な更に世界的最新知識を時々刻々に報導せんが爲に學術上に於ける深奥なる研究を毎月一回宿布せる雲霞の如く多くの増加する女子の智識を向上せしめんが爲に女子蠶業講義錄を發刊し、更に本年度に於ては一般男子の希望に應ずべき講義錄を發刊し、三者相待ちて其功果を速かならしめんことを期し、其經費の如きも努めて節約し何人も之を需要し得る範圍に進ぜり、是れ蓋し本會が國家に貢献せんとする微衷に外ならざるなり、夫れ物窮すれば必ず通ずと雖ども古來より幾度か繰り返されたる如く、今や世界の經濟界は不振の夢より覚め、次第に向ひつゝあるとして歐米より來る消息なるに於ては頗る本邦蠶絲業の一大轉機なる來國は來年度に於ける農作物空前の豊穣を得て農家の收益増加し經濟界の勃興に刮目すべきものありと謂へり。

果して然らば

絹織物の用途益増進し從て蠶絲の需要益倍加すべきは火を睹るよりも明なり、故に本年に於ける蠶絲業は極て好運多望なるは敢て豫占するを憚らざるなり、然れども物の轉倒墜落を見るに其倒壊は急激にして間髪を容るゝに隙なしと雖も、之が回復は外の時日を要する如く一度沈淪せし經濟上の不良狀態の回復は豫期より遅るゝやの測し難し、而して以て豫期の反しては

蠶種家ならざる以上は、專門的の養蠶家業は到底利益あるべきてなく、農業の一部として之を採用すべきものであるゆゑ、縱し養蠶を主として教授するにせよ、農業の大體は必ずと之を教ふることしならねばならぬに相違なく、養蠶上の技術家として立つには、此程度の教育は未だ不充分なるを免れないのであれば、旁々甚しき專門的教授は之を忌まなければならぬ、實業專門學校の程度に於ても、蠶業のみを專修せしむるは、甚た以て然るべからざることである、何となれば農業と蠶業とは、相離るべからざる關係を有するものであつて、農業を學ぶ者の蠶業を修めざるべからざるは勿論、蠶業を專修するものとても、尚も農業を學ばざれば、その專攻の學問に於て、甚だ面白からざるのみてなく、專門學の應用に於ても、動もすれば偏見に陷るを免れない、甚しきは蠶業は單に生産上の技術のみを授けて經濟學の初歩だのさへあるやうである、經濟學の一部たる所の蠶業に就きも知らざる技術家の漫に經濟界の一部たる所の蠶業に就きて、之れが效果を論ずる、見れ實に沙汰の限りてあつて、此の如きことが世に往々之れあるを見るは、甚た心細くして當を得ない、而して是等教育の缺點あるは、後に、之れが矯正に力めなければならぬ、抑も今日の學問は各科の間密なる關係を生じ來るものなるが故に、學修者は先づ出來る丈け廣く學んで、而して後に爽く修むるやうにせなければならぬ、始めより爽く修めては到底深く其奥に入ることの出來るものでない、奥に入ることの出來ると否とは、兎も角、一通りだも甚だ不充分なるを免れぬのである。

下野支會第十回品評會部內の光景

臨時設の短期學校又は講習に二種の別がなくてはならぬ

臨時設の短期學校、また講習に就きては、二種の別を立てねばならぬ、相當の年齢に達して、未だ得ざる所の技術を實地に學ばんとする場合に於ては、養蠶期節に於て、實習上の講習を受けしむること、其た利益多きことである、例へば養蠶の技術未だ進まざる地方に於ては、到處此の如き講習所を見たのであつた、今は夏秋蠶などに就きては、隨分此種の學校は利益あることである、既に一般に改良の行はれたる以上は此種の學校は必要を失ふが常である今一種は殊更に養蠶期節を避けて、即ち養蠶また農事の閑暇なる時節に於て、書籍また講義に就きて、養蠶上の事を全體なり、また或一部なりの上に學修するのは是れてある、此の如きは隨時隨處に設くるに極めて適當であると思ふ、その極めて容易なるものに至つては、一場の講演にても敢て不可ないのである。

隨時隨處の講習的教育が極めて利益

以上は極めて大體上の意見であつて、蠶業教育上に關する、余が意見の當否、當事者の批評を請ひ度く思ふのである、くれぐれも養蠶の如き、專門の技術にして、しかも農業の一部たる場合多き事業に就きては、教育の方法はよく〳〵研究して各種の事情より考へて、隨時隨處の講習的教育が極めて利益あるべしと信ずる、時に一場の講話に重めて不可なき場合も少からぬと思ふ、而して養蠶期節に於ては、此等教育に從事し居る所の教師をして、出來る丈け各戸に就きて、此等教育に從事し、また質問に答へしむることしなしなば其效用は甚だ少からず、而して、各地養蠶上の進歩は之によりて始めて之を期待することが由來すると信ずる、若し夫れ此の如きの措置も、年々千場一率にては、一般の厭惡を來たすの恐もあるべく、技術の進歩上も如何あるべかれば、政府は出來る丈け養蠶上の研究を奬勵して、養蠶學の進歩を誘致し、之れが技術の進歩に常に新規の材料を供するに力めしめざるべからざるのである。

學校さへ多く設立せられたなら良いと思ふは大なる間違

思ふに蠶業の我國に重大なる職業たること、今更陳ぶるの必要がないが、されば之れて漫に之れが普及を企圖する、最早其時期てない、今は技術の進歩を圖り、知識の普及に力むべき時期たるを疑はない、而して技術の進歩を圖り、知識の普及に力むる上に於て、間接また直接に教育が則ち唯一手段てあるといふてよい、如何なる政策が採用せらるゝにせよ、教育之れに伴はざるときは、到底之れが好果を收むべからざるは、之を理論に考へ、之を經驗に徵して、毫も疑なき所てある、之れが爲めに蠶業教育機關の振張を圖るの急務なるは、今更のことてないが、しかも其機關の適否と、之れが組織、管理の當否は、之れが成績の上に於て大なる關係を有するに論ないのてある、學校さへ多く設立せられたらば、それてよしと思ふは大なる間違てある、故に今之れに對する余の意見の大略を述べて、他日更に細論に及ばんことを期するのてある。

膿病に就て

學藝委員
農學士　林　驛　作

計らずも符節を合する事實を認めた

印度のカルカッタで出版されたるムカージ氏の蠶業書の中に下の如き記事がある、ベンガル地方にては毎年十一月より翌年五月迄は殆んど降雨なく、空氣は非常に乾燥する之れに反して雨餘の期間には雨量が頗る多い、それで桑葉中此の乾燥期に飼育したる蠶兒が壯蠶期に入りて、俄に雨期に際會するものは病蠶殊に膿病を發生することが甚だ多い、然るに若し其際充分に成長せる桑樹の大木から收葉するものを給與すれば病を免れることが出來る、故に膿病は傳染性の病でない、全く飼育中空氣の乾燥又は給桑の關係より起るものである云々」余輩は膿病の傳染性病でないといふ說を信ずることが出來ないが、飼育期によりて此の病の發生に著しき多少あることは、面白き事實であると思ふて居た、昨年の秋愛知縣下に出張して夏秋蠶の發生せる病蠶の調査を爲て見た處が、計らずも之れと符節を合するが如く、全く相一致する事實を認めた、仍て此の病を各方面より研究する爲め並に養蠶家の注意を喚ぶ爲めに少しく此の事に就て述べて見やう。

愛知縣下の晩秋蠶が不結果に終ったのは何が爲めか

昨年度に於ける同縣下の蠶兒は概して言へば春蠶は上結果であったが、夏秋蠶は不作であった、殊に晩秋蠶は甚だ不結果に終った、其原因は言ふまでもなく病蠶の發生多かりしが爲めである、晩秋蠶に於て發生せる病蠶は、掃立以來續出せるもので、最初より蠶兒の經過不良であったが、殊に三眠以後に至りて發病した、其病蠶は色々のものて一定せぬが、之を大別すれば膿病・軟化病及硬化病の三者である、硬化病には白殭病と綠殭病との二種があった例へば尾張地方は膿病の發生割合に多きを常とせるが、殊に本年は此の病蠶が多數を占めて居た、其の發病の狀況は、三齡の頃より始まり上蔟の後まで續々發生して頗る惨狀を呈したとのことである、蠶は生種にも風穴種にも發生したのであるが、生種の蠶兒の方に殊に多發した。

病蠶多發の原因は何が爲めか

右の如く各種の病蠶を多く發生するに至つた原因は固より單純の關係ではあるまいが、余輩の見る所では飼育期に於ける氣候が不良でありしのみではなく、尙其以前に於ける氣候に大關係を有すると思はれる、何ぜかとならば、八月中種蠶飼育期間は早蠶であつた爲め、溫度高く溫氣少なきにより桑葉の蔟質は著しく劣變した、其の甚だしきものは殆んど枯死せんとしたものがあつた、否らざるも發育は極めて不良

て飼料としては誠に不適當であつた、斯の如き不良桑で飼育を始めたる晩秋蠶が一般に發育不良なりしは尙より當然のことであつた、然るに其の蠶兒が三齡の頃は丁度九月初旬で天候は俄然一變して降雨多く、爲めに桑葉は急劇に發育を始めた、故に其の後の桑葉とは柔軟にして水分に富むものとなつた即ち稚蠶中粗硬なる桑葉を以て飼育された晩秋蠶は、俄然柔軟なる桑葉を給せられ、且つ蠶室内の空氣は一變して溫潤となり、從つて多くの病蠶を誘發し易き狀態となつたので、元來給與せる桑葉の不良なる爲め虛弱なりし蠶兒は忽ち病の襲ふ所となり、續々發病するに至つたものである、之れを要するに右發病の原因は單に氣候の溫潤なりしが爲めではなく、過度の乾燥に次ぐに溫潤を以てしたること即ち右の如き天候の繼續的の關係であると信ずるのである。

膿病の原因

膿病の原因に就ては昔より諸學者の研究せる所少なくないが、未だ充分に明かでない、ポルレー氏は此の病の病原體を原生動物となし、プロゲアチエッタ氏は之を「グラミドツア」であるとなして居る、段々新しき方法で研究するに至つたから、最早遠からず久しき間の疑問も解決するに至るであらう、余輩は之れが病原に就て研究するに先ち、兎も角も本病を誘發し易き事情に就て一言し以て養蠶者の注意を請はんとするのである。

雌雄の掛合せと算數の掛合せとの關係

學藝委員
農學博士　稻　垣　乙　丙

掛合せの符號に×を用ゐるは如何なる意味か

凡そ家畜には牛馬にしても亦家蠶の如きものにしても其雌雄を交尾せしむることを普通に掛合せと稱するのであつて、算數の接合せ即ち乘算と等しく其符號に×を用ゐることが普通の例になつて居るのである、例へば一化蠶の蛾と二化蠶の蛾とを交尾せしむるときは

一六蠶×二六蠶　といふ風に書きあはすのである、コレハ雌雄蛾に雄蛾を「乘せ掛ける」といふ意味から其掛けるといふ言詞がたまく算術に於て乘算のことを「掛ける」と呼ぶのと一致して居る所から略符號として×を用ゐると云ふだけのことであるが、抑も亦別に或意味が在るのであるか。

「メンデリズム」を聽いた時に浮んだ疑問

コノ疑問は予が嘗て始めて「メンデリズム」を聽いた時に腦裏に浮ばしめたる疑問なのである、何故に「メンデリズ

ム」に就て斯樣なる疑問が起るかと云へば「メンデリズム」に於ては次の如くに說かるゝのである。

aといふ性質とbといふ性質とを含んで居る生物をそれと同じ性質のものと交尾せしむるときはaといふ性質ばかりを含んだ子とbといふ性質ばかりを含んだ子との三種類の子が出來て、そして此のaの兩性質を含んだ子の生ずる數はaばかりか又はbばかりの性質を含んだ子の生ずる數の二倍に當るのである、即ちこの事は、

$a+2ab+b$

として

$a^2+2ab+b^2$

を掛けるのと同樣であつて、此得た所の三項のうちで第一項は唯aのみを含み、第三項は唯bのみを含み、そして第二項はaとbとを含んだものゝ二つである。

今aを以て白い性質としてbを以て黑い性質として、そして白は黑に對して劣性であるとすればaとbとを含んだものは唯だけの性質を現はしてaの性質を潛伏せしむることになるから白と黑との雜種は、その外觀の上に於ては黑であるツヨデ此の雜種である所の黑と、同じく雜種である所の同樣の黑とを交尾せしむるときは其子は勿論$a^2+2ab+b^2$の三種類であるが、その第二項たる所のaとbとの兩性質を含んだ子も其のaの性質を潛伏せしめてbの性質だけを現はすのであるから、コレハ其外觀に於ては少しも第三項のbだけを含んで居るものと異らぬのである因て此の出來た所の子の種類は實は三種類であれども唯二種類の如くに見るのであつてつまり白の子と黑い子との二種類が出來るのである、併し黑い子は白い子の數の三倍（b_3が一つa_1b_1が二つで合せて三つ）であつて、子の總數の四分の三だけが優性を現はしたる子であつて、四分の一だけが劣性を現はした子であるのである。

言詞の一致丈けでなく別に一種の意味がなければならぬ

斯樣に「メンデリズム」の說く所は實に代數の乘法に合するといふことに就て考へて見れば雌雄の掛合せと算數の掛合せとは決してたゞ言詞の一致だけの關係では無くして則に一種の意味が無ければならぬとゝ予は思ふのである、「メンデリズム」を說く人々は遺傳の法則は實に數學的であるが、といふ理由に就ては予は未だ滿足の解明を聽くことを得なんだのである何故に交尾せしめる「乘算をする」のと同樣の意味になつて其交尾の結果が乘算の結果と一致するといふ次第であるか、コレモ亦何故に數學的であるか、抑も亦特にかゝる理由が在る次第であるか。

予は此疑問を次の如くに解釋した

此の疑問は實に予をして之が解釋を得る爲に沈思せしめたるの疑問であつて、そして此疑問は遂に予をして次の如き解釋に到着せしめたのである。今この解釋が果して其當を得るや否を世に賢さんが爲に此の一文を草したのである）

予は此の疑問に就ては「メンデリズム」を彼の生殖細胞の核絲減數の說と考へ合せたのであつて、そして双精子と卵子との結合を「プロバビリチー」の問題と論めたのであつて、即ち予の知るが如くに「メンデリズム」の一現象を解釋するのである。

今優性を示すにDの字を以てして劣性を示すにRの字を以てすることにして、ソコデ父の生殖細胞の中にはDを含んだ核絲との二つの核絲があるとして、母の生殖細胞の中にはRを含んだ核絲とRを含んだ核絲との二つの核絲とがあるとすれば、此の父と母との兩細胞が結合する前には核絲減數の爲めの細胞分體が行はれるのであるから、父の方の細胞即ち精子の一つはDか又はDを含んだ所の一つの核絲を持て居る細胞となるのであつて、母の方の細胞即ち卵子となるのであつて、母の方の細胞即ち卵子はR_1か又はR_2を含んだ所の一つの核絲を持て居る細胞となるのである、但し此の母の方に於てはR_1か又はR_2かのドチラカ一方が極體となつて細胞の外に出て受精の用をなさぬものになるのであるが、併しドチラが殘つてドチラが極體となるといふことは別に定りが無いのであるから澤山の卵子が分體によつて出來るときにはR_1が殘つたものとR_2が殘つたものとは同數であるべきである、（同數となるべき「プロバビリチー」が有るのである）然れば今こゝに澤山の卵子の代りに二つの卵子に就て考へて見るときには其一つにはR_1を含み他の一つ

下野支會支部出品中第一會評品陽明會支部内務省に於ける
（大國五寸長物鋼の鐵のたり造て以て以上）

にはR_1を含むものとして考ふべきであるし、因て今二つの卵子と二つの精子との結合に就ては先づ次の如き四つのものがあるとして考ふべきである。

父の生殖細胞飼ち精子は……D_1とD_2
母の生殖細胞飼ち卵子は……R_1とR_2

此の精子の一つと卵子の一つとが結び合つて子の細胞が出來るには何れと何れとが結合するとも云ふことは豫じめ定めた次第では無くして其結合をするときの偶然の事情によるのであるから、澤山の精子と澤山の卵子とが結び合つて澤山の子が出來るときのことを考ふれば、何れと何れとの結合も平等に行はれると考ふべきである（結合のプロバビリチーがすべて等しいのである）然らば今こゝに四種の細胞が二つづゝ結び合つて子を生ずることに就ては、次の如き種々の組合せが出來るものと考へられるのである。この組合せが飼ち乘算の意味になるのである）

父のD_1と母のR_1とが結合すれば其子は……D_1R_1を含む
父のD_1と母のR_2とが結合すれば其子は……D_1R_2を含む
父のD_2と母のR_1とが結合すれば其子は……D_2R_1を含む
父のD_2と母のR_2とが結合すれば其子は……D_2R_2を含む

然るにこの四つの子は何れもD_1とR_1とを含んだものであつてR_1は劣性、D_1は優性であるから、其外に現はれる所の形質は場合によつては子はすべて父に似て居つて母には似ないのである。（父に似ては居るが其實父と子とは全く同じ性質のものでは無いのである、何となれば子には母の性質が潜んで居るからであつて優性を現はして居るものなのである、然るに第四の子は其核絲の中にたゞR_2のみを含んで居るものであつて、此R_2は劣性ではあるが其劣性といふのは優性に對して劣性なのであつて、優性と混らない場合には劣性でも何でも無いのであるから、此R_2は決して潜むことが無くして現はるゝのである。ソレ故に此の第四の子は父母のドチラにも似ずして祖母に似るのである。

父に似ては居るが其實父と子とは全く同じ性質のものでは無いのである、何となれば子には母の性質が潜んで居るから

ら其の外に現はれた所は矢張り祖父と一樣であつて優性を現はして居るものなのである、然るに第四の子は其核絲の中にたゞR_2のみを含んで居るものであつて、此R_2は劣性ではあるが其劣性といふのは優性に對して劣性なのであつて、優性と混らない場合には劣性でも何でも無いのであるから、此R_2は決して潜むことが無くして現はるゝのである。ソレ故に此の第四の子は父母のドチラにも似ずして祖母に似るのである。

否似て居るばかりでなくして全く祖母と同じ性質を持つた純粹種であるのである、然らば其上四つの子の中の三つのものは優性を現はし、一つのものは劣性を現はすのであつて「メンデルの法則」は其一變が之によつて說明せらるゝ次第である。

曾孫を作るときには如何なる結合を爲すか

尙双に此の四つの孫が各々（或は雌であり或は雄であつて、ソレ等が結び合つて曾孫を作るときのことを考へて見ると其結合には次の如き種々の結合がある。

第一のDDを含む雄と第一のDDを含む雌との結合では
DDを含んだものが四つ出來る
第一のDDを含む雄と第二のDRを含む雌との結合では
DDを含んだものゝ二つとDRを含んだものゝ二つが出來る。
第一のDDを含む雄と第三のDRを含む雌との結合でも
DDを含んだものゝ二つとDRを含んだものゝ二つとが出來る。
第一のDDを含む雄と第四のRRを含む雌との結合では
DDを含むものゝ一つとDRを含むものゝ一つとが出來る。
第二のDRを含む雄と第一のDDを含む雌との結合では
DDを含んだものゝ二つとDRを含んだものゝ二つとが出來る。
第二のDRを含む雄と第二のDRを含む雌との結合では
DDを含むものゝ一つとDRを含むものゝ二つとRRを含むものゝ一つとが出來る。
第二のDRを含む雄と第三のDRを含む雌との結合では
DDを含むものゝ一つとDRを含むものゝ二つとRRを含むものゝ一つとが出來る。
第二のDRを含む雄と第四のRRを含む雌との結合では
DRを含むものゝ二つとRRを含むものゝ二つとが出來る。
第三のDRを含む雄と第一のDDを含む雌との結合では
DDを含んだものゝ二つとDRを含んだものゝ二つとが出來る。
第三のDRを含む雄と第二のDRを含む雌との結合では
DDを含むものゝ一つとDRを含むものゝ二つとRRを含むものゝ一つとが出來る。
第三のDRを含む雄と第三のDRを含む雌との結合では
DDを含むものゝ一つとDRを含むものゝ二つとRRを含むものゝ一つとが出來る。
第四のRRを含む雄と第四のRRを含む雌との結合では
DRを含んだものゝ二つとRRを含んだものゝ二つとが出來

る。

第四のRRを含む雄と第一のDDを含む雌との結合では

DRを含んだものが四つ出來る。

第四のRRを含む雄と第二のDRを含む雌との結合では

DRを含んだもの二つとRRを含んだもの二つとが出來る。

第四のRRを含む雄と第三のDDを含む雌との結合でも

DRを含んだもの二つとRRを含んだもの二つとが出來る。

第四のRRを含む雄と第四のRRを含む雌との結合では

RRを含んだものが四つ出來る。

以上十六種の結合はあらゆる結合であるのであつて、ソシテ十六種の結合で出來た所のものは總計六十四である、ソシテ又此六十四の曾孫の中に就てDDを含んだものだけを數ふれば十六で、DRを含んだものだけを數ふれば三十二でRRを含んだものだけを數ふれば十六である、此三種類の中に就てDDとDRとは其性質が異つたものではあるがDRは其外に現はす所のものはDのみであるからDDと同じく曾祖父に似て居るものであつて唯十六のRRのみが曾祖母と同じ形質を現はすのである、然ればコノ曾孫の場合に於ても孫の場合と同樣に優性を現はすものは全數の四分の三であつて劣性を顯はすものは四分の一であるのである。

蠶の觸肢の研究（一）

特別會員
愛媛縣立農學校教諭　池田榮太郎

蠶の觸肢は蠶體の頭部に存在し其位置は丁度牛や鹿の角を有するところにある、此器官は確に生理上重要なる作用を司るものであつて、特に感覺作用の一或は二を司るものであらうとは從來想像せられたところである、予は觸肢の生理作用を研究すると同時に此器官の變態發育をも併せて之を研究した。

世人の知る如く蠶の觸肢は幼蟲（蠶兒）のものと成蟲（蛾）のものとに依りて大差がある、蛹の觸肢も固より兩者と同じくないが、蛹は變態中にあるから、一定したる形狀を見ることが出來ない、此等幼蟲成蟲の大差ある觸肢に果して如何なる順序に變態したものであるか、生理學上將た解剖學上攻究すべき價値ある問題であらう、然るに從來如何に向つては多少調査せられたるものあるも、觸肢の變態に就きては今日未だ何等の研究あるを見ない、是れ予の研究に從事した所以である、解剖生理學上の重要問題と認めたるものである、以下先づ觸肢の外形一斑を論じ次に生理作用を説き、それより順を逐ふて變態を講ぜやうと思ふのである。

第一　觸肢の外形

（一）蠶兒の觸肢　諸君試みに壜大鏡を取りて運動せる蠶兒の頭部を檢せば、顱頂板の前端口器の兩側に一對の角狀體を有し、終始振動して止まざるものを見るであらう、之即ち觸肢である、觸肢の奇觀と題し、蠶業新報を以て發表したが、再調の結果、多少訂正したところがある、此者は基部膨大せる膜質部と其上部に圓筒なる「キチン」質圓筒を續ける三個の環節から出來て居る、第一環節は大くして短く、第二環節最も長く、第三環節は甚だ小さい、各環節の接合部は白色なる薄膜より成り、第二環節の頂上膜質部よりは長き二本の毛を出す、外側のものは最も長く、內側のものは短い、尙ほ此膜質部よりは三本の突起を生じ、兩側の二本は長くして其基部に生ずる一本は甚だ短い、而して此短突起は環節突起である、又此他內側に極めて小にして殆んど痕跡の如き突起を認むることがある、第三環節の頂上にも四本の突起を有し、二本は長く二本は短い、其中長き一本と短き一本は環節突起である。左に五節起蠶（叉書）に就て測定せる觸肢の形狀を示さう。

基部膜質部の長さ　○.三〇八

同　上　幅　○.一五四

第一環節の長さ　○.一九八

同　上　幅　○.二〇八

第二環節の長さ　○.一六三

同　上　幅　○.〇四九

第三環節の長さ　○.〇四九

同　上　幅　○.八八八

第二環節毛の長さ　○.〇一七

同　上　（基部）　○.〇四四

第一環節短毛の長さ　○.〇一七

同　上　（基部）　○.〇三九

第二環節二個の長突起長さ　○.〇三五

同　幅　○.〇〇九

第二環節の環節短突起長さ　○.〇一八

第三環節突起長さ　○.〇三五

第三環節の環節長突起の長さ　○.〇三一

第三環節の短突起長さ　○.〇〇三

同　上環節突起の長さ　○.〇〇九

第一圖　觸肢全形

1　第一環節　2　第二環節　3　第三環節
4　基部の膜質部　イ　顱頂板　ロ　單眼

以上の如き數多の環節は何等の必要ありや、思ふに各環節に於て屈折自在なる作用を有するによる恰も吾人の手足に屈折の要あると等しいのであらう、又實際に於て運動中各節自

第二圖　觸肢先端の構造

由に屈折するを見る、即ち此作用を營むには接合部は柔軟なる薄膜でなければならぬ、而して長毛は最も敏く、觸作用を司るものであつて、同時に各突起を保護するの要を爲すことは、明である、然らば其突起なるものは如何なる要を爲すか、乞ふ生理作用の項に至りて之を試かう。

(二)蠶蛾の觸肢　蠶蛾の觸肢は蠶兒の觸肢とは全く其形態構造を異にして居る、即ち外形恰も櫛の如く其大さ雌雄は小さく雄は大きい、蠶の種類に依りて異るも大なるものは雌のものは八ミリメートル雄のものは六ミリメートルの長さを有して居る、中巢又昔の蛾にて測定せしに雌の觸肢は六ミリメートル雄のものは五ミリメートルであつた、多くのものは雌七ミリ雄五、五ミリを有するのである。

觸肢は數多の環節より成るものであつて其數は一定せないやうである、予の調査に依れば三十二個乃至三十五個を有して居る、又雌雄に依りて異るものではないやうである、而して基部二節を除きたる各環節の兩側よりは一對の枝を出して居るが、此枝は斜めに下方に向ひ、一方長く一方短きものである、枝の最も長きものは一、五乃至一、二ミリメートルを有し短き方の枝の最も長きものは一、八乃至〇、六ミリメートルである、尙枝は先端に至れば上側のものは全く消失するけれども、上端より四、五環節のものは多少痕跡を出して居る、又枝は環節の中央より出づるものではなくて、先端を除きては晉下半部より分出するものである、而して其部分少しく膨大なるを常とする。

第三圖　觸肢の全景

第四圖　觸肢の先端

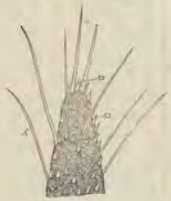
觸肢には長形網狀を爲せる略ぼ六角形の紋を有する、是れ細胞組織を現はすものであつて、染色せずして之を檢するときはよく觀察し得るものである。

今觸肢を横大して仔細に之を檢するときは、幹部及び枝共に全體細毛を以て被はれ、尙ほ細毛の間だに密に小突起を生ずるを見る、即ち第五圖及び六圖に示すが如くである。

圖に示す如く横枝の先端幹部の末端も構造に大差あることなく、幹部末端は多少突起の數多き傾きがあるけれども、其突起の構造は全部共に同一のものである。

第五圖　觸肢基部の横枝先端

第六圖　觸肢末端



第二　觸肢の生理作用

(一)蠶兒の觸肢　今試みに一種の障碍物を其側端に横ふるときは、頭部が未だ之に達せざるに、觸肢の報告によりて直ちに進路を轉ずるのを見るのである、又食桑の際に注視して居ると、粗硬なる食物なるを知れば上顎未だ之に接せずして直

ちに柔軟滋味良き食物を需むるのを知るであらう、是實に觸肢の作用に因るものであつて、吾人は茲に至りて造化の妙技に驚くと同時に、觸肢其ものゝ鋭敏なる感覺に驚かざるを得ないのである。

觸肢の感觸作用は斯の如く鋭敏であるけれど觸官の外に果して何等の作用を爲すものなるや、五官中蠶に於て不明に屬せるもの二つある、一は嗅官にして一は聽官である、此二官中の一或は二は觸肢に存在するものにあらざるかを疑ふものである、予は嗅官は之れが司るところであらうと信ずることが久しかつた、今回は之を確めやうと思つて左の方法を以て調査に着手したのである。

即ち觸肢を切斷せるものと然らざるものとを比較せやうと思つて、佝ほ各數頭を供試した、但し觸肢切斷は稚蠶に施し難いから、四齡盛食期のものからしたのである、斯くて右蠶兒は一回絶食せしめて飢餓に迫らしめ置き、次回給桑の際是を大なる書用紙上に一直線に配置し、桑片を一分二分三分……九分一寸等の距離に配列して、其各部に到達するに要する時刻及び其擧動を注意して調査した。

觸肢を切斷せるものは體軀の衰弱甚だしく、最初二三日は食慾頓に減退し、十數日後少しく恢復したから、調査に着手したけれども、擧動甚だ不活潑であつて殆んど成績を得ることが出來なかつたから普通蠶兒の成績を表記して推斷の資としやう。

齡期別＼食物の距離	一分	二分	三分	四分	五分	六分	七分	八分	九分
第一齡初期	0'三〇	0'四〇	0'五五	1'三〇	二'三三	—	—	—	—
第一齡中期	0'三三	0'一五	0'一八	0'五五	0'四五	0'四〇	—	—	—
第一齡盛食期	0'一九	0'二〇	1'一〇	1'五八	—	—	—	—	—
第二齡初期	0'一五	0'二五	0'一〇	0'一八	0'二〇	0'一〇	0'一五	0'一八	—
第二齡中期	0'一〇	0'一九	0'〇八	0'四八	0'二〇	0'五六	—	—	—
第二齡盛食期	0'〇四	0'二〇	0'五六	0'四〇	0'一〇	0'四〇	0'三一	—	—
第三齡初期	0'〇八	0'〇八	0'一五	0'二〇	0'四〇	—	—	—	—
第三齡中期	0'一七	0'一九	0'四五	0'五五	0'一八	0'二〇	0'五六	—	—
第三齡盛食期	0'〇五	0'一四	0'三三	0'四〇	0'五四	0'三三	0'五四	—	—
第四齡初期	0'〇六	0'一一	0'〇八	0'四〇	0'一三	0'二〇	0'一五	—	—
第四齡中期	0'一五	0'〇七	0'二〇	0'二〇	0'四〇	0'四〇	1'三〇	—	—
第四齡盛食期	0'〇四	0'〇八	0'二〇	0'三五	0'一八	—	—	—	—
第五齡初期	0'〇六	0'一七	0'三三	0'四〇	0'三五	0'四〇	—	—	—
第五齡中期	0'〇六	0'一五	0'一七	0'三五	0'三三	0'四五	0'四〇	—	—
第五齡盛食期	0'〇五	0'〇五	0'一五	0'〇六	0'四五	0'五八	0'一五	0'三四	—

温度は春蠶期華氏七十五度内外のとき二回平均したものである、之に據りて見れば食物に到達する時間と、食物の距離とは比例せないのである、更に重ねて別飼育の蠶兒につき同一の調査を反覆した其結果は左の如くである。

齡期別＼食物の距離	一分	二分	三分	四分	五分	六分	七分	八分	九分
第一齡初期	0'三三	0'三九	0'五五	0'五五	1'一五	1'〇〇	—	—	—
第一齡中期	0'三六	0'三七	0'二〇	0'三六	0'四〇	1'一一	—	—	—
第一齡盛食期	0'二〇	0'四〇	0'四〇	0'三七	0'二〇	—	—	—	—
第二齡初期	0'三六	0'四四	0'三三	0'二一	0'四〇	—	—	—	—
第二齡中期	0'一四	0'五六	0'二七	0'四〇	0'三五	1'一一	—	—	[illegible]
第二齡盛食期	0'二〇	0'四八	0'四〇	0'四〇	0'三六	0'四五	0'五九	—	—
第三齡初期	0'〇五	0'一一	0'一五	—	—	—	—	—	—
第三齡中期	0'一三	0'一八	0'五五	0'四八	—	1'一〇	—	—	—
第三齡盛食期	0'三〇	0'二八	0'四〇	0'五五	0'五二	0'五五	0'三三	—	—
第四齡初期	0'二六	0'四五	0'〇八	0'四五	0'四八	0'五五	0'五五	1'〇一	0'五七
第四齡中期	0'一〇	0'一三	0'一一	0'四〇	0'三四	0'三〇	1'〇〇	1'〇〇	0'五五
第四齡盛食期	0'二九	0'一八	0'一一	0'三四	0'五五	0'四五	1'〇五	0'五八	二'五六
第五齡初期	1'〇七	0'四二	0'四九	0'五五	0'一六	1'一五	—	—	—
第五齡中期	0'一七	0'一四	0'一九	0'四五	0'一四	0'三四	0'四四	0'一五	—
第五齡盛食期	0'二五	0'一五	0'一六	0'三三	0'一五	0'五五	1'〇〇	0'四〇	—

温度華氏七十五度内外のとき三回の調査を平均したものである、前表に比すれば到達時間少しく多きを要せる傾きがあるけれども、距離と時間と相伴はざるは共に同一の結果を示したのである。

右の調査を行ふに方り前表は養蠶研究生池内茂富氏後表は同中西信夫氏の勤力が得たるものである附記して兩氏の勞を謝す

以上の成績は果して桑葉の香氣を感じて(嗅覺)進行せるものなるや、將た視官に依りて進行せるものなるや、此區別が明かでない、何れに在るとするも極めて微弱なるものたることが分る。

各齡を通じて短時間にして遠距離に達するは盛食期である然れども蠶兒により一分の距離に達するに一分時を費すものがある、又或ものは七八分の距離に十二三秒にて達するものがある、されど概して一分乃至三分の距離の桑葉に向つては直線に進行するけれども、三分以上に至りては或は頭を擧て靜止し、或は頭部を上下し、或は引返し或は横行し、蠶兒によりては六分の距離に達するに三十分以上を費して佝ほ達せざるものがある、又前述の如く僅かに十數秒にして七八分に達するもの等ありて、殆んど嗅視何れに依るやを知るに苦むのであるが、思ふに蠶兒の桑葉を索むるは只空腹を訴ふるのあまり、食を需むるの意識より前後左右に運動し、偶然桑葉に遭會するものであらう、之に依り予は茲に給桑の技術は平等均一に注意すべしとの一言を養蠶家に特に敎へんと欲するものである。

以上の成績を總括するに、嗅官又は視官は甚だ微弱なるものであつて、僅かに一分乃至三分の距離以内にのみ有效にして、それ以上は無效のものであらう、然らば臭視何れを以て遠距離に達するとなすや、予は觸肢を切斷せるものゝうち、僅かに調査し得たる結果に依れば、嗅官は視官以上鋭敏にして且つ感覺距離遠きに達するものなるを知つた、而して其感覺部位は蠶兒にありては觸肢の第二環節以上の突起が之を司るものなるを解剖上より之を證明することを得るのである。

(二)蠶蛾の觸肢　雌蛾腹部の末端生殖器の兩側より誘引腺(發香器)を出して雄蛾を誘ふものである、雄は此香氣を嗅ぎ戀々として雌蛾を捜索すれども、雄が若し嗅覺を有たなければ誘引腺も何等の效なきに終るであらう、然るに蛾雄は戀々として加かも猛々として雌を追ふ所以のものは常さに是れ鋭敏なる嗅官を具有するは明かである、其嗅官果して何れにありやも是れ予の調査せんと欲するところであつて、世人も亦之を知らんと欲するところであらう。

蠶兒の嗅官が觸肢にあるのが事實だとすれば成蟲たる蛾の

觸肢は同しく幼蟲の觸肢より變形し來るものであるから（變態に至りて靜止せん）又觸肢に存するの理である。若し蛾の觸肢にして嗅官を有せなければ、蠶兒の觸肢は嗅官を司ると云ふことは出來ない、而して多くの昆蟲類中或種のものに於ては觸肢の先端にあるものがある、又基部に存するものがある、從來學者間の說に蠶蛾の嗅官は檣枝を有せざる大なる基部の二環節中にあるものであらうと唱へられて居る、予は此等の關係を確めんと欲し種々の方法を試みたのであるが。蠶の嗅官は果して觸肢に存在し、加かも觸肢の先端のみにあらず、基部のみにあらず、觸肢全體何れの部分にも存在することを確め得たのである、請ふ次の實驗に徴せられたい。

第一　嗅官は果して觸肢にありや

	方法	結果
A	納果完全なる雄蛾を雌蛾に接近す	翅を振動し觸肢を動しつゝ雌蛾を追ふ
B	觸肢全部を切斷し雌を接近せしむ	雄蛾は毫も雌を慕ふことなし

是に由て見れは觸肢全部を切斷せしものは何等の感應はない、故に嗅官は觸肢に存在するのである、然れども尙ほ茲に攻究せなければならぬは觸肢を切斷せられたるが爲め、痛傷を感ぜる極雌を慕ふの氣力を失ひたるものにあらざるかの疑ひがある、依りて更に第二の試驗を行ふた。

第二　觸肢を切斷せるものは痛傷の爲めに嗅覺を失したるものにあらざるか

	方法	結果
A	雄の翅一方を切りて雌に接す	一方の翅を振動し雌を慕ふ
B	雄の翅双方を切りて雌に接す	尾端を曲けて雌を慕ふ
C	脚を切りて雌に接す	翅を振動し尾端を曲けて雌を慕ふ
D	腹部に傷を負はしめ雌に接す	翅を振動し尾端を曲けて雌を慕ふ

斯の如く觸肢切斷と同等又是より以上の痛傷を感ぜしむるも、依然として雌を追慕するの氣力がある、故に觸肢切斷に依りて失せる嗅覺は痛傷の爲めにあらずして、觸肢中に嗅官を有するに依るのである。

愈々嗅官は觸肢にあるを知らば、其何れの部分に存ずるや第三第四の試驗に依りて之を證明し得たのである。

第三　觸肢を順次先端より切斷し嗅官存在の位置を檢す

	方法	結果
A	觸肢の先端四分の一を切斷して雌に接す	觸肢全體を有するものに同じ
B	肢の中央部より切斷して雌に接す	前に同じ
C	觸肢の先端四分の三を切斷して雌に接す	前に同じ
D	觸肢の基部を僅かに殘して雌に接す	前に同じ
E	觸肢全部を切斷して雌に接す	雌に對する感覺更になし

即ち知る觸肢の上部を如何に切り去るとも、基部多少にても存在する限りは嗅覺作用を失ふことはない、故に嗅官は觸肢の先端若しくは中部に於て專ら司るものなりと云ふことは出來ない。

更に進んで第三試驗と反對に基部を去りて順次先端に於ける感覺作用を試みなければならない、其方法はドウしたならば宜しいてあらうか　基部より順次に「ワゼリン」を塗抹して目的を達することを得たのである。

第四　觸肢の基部より順次先端の嗅覺作用を檢す

	方法	結果
A	觸肢の基部にワゼリンを塗りて雌に接す	懇々雌を慕ふこと切なり
B	觸肢の基部四分の一にワゼリンを塗りて雌に接す	前に同じ
C	觸肢の基部より中央部にワゼリンを塗る	少しく感覺鈍りたる感あり
D	先端四分の一を殘し以下ワゼリンを塗る	前者より一層鈍りたり
E	觸肢全部にワゼリンを塗る	全く雌を慕ふ感覺なし

是に依りて見れば觸肢の基部のみにて嗅覺を司るものではない、先端の一部分を殘すも尙ほ多少嗅覺作用を有するから觸肢全體は嗅覺作用を司るも、基部最も鋭敏である、先端に至るに從て鈍きものである。

尙ほ觸肢を種々なる狀態の下に嗅覺作用の距離を試むる必要がある、即ち雌蛾の發香器を紙綟にて摩擦し、其紙綟を無風のところにて雄蛾を誘引する距離を調査した、第五試驗によりて之を知ることが出來るであらう。

第五　觸肢の嗅覺距離

健全にして無傷なる雄蛾	一尺五寸內外
體の各部に傷けたるもの	一尺內外
觸肢全長二分を切斷せるもの	八寸五分
觸肢の基部二分の一をワゼリンにて塗りたるもの	五寸
檣枝を切斷せるもの	四寸五分
觸肢の基部のみを殘せるもの	三寸五分
觸肢の先端四分の一を殘せるもの	二寸
觸肢全部をワゼリンにて塗りたるもの	感覺なし
觸肢を全く切斷せるもの	感覺なし

以上の如く各種の方面より攻究するも觸肢は正に嗅覺作用を司るものであつて、其作用は觸肢全體に於てするも基部に敏く先端に鈍きものである、雌蛾も雄と同樣觸肢に存在するものたることは推知することが出來る、茲に至りて蠶兒の觸肢も確かに嗅官の存するものなりと斷じ得らるゝのである。

（未完）

集芳

生種と黑種

特別會員 埼玉縣農事試驗場技手　水野辰五郎

予は本縣に在つて、秋蠶種は黑種本位の主義を採れる一人であつたが、近來の學術進歩は、從來の主義を放棄するの已むを得ざらしむるなきを疑はしむる新事實が、發見せられた事を紹介せんと欲するものである。

抑も生種黑種の利害得失關係に就ては、今更茲に事新たらしく紹介するの要なきが如きも、今予が紹介せんとする方法に對し、其得失を判定する上に於ても、必要なる事柄であるから、少しく其關係を述べやう。

生種は如何なる缺點を有するか

一、生種は黑種の如く、自然の發生を風穴内に抑止せぬのであるから、蠶卵の生理を害する事無き良點あるけれども、左の如き關係より來たる缺點は、實に容易ならざるものと認

められつゝあるのである。

（イ）生種の原蚕種に施すべき究理方法なるものは、多少卵の生理を害する恐れがある、其方法にして誤まれるの場合に於て特に甚だしい。

（ロ）生種の原蚕は、月上旬、中旬よりの飼育であるから、恰も梅雨期であつて、即ち高温にして多湿なるの時であれば、蚕種家の技術巧妙を極めた者と雖も、不圖蚕兒を虚弱に陥らしむることなきを保證することが出来ぬ、況んや其技術の優劣はしら蚕種家多き現在においては、尚更のことである。故に其子孫に虚弱性を遺傳せしむる場合多く、即ち生種に多き大原因をなして居る。

（ハ）生種は産卵後十日前後で孵化するものであれば蚕種の檢査執行上、其蚕種の販賣に其だ不都合な原蚕の飼育期が、梅雨期で特に病毒繁殖に好適の時期であるから、一層檢査の嚴行を必要となすのに、事情有の如くであるから、如何とも檢査の嚴行覺束ない。

等が生種の主なる缺點として挙くべきものであらう。次に黒種においては、

一、黒種は生種と異ち、長期間風穴内にあつて自然の孵化を抑止せらるゝものであるから、其風穴の完全、取扱の至當を期すと雖も多少卵子の生理を害することを免れ得ない、即ち事實に於て、生種と同様に其孵化の良好なる黒種を見ることの出来ぬのが其一證である、然れども左に挙ぐる利益は大なる利益として之れ等缺點によつて何決して忘却し得べきものでない。

黒種は如何なる利益を有するか

（イ）一般の黒種は別段其原蚕に究理を施すの必要もなく、只單に普通の秋蚕飼育をなしたのより採種して、之れが翌春の發生を抑止し、秋蚕期の飼育に當つるのであれば、其取扱上、頗る便利である、且つ生種製造の如く、其原蚕不適當なる梅雨期の飼育でなく、夏秋期高温でこれ所謂清温とでも謂ひ得べき時期の飼育であるから、飼育上前者即ち生種原蚕飼育の如く困難を感ぜぬのである、つて之れより得る蚕種にあつても、虚弱性の遺傳を受け或は病毒の憂延を來す様の場合前者に比し少ない、即ち黒種に比較的良種の多い原因をなして居る。

（ロ）飼育者の希望に從ひ其發生を任意になし得るの便利がある、且つ越年種であるから、卵期間長く、蚕種檢査の執行上に於ては此の上もなく便利である。

飼育上の結果は同一でも成繭の品質は生種が良い

以上の關係がある所ありて、概して生種に不良蚕種多く、黒種に良種多き事實を現はし、爲めに從來生種の飼育を為しつゝあるの地方でも、近來一般に口を極めて生種を捨て、黒種を貴ぶ傾向を加へて來たのである、而しながら之れ等養蚕者と雖も、生種の飼育に多少經驗を有して居るものは何分かの未練を殘しあるや疑ひなく、即ち生種は蚕種にして不良蚕種の飼育を為すの便利なる、其孵化眠起の齊一なること

とより、其成繭又到底黒種の及ぶ所でない、故に今若し生種に對して親切なる判斷を下したならば、生種は必ずや黒種に優るの資格あるものであるから、前に述べた所の種々なる缺點を一掃することが出来たならば、今日の如く當業者の撰斥を買ふことなく、優る良蚕種として紙迎せらるゝこととなるやは論ずるまでもなく、生種黒種の差異は、予の比較を敢て年試みたものであるが、要するに生種黒種共に自分の手で出来、而して其原種同一のものであつたならば、飼育上の事殖と同一の結果を見るを得るのである、其成繭に於ては常に生種が優つて居る、即ち黒種の成繭に比し、其絲質の善惡、煮解の良否、極度の過剰、繭の多寡等に於ては、概して互に甲乙を見ることが出来ないであつたが、其繭形の豐大であつて、絲生物自然の理に適つて考へて見たならば、黒種なるものは二化性の第一化蚕である以上は、決して其成繭又生種即ち二化性第二化（多化性を論せず）の成繭に及ばぬは當然である、如何に遺憾なき貯藏催青を施こし、第二化性の性質を充分に發揮せしめ得たとするも、其結果は生種の營繭と等しい位、極度であつて、此事として今後の研究はいざ知らず、今日の處では未だ覺束ない、現に角繭ずる迄もなく、成蚕に於て黒種は未だ遙かに生種に及ばぬことは、風穴本位主義者と雖も認めざるを得ぬ事實である、然り故に前既に述べたが如く、生種製造上の種々なる缺點を一掃し得る方法があつたならば、之れ實に蚕界の慶事と謂はねばならぬ。

生種發生抑制法の研究

近時生種の發生を一時抑制する方法研究せられて以來、秋蚕界に種々面白き現象を示して來た、即ち生種の發生を一時抑制するのは、單に所謂貴殘り蚕種を貯藏する窮策手段たる許りでなく、其抑制は或期間を限度として、殆んど無害であることを認められて以來或は希望の時期に發生せしむる目的を以て、一時抑制をなすもあれば、或は又普通秋蚕種を晩秋蚕となす目的を以て

ふものもあり又一時抑制をなすときは蠶兒強健となるなど信じて、蠶種の購入者より之れを所望し來たることさへあるの事である、之れ等蠶種の一時抑制に關しては京都蠶業講習所に於て、幾きには多年研究せられつゝあるのである、予も又先年來之れ等に關し、多少經驗を有するものであるが、之れ等試驗の成蹟は產卵後適當なる時期、即ち四日乃至五日目の間に於て、生種を冷所に移して其發生を抑制すること約二十日間位までは、殆ど被害を認め得ぬのである、果して斯の如くであつたならば、本縣と其事情を同じうする地方に於ては、甚だ興味ある問題を產み出し得ることであらう、そは既に述べたる如く生種製造上現在に於ける種々なる缺點を一掃することが出來、且つ從來長野の特產かの如く流涎三尺して居つた生種の製造業が、容易に營み得るの一事である

左に其の方法を述べん。

生種の發生は如何にして抑制するか

要は二化性第一化期の飼育を春蠶期に於てし而して生種夏蠶種を製造し之れを冷所に移して抑制せば、優に秋蠶種生種として要用に應じ得らるゝ譯である、今我埼玉縣に於て此の方法を行はんとせんに本縣一般の春蠶掃立は、例年八十八夜前後即ち五月二三日の頃である、今若し二化性第一化蠶の種の貯藏を完全にし、催青の法又期の生理上害なき程度に於て、可成自然の催青に據るものとせば、五月十日頃まで掃立を延引せしむることに決して難事でない、尙ほ爾後の飼育に於ても、可成清涼の飼育により、其飼育日數假令五日乃至十日頃の上蔟となるとせば、掃立を六月十七八日頃の上蔟となる、即ち二化性原蠶の掃立を遲むるは一化性種との混雜の恐れを避け、又一は勞力分配上の好都合を得られ、尙ほ生種の發生を一時抑制する期間を可成短縮するの必要あるからである、六月十七八日の上蔟蠶は、更に十六七日間發生を抑制せば、其目的に叶ふことゝなる、前述の如く適當なる時期、即ち產卵後四五日頃の間に於て、適當なる冷所に發生を抑止せば、二十日間位は殆ど無害である、之れ等の實驗が證明せられたるあれば、決して蠶卵生理上の疑念に及ばぬ。

生種の缺點は遂に除去せられん

抑も右の方法を取ることゝせば、爾來唱へられたる生種の種々なる缺點を除去し得る、次第となる、即ち第一完璧方法の手段を取ること、第二從來の如く原蠶の飼育が梅雨期に於て爲すのと事違ひ、飼育上最も好適なる春蠶飼育の好時期に於てするのであるから、蠶兒の生理を害し又は病毒變遷等の心配は殆どないことになる、第三一時抑制の期間次に卵期を長引かすのであるから、從來と比較せば蠶種檢査の執行上に於ても極めて好都合である。

本邦秋蠶界の革命時期到らん

右の如く從來生種蠶種を不良ならしめつゝあつた種々なる缺點は優に一掃し得らるる事となる、風穴種製造者にして年々の憂作を期し難き狀態にある蠶種家が、今右の方法を採らば蓋し其多益即ち蠶を養ふことであらう、即ち方法にして簡にして要を得たらんには、本邦秋蠶業に對する主義本位を變更する所謂革命時期が來るであらう、今春は早速實行し度用的經驗を持つて居らぬのであるから、同盟の諸士は宜しく予と共に斯して見ると思ふのであるが、同盟の諸士は宜しく予と共に斯界の爲め實行界に經驗の勞を取つて戴きたい。

緒言

論者あり風穴種には二化性種に據らねば無害なりとなすもの、今若し一化性種或は二化性種とし、其の改良を許らば、風穴蠶種の成績如何の疑問に考ふることなかんと、然り予も左樣に信ずるものであるが、換言すれば一化性種の秋季飼育に堪る困難であり、又聯合種と雖も劇質の改良年を重ねなば一化性蠶絲に優られねばならぬが、之れ又飼育の困難は免れ得ない、一般養蠶家の技能一段の進歩を見るか、或に又一化性種或は其蠶絲質にして特に飼育が容易なりしるの良法、發見せられた上ならば知らず、今日の場合には飼育は到底望まないこと信ずるものである。

生絲整理法改善及統一の急

生絲檢査所

本邦輸出品中の首位を占む生絲の狀態を見るに品質區々、品位雜然其種別は幾百幾千であるか謬ちぬ、勿論原蠶が雜駁であるのは其素因であるが、今や蠶種の統一に就ては當業者間に論議の輩にして其成績所は一つでなければ多くは其目的を遂行すべき方法を異にするのみである、若も殘に蠶種が統一せられ原蠶が適定したならば製絲は自ら整すべきであらう、生絲齊整して優良多機であるのは曾に吾人が希望する計りでなく亦本邦製絲界の方針である、乍併當業者中繅製に法を師とすること頗る周到なるに拘らず、繅製後生絲の整理に就ては之れを放任して省みざるものが少くない、蓋し生絲の整理は製絲の未業であると思料するものゝ誤謬の甚しきものと云はねばならぬ、抑々物は其本末を完ムせなければ、其眞價を發揮すべきものではない、是れ生絲整理法とは、其眞價を發揮すべきものである、蓋し生絲の整理法とは、總の絲條を紊さず、捻絲の光澤を發揮せしめ、且括の形態を堅牢にし、絲條の切斷を防御し、以て取引上其嗜好に適合せしむるの方法を講ずるのである。

揚返法

小繭より大繭に生絲を揚返するに三法ある、合せ揚、單揚及重揚之れである、重揚は下繰へ繰留及力絲を施し、更に揚返しをなし、別に上繰へ繰留及力絲を施すものであるが、勞費が多くて利益が少い、單揚は一繰の繰量を凡十八匁内外に定め、之れに繰留力絲を施し、一繰一本の捻造をなすものであつて、嘗て米國機業家の勸奬により信州製絲家の一部で之を試みたるのに、其成績が佳良であるから年々單揚とするものが多くなるやうになつた、但此方法を行ふには乾燥裝置が適當でなければ、鏡角固着を起すの恐れがある、合せ揚は一繰量を九匁とし、之れに繰留力絲を施したるものの二繰を合せ、一捻となすものであつて、繰の乾燥をなし鏡角の固着を防ぐには良好なる揚返法である、生絲檢査所に於て製絲工場四百三十ケ所に就て調査したる成績に依れば。

重ね揚	三分
合せ揚	五割二分
單揚	四割五分

即ち現在揚返法としては合せ揚最も多く、重揚最も少い、而して單揚は年々増加し、重揚は之に反し減退の狀態である。大體の枠角は六角最も多く四角甚だ少い、即ち生絲檢査所に於て調査したるものは左の如くである。

四角	一割七分
六角	八割三分

繰留

繰留は生絲を再繰するに當り其索緒をして容易ならしめ、作業上の煩勞と時間とを省減するの便に供するものであるから此目的に適する方法を採用せねばならぬ。

繰留は大別して輪留と割留との二種とする、輪留は簡便にして且つ見易いけれども動もすれば其緒が移動して切斷するが爲めに、其効用を缺くことがあるから割留となるのが良しい、然れども繰の小部分を緊括するときは其緒を斷つことが容易でない爲めに繰絲を亂だすことがあるから宜しく故に先づ上繰を採りて折返し約十本となし、少しく撚りを施し繰幅の二分の一を割り、其幅に倣ひて之れを繞し、後ち下繰を合して繰の右方の耳に留めねばならぬが其位置は枠角より二寸隔りたる所にするが良い。

力絲

力絲は繰の形態を保たしめ絲條の紊亂を防ぐ爲めに施すものであるから特に繰絲又は太き絹絲等を用ゆるの要はない、力絲は再繰に際して之れを切斷するに容易でないものや、或は生絲を汚染するの虞のある染色絲等を用ふるのは宜しくない、故に力絲は四十二番手鯖二子絲を用ひ、繰の二ケ所に施すが良い、但し其位置は枠角より一寸隔りたる所即ち繰留と枠角との中央とし一は其正反對の所にする、其編方は五ケ所編とし、切り端を短くするのが宜しいのである。

捻造

捻造をなすには先づ能く繰を揃へ、繰留は繰の内面下方羅宇竹を去る三寸上方に其位置を定め、外面の繰を以て内繰を被覆し、撚り込みて繰交の亂れないやうにせねばならぬ、斯くして下撚を六回(一捻十八匁、標準)を施し、上撚三回を施すを以て標準とするけれども、繰の大小によりて加減をなさなければ緊縮其度を失ひ、捻造其他取扱上の不便を來たすものである。

一繭口の短きものは往々鬚を外づして、繭口を被覆するので生絲を損傷することがある、又其長きに失するものは亂れ易くして、外觀が美しくない、故に其長さは約四分を可とする。

一鬚は絲條能く齊ひて、其幅廣さに過ぎず首尾共に適當に緊り、特に繭口に接する部分を善く緊むるを要する、輕尻も亦絲條を亂さざる樣注意することが肝要である。

括造

括造の方法に二樣ある、第一重ね廻し造り、第二は撚み造り一名絞り造りと稱するもの之れである、孰れも其精巧なるものは殆んど優劣がないやうであるけれども、括造の容易なること、四部の展開すること少くして取扱の便なるとは前者の廻し造りて以て適當とせねばならぬ、故に生絲檢査所は之れを標準として括造の一定を勸奬してをる、括造をなすには先づ捻絲の色澤齊一なるもの其巾三分六本を選ぶ、第二、第三、第四、列中括、第四、列中括、第二、第三、第四、列中括、第二、第三、第四、列中括、第二、第三

生絲檢查所標準重廻造括

之れに因て之を見れば、生絲檢查所標準括造のものは五割一分の多數を占め、撮み造り僅に一割六分に過ぎない、之れを既往十年前に比すれば、主客轉倒の觀がある、然れども尙未だ改善せられざるものあるは自家製品の整理上に於て缺點の那邊に存在するやを察知せざるに因るか、又は改善せられたる生絲に逢着して深く研究を遂げざるにあるか、將た東裝の改善は其經費を加ふるものと思惟するのであるか、どうか當業者は時勢の進運を追ふて有利の商品を市場に提供し、製品に工を加へて其固有せる光澤眞價を發揮せしめんことを併て生絲束裝改善に嚮はんことを希ふのである。(未完)

催青溫度標準表を呈し春蠶種風穴貯藏を勸む

通常會員　庭屋千壽

私の經營致して居ます荒船風穴で既往四ヶ年間年々數十種、殊に昨年の如きは二百四十口の催青に就て親しく調査研究の結果左の催青溫度標準表を作りました、本表決定に就ては悉く大きからぬ頭腦を痛めたものであります、即ち貯藏時期を異にするも亦化性、種類を異にするも、勿論同種類でも製造地を異にすれば、最早や多少催青に差異を來します、尙一歩を進めて謂へば同種類同製造地でも、製造者の技術如何に因て又多少の差異は免れ能はざる有樣であるから、應用的のもので然も絕對的のものは到底不可能事と考へました、然し多少心配を加ふれば左迄熟練を要せず、本表に據て決して大差なきを信じ大膽にも茲に發表致します、先覺者諸賢幸ひに誤謬の點を認められなば、速に正し以て春蠶種風穴貯藏を普及せしめられて、春期不時發生などの失態なからしめ、如何なる冬期氣候不順の年柄でも必ず豫期の掃立を爲し得る樣に至らば望外の幸甚であります。

催青溫度標準表

日次＼催青日數	拾日	拾壹日	拾貳日	拾參日	拾四日	拾五日	拾六日	拾七日	拾八日	拾九日	貳拾日	貳壹日	貳貳日	貳參日	貳四日	貳五日	摘要
壹日目	七〇	六五	六五	六三	六〇	六〇	五五	五五	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	
貳日目	七八	七一	七〇	七〇	六五	六〇	六〇	五五	五五	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	
參日目	七八	七五	七〇	七〇	六六	六三	六〇	六〇	五五	五五	五五	五五	五〇	五〇	五〇	五〇	
四日目	七八	七五	七三	七〇	六七	六五	六三	六〇	六〇	五五	五五	五五	五五	五五	五〇	五〇	
五日目	七八	七七	七三	七〇	七〇	六七	六五	六五	六〇	六〇	五五	五五	五五	五五	五五	五〇	
六日目	七八	七七	七五	七〇	七〇	七〇	六五	六五	六五	六二	六二	五五	五五	五五	五五	五〇	
七日目	八〇	七七	七五	七三	七〇	七〇	六五	六五	六五	六二	六二	六〇	五五	五五	五五	五五	
八日目	▲八〇	七七	七五	七三	七二	七〇	七〇	六五	六五	六五	六二	六〇	六〇	五五	五五	五五	拾日催青ノ此日午後ニ於テ目付キ始ムルヲ普通トス
九日目	八〇	▲七八	七五	七三	七二	七〇	七〇	六六	六五	六五	六二	六〇	六〇	五五	五五	五五	拾壹日催青ノ此日正午前後ニ於テ目付ヲ始ムルヲ普通トス
拾日目	八〇	七八	▲七五	七三	七二	七〇	七〇	七〇	六七	六五	六二	六〇	六〇	六〇	五五	五五	拾貳日催青ノ此日朝目付キ始ムルヲ普通トス
拾壹日目	發生	七八	七五	▲七三	▲七二	七一	七〇	七〇	六七	六六	六五	六三	六〇	六〇	六〇	五五	拾參日催青ノ此日朝目付キ始ムルヲ普通トス拾四日催青ノ此日夕刻ヨリ夜ニ入リ目付ヲ始ムルヲ普通トス
拾貳日目		發生	七五	七三	七二	▲七一	七一	七〇	七〇	六七	六五	六五	六一	六〇	六〇	六〇	拾五日催青此ノ日夕刻ヨリ夜ニ入リ目付ヲ始ムルヲ普通トス
拾參日目			發生	七三	七二	七一	▲七一	七〇	七〇	七〇	六五	六五	六五	六三	六〇	六〇	拾六日催青ノ此日夕刻ヨリ夜ニ入リ目付ヲ始ムルヲ普通トス
拾四日目				發生	七二	七一	七一	▲七〇	七〇	七〇	七〇	六五	六五	六三	六〇	六〇	拾七日催青ノ此日午後目付キ始ムルヲ普通トス
拾五日目					發生	七一	七一	七〇	▲七〇	七〇	七〇	七〇	六五	六三	六二	六〇	拾八日催青ノ此日午後目付キ始ムルヲ普通トス
拾六日目						發生	七一	七〇	七〇	▲七〇	七〇	七〇	七〇	六五	六五	六五	拾九日催青ノ此日午後目付キ始ムルヲ普通トス
拾七日目							發生	七〇	七〇	七〇	▲七〇	七〇	七〇	七〇	六五	六五	貳拾日催青ノ此日午後目付キ始ムルヲ普通トス
拾八日目								發生	七〇	七〇	七〇	▲七〇	七〇	七〇	七〇	六五	貳拾壹日催青ノ此日午後目付キ始ムルヲ普通トス
拾九日目									發生	七〇	七〇	七〇	▲七〇	七〇	七〇	七〇	貳拾貳日催青ノ此日午後目付キ始ムルヲ普通トス

| | | |

印度に於ける養蠶

蠶室として建築したるものなれども、普通は住宅兼用である
から、此内にて眠り、又屠房の用を足すのである、六十「シー
ア」(一「シーア」は二斤)の牧繭を見るに一室にて十分なれど
も、二室に分飼するときは蠶兒の健康に適するを以て、二室
にて飼育して居る、而して眠は泥土にて造らず藁を用ひたる
場合には二枚を用ひ、其間隙に藁を塡充するのである、然せ
ざるときは少なくとも一方は泥土及び牛糞を以て塗り、冷熱

印度に於ける養蠶室「ルーブムラベ」

雨風の侵入するを防がなければならない、斯の如く二室を有
するならば、勿論、各別に養蠶をなし得べく、一年六回の育蠶を試
み、繭にて一「モーンド」半即ち少なくとも三十「ルーピー」の
價格を有する繭を生産し得るのである、然しながら養蠶期毎
に一「ピカ」(一「エーカー」の三分の一略一反三畝の土地に就て
き、三十「モーンド」九貫九百目位)の桑葉を得

印度に於ける養蠶「ルーブムラベ」

難しとするも、一年一回丈は一「モーンド」半の繭を得らるゝ
丈の準備をなさなければならない、且つ普通の住宅としても
蠶室に供用する以上は、一個の戸と二個の排氣窓を設けなけ
ればならない、又
寄生蠅の入らざる
爲めに付實を戸及
び窓の前面に垂れ
て置くが良い、朝
及夜は蠅
の侵入する憂がな
いから引上げ置く
との事である、大
陽の照り輝きて居
る間は常に垂れ置
く、若くは排氣窓の所
に水と「キロージ
ン」油とを混入せ
る浸き鉢を置けば
但し早く
蠅
の
蠅
の
烈しき時は窓
寄生蠅は少しも現
之に蠅は落ちて溺死するとのことであるけれども、之は實際
行て居るものを見ない、印度中でも南部の方に來ると蠅は居
らないと見へ、格別其準備はない、即ちマイソールのバンカ
ロール地方にては、金網の如きは更になく寄生蠅は少しも現
存し居らぬとのことである。

(未完)

昔を忘れぬ談話の一二

侯爵夫人　佐々木定子

近世女健傳の一人に入るべき御方なりと何人も稱賛して止まざる侯爵夫人が
曾て高輪御殿に於て御養育遊ばされたる常宮、周宮両内親王殿下の御養育
主任であられたることなど思ふに恐れ多き事一度は拜顔の榮を得たりなどゝ心勢
て御話を伺つたお何事も「喜代永伯爵夫人と同道那須の侯爵邸なる御奥様目に掛る得
なかつた然し侯爵夫人の一言一句は敬子さんにとつて誠に多くの事で平素の御行
跡は世の婦人の方々の御手本としやすきものであるから侯爵夫人の御話を夫
人のことに關し特に御かな聞いた話なども附け加へて書き綴り玆に掲ぐる事
にした侯爵夫人には定めし御迷惑の御ことゝ思ひどもこれ世の婦人の爲と思召
し御容赦あらんことを

罪なる話

島國に生れた貧乏士が國家に對して何の微功もなきに侯
爵などゝは外體ないことであります、たゞ朝愚の辱けなさに
感涙する外なく三度の御飯を頂く度毎に皇宮に向ひ、遙拜
せなければ御寝もとらぬことにしてをります大宮様も此老體

を深く御心に掛させ給ひ、時々厚き御言葉を賜はることて
ありまして餘命少き此體ではあるが御上へ差上げた心持で
大切に致してをります……私の歳ですか、當年七十二歳
になりました、田舎漢で何も御話するやうな事は知りません、
私のことは、下田(歌子女史)さんが一番能く知つて居られ
ますから、ドウゾ下田さんから御聞き下さい……下田さ
んも滅に御氣の毒な方ですよ、東京といふのに大層遠く書
きました、アンな虚を八百を書き立てゝ、は却て自分の爲にな
らないのです、アノ下田さんが姙娠をして隠くすに隠されず、
仕方がなくて支那へ行つて產み落して來たなどゝは眞赤な虚
そです、其の支那へ行つたといふ時には内親王殿下の御養育
掛りとして御殿に伺候して御出でをした、之れて直に譯ること
とではありませんか、ナンボ人を攻撃すれば良いといつて事
實にもないことを書き立つて攻撃するなどゝは罪な話です、
私も下田さんとは二十幾年といふ永い間交際して居りますか
ら、アノ方のことは能く知つて居ります。

内顧の憂なからしむ

私が佐々木家へ嫁ぎましたのは十六歳の時です、家の貧し
い上に舅小姑が澤山ありまして隨分ツライ思ひをしたことが
ありますけれど、之ではならぬと非常な奮發心を起して朝は
早くから夕は晩く迄子供を背負ひまして、夫をして内顧の憂
なからしめやうと心掛けて居りました、今は大宮様の厚い御
恵みで侯爵になつて居りますけれど、其の昔のことは決して
忘れたことはありませぬ。

自ら倒ひ自ら織る

左様私達が養蠶をやりましたのは丁度駿河臺に居た頃でありました、邸といふのは今のニコライ會堂のある場所が夫れでありまして、其當時桑は王子の方から持つて來たのであります、何しろ東京の真中で蠶を飼ふといふのですから隨分大騒でありましたが、信州から教師を雇ひ一生懸命でやりましたので結果はいつも悪くありませんでした、とりました繭は之を殊に拵りまして宅で繰つて普通着料として致しました、養蠶は靈南坂（今の靖太子殿下の御邸）へ越しましてから、一二回遣りましたが、両方には實事につけ不便でありましたから、いつとはなしに之を止めました。

昔を忘れぬ節儉

私共は平常宅に居りますときは綿服ばかりでありまして、世の中には借家して綿入の着物を着て居る人があるやうなといふことと廢物利用といふことゝは何より大切で私達も昔を忘れぬ爲めに常に此の心懸をして居ります、其だ可笑しなお話ですが下駄の緒などは曾帶地の切れで造つて間に合はせるのであります。

侯爵の略歴

夫は舊高知藩士で天保元年十月十二日に生れました、始めは三四郎と呼ばれて居りまして明治元年二月に議判所參謀助役となりました、十二月に始めて從五位下に叙せられ其の間諸役を御仰せ付けられまして三年紋付の羽織袴と菊御紋付の盃とを賜りました、明治十四年には勲二等旭日重光章を賜はりました、十八年に宮中顧問官を二十一年には樞密顧問官に轉じ、翌年より十七年には伯爵を授けられました、十八年に宮中顧問官を二十一年には樞密顧問官に轉じ、翌年より兩内閣に親王殿下の御養育掛を引續き常宮、周宮、主任を仰せ付けられ、二十六年には從二位を賜はり、二十九年には明治二十七八年の戰役の功によつて金盃を下賜せられました、三十二年には丁度七十歳になりましたので御紋付木盃と酒肴料とを下され、三十六年には正二位に進められ、三十九年には特に宮中杖を差許さるの恩命に接し、四十一年常宮殿の御慶事の際には金盃一個と金三萬圓とを賜り、昨年は丁度八十歳となりましたので御紋付のお盃を賜はりました、貧乏武士から出て今日位階勲等多い方に成りまして、聖恩の広大無邊なるに只々感泣するの外はありませぬ。（日繪巻照）

下野安曾神十第品に於て授賞等賞を得たる新潟七重井郡七郎右衛門製の絹織物部内繪巻

米國絹業談

學勢委員
農學士　紫藤章

過來實業團の一行中に加はられた米綿檢査所紫藤章氏が時々一行と離れて特に調査られた米國の絹業調査談に何人も之を聞かんと欲する處なる折柄に本會は本誌の為め之を掲載し勝く會員諸氏に紹介することゝしたのである

米國旅行に就て何か、土産談を致せとの事であるが、今回の旅行は多人數の同行者で、殊に甚多忙の間に極めて廣く浅渉した事であるから、見たことも分量より言へば少なからぬことであるが、何分短時日の事で此等の見聞せる事物を十分に咀嚼して其要點を穿ち談をすることは、自分の薄學短識なる力量では到底出來ない事である、併し折角の御依頼であるから今茲に極く拙劣なれど只實を盡くまでの御談を致したいと思ふ。

先づ順序として其道行きを御承知の通り、一昨年の大正三年、日本の東京始め外四箇所に向つて彼の大洋を渡り、米國太平洋岸の各商業會議所に招待を受けたる返禮として、我が商業會議所に對して、此結果に依りて所謂渡米實業團なるものが組織せられて、團員に成いたし、御依頼を受けられました、貧乏武士から出て今日位階勲等多い方に成りまして、聖恩の広大無邊なるに只々感泣するの外はありませぬ。（日繪巻照）

長崎澤男爵外五十餘名の多數の人が渡米することになつた此時に際して自分は政府より北米合衆國へ出張の命令を受けたのである、之を機會として横濱の生絲貿易商組合から自分に向つて、米國に於ける絹業の調査を囑託せられ、又横濱商業會議所よりは自分が其特別議員たるの故を以て、横濱生絲業に關する專門側の代表者として、自分を推薦して此實業團の一行に加はらしむる事になつたのである、然るに自分は既に實業團が横濱港を出帆せんとする前日に當り、所の出張命令を受けたので、終に實業團と同時に横濱を出發することは出來なくして、其次便船なる「エムプレス、オフ、チャパン」號にて、昨年の八月二十四日横濱を出立し、九月五日米國「シャートル」に到着して、直ちに於て光榮なる官業團の一行と相會する事となつた、而して彼地に於て實行つて見れば、主人側の太平洋沿岸各商業會議所の待遇は實に豫想外の優待で、實は恐縮する程であつた、其待の順序は先づ「シャートル」上陸以來、桑港に至る迄全三箇月間の日子を割り振りて、豫め其旅行の順序書を設けてあつたのである、此書は則ち何月何日何時何市に到着する者と觀ふ樣な順序で、其到着の時間等を出來る丈け其市街に於ける目的を以てキヤンと極めてあるので、御客分たる自分等は全然主人側の極めた儘の順序に依て彼地に於ては正に一夜の別なく、彼此地に於ては實に立働いて居る樣に見へる、而して主人側の滿足を得る樣に立働いたのである、右の順序書に依りて主人側の許す限りは其次第であるから、其物たるや、

くも斯る多數の場所を斯る繁忙の間に於て見る事が出來たものと驚くべき程である。此くして旅行したる日數が「シャートル」上陸以來桑港に達する迄滿三箇月、而して其汽車で驅りたること約一萬二千哩、又其經過したる「ステート」即ち州の數が二十六州、其間に見物したる市街の數約六十八箇所、水道工事、商店等の市街地に於て見物したる各種の製造所、各種の學校、試驗場、農場等に屬するものが約八十四箇所、各種の劇場、遊園病院、若くは慈善事業に屬するもの約二十四五箇所、其他銀行、取引所、郵便局、劇場、遊園市内の見物所、陳列場、寺院、書籍館等に屬するものの凡そ三十五六箇所、公園、公廨、名所、舊蹟、鑛工業、其他鑛山、鑛業、鑛物工場、機械製造所、石油製造所、コールタット製造所、瓦斯製造所、水道工事、鐵道工事、取引所、銀行、取引所、銀行、取引所、銀行

及養蠶の事を命ぜられて、其土地に居る者は土地百「エーカル」に付桑樹十本宛必ず植付け、若し之に違ふ者は其罰として煙草二十「ポンド」宛納め、双生絲「一ポンド」を製出する者は其賞として煙草十「ポンド」を交付する法律を布かれたが、右の如く保護奬勵に努められたにも拘はらず、其成績の見るべきものは甚だ少なかつた、其後千六百六十六年頃からは此養蠶奬勵の事も漸次衰へかゝつて居たが、十七世紀の末佛蘭西の「ヒューゲノー」といふ人並に英國人「サー、ニコラス、ヂョーン」と云ふ人等が米國「カロリナ」州に殖民をして桑樹の栽培養蠶の業に從事した、又一方英本國に於ては千七百十九年「トーマス、ロム」といふ者、撚絲工場を創立して蠶絲の需用次第に增加するに至つた、夫れて十八世紀の初め三十五年間位の間に於て「ルイジヤナ」「ジョルジヤ」の各地にも亦た養蠶製絲業が行はるゝといふのみであつて、其最も盛なりと稱せ絲の業が行はるゝといふ樣になつた、併し當時は養蠶製らるゝ、千七百五十年から同七十二年迄の間に於て、此等の地方より英本國へ生絲を輸入したる額は、平均一箇年五百「ポンド」内外で一千「ポンド」を越へたるは、僅かに一年であつたと云ふ事である。

右の如くして千七百七十六年米國の獨立戰爭の有りたる後即ち千七百八十年から千八百二十四年頃迄の間に於て、又の無いので、從來年々輸入したる絲が思はしく此養蠶製絲奬勵の成績が思はしく奬勵の如きも、千八百九十一年の議會に於て、此養蠶製絲奬勵の終に之を廢止する決議を爲した、從つて各州に於ても此奬勵金を交付せざる事となつた、此奬勵無くなり爲め養蠶に計畫されたる絲業は婦人の蠶業誌又は婦人の蠶業奬勵會の如きも、千八百九十一年に至り、今は只熱心なる婦人の手に依り數箇所に養蠶が殆んど廢滅するに至り、又は婦人の蠶業が殆んど廢滅するに至り、

下野産業品評會の模擬桑園（結束前）

得たる星霜瞬間に於て盛衰榮枯を有樣にて盛んに奬勵をしたに拘はらず、米國の養蠶製絲と云ふものは其結果は豫期と相反し多くは失敗に終つたのである今日も尙ほ「カルフォルニヤ」「カンサス」其他の各州を始め「ジョルジヤ」州等に於て養蠶の事を爲す者が點々ある樣であるけれども未だ一として其榮業をして成立するものは無い樣である、斯の如き勢であるので合衆國政府も其後終に此養蠶製絲奬勵の成績が思はしく無いので、從來年々金を出した奬勵金の如きも、千八百九十一年の議會に於て、之を廢止する決議を爲した、從つて各州に於ても此奬勵金を交付せざる事となつた、此奬勵無くなり爲め養蠶に計畫されたる絲業は婦人の蠶業誌又は婦人の蠶業奬勵會の如きも、千八百九十一年に至り、今は只熱心なる婦人の手に依り數箇所に養蠶が殆んど廢滅するに至り、又は婦人の蠶業が殆んど廢滅するに至り、

有樣にて盛んに奬勵をしたに拘はらず、米國の養蠶製絲と云ふものは其結果は豫期と相反し多くは失敗に終つたのである今日も尙ほ「カルフォルニヤ」「カンサス」其他の各州を始め「ジョルジヤ」州等に於て養蠶の事を爲す者が點々ある樣であるけれども未だ一として其榮業として成立するものは無い樣である、斯の如き勢であるので合衆國政府も其後終に此養蠶製絲奬勵の成績が思はしく無いので、從來年々金を出した奬勵金の如きも、千八百九十一年の議會に於て、之を廢止する決議を爲した、從つて各州に於ても此奬勵金を交付せざる事となつた、此奬勵無くなり爲め養蠶に計畫されたる絲業は婦人の蠶業誌又は婦人の蠶業奬勵會の如きも、千八百九十一年に至り、今は只熱心なる婦人の手に依り數箇所に養蠶が殆んど廢滅するに至り、又は婦人の蠶業が殆んど廢滅するに至り、

利益なりといふ事である、又當初米國に於て養蠶の爲めに使用せる勞働者は、多くは農人又は米國土人であつて、其低廉なる勞銀を利用したいといふのであつたが、此等の黑人及土人の事業として養蠶は餘り繁に過ぎる嫌ひがあつて、其結果は常に白人の勞銀は到底黑人の如く一日數十仙といふ微細の金員にては雇ひ得ぬので、假令幸にして養蠶業には敢て支障なかつたとしても、常に手を煩はすに及んでは、常に失敗に終はる事は已むを得ぬのである、故に近年彼地に於ては養蠶製絲業に從事する者は、熱心なる日本人若くは支那人を移入して、此業に從事せしめたらは如何であらうと云ふ說を米國に移住する以上は、日本人支那人共に此割の悪き仕事に從事するのは無かからうと思ふ、要するに合衆國の土地は由來養蠶製絲に不適當ではないけれども、其發達せざる根本的問題は常に勞銀問題に外ならぬのである、然らば北米合衆國に於ける絹織物業の狀態は如何であるか之は後日再び述ぶることゝしやう（未完）

千八百二十五年に至りて蠶絲業奬勵の問題は一變して、獨り各州の間題に非ずして合衆國の國家問題となる樣になり、一般人民の大に注目する所となつた、此の如き勢であつたので各州共夫々奬勵の法を設けて其州より補助金を出して奬勵す歩は見るべきものあるに至つた、是に於て米國政府は益々自國内に於ける蠶業の發達を計らんが爲め、愈自己の產業保護の爲め保護政策を採るの決心を爲した、即ち米國議會は千八百十六年より外國輸入蠶絲に稅を課する事になつた、其課稅の率を年代に依りて列記すれば左の如くである。

千八百十六年より千八百三十一年迄	從價稅一割五分
千八百三十一年より千八百四十一年迄	從價稅（割二分五厘
千八百四十一年より千八百四十六年迄	從蠶稅一（ポンド）に付き拾錢
千八百四十六年より千八百五十六年迄	從價稅一割五分

其後千八百五十七年に至りて蠶絲輸入稅は一時撤回せられたるも、尙ほ千八百六十四年亞亞細亞絲は歐洲より米國へ再輸出せらるゝものに限りては、從價一割の課稅を免かれなかつた、併し之も千八百六十五年に至りて全く廢せられた。

右の如く米合衆國政府は極力自國内に蠶絲業の發達を奬勵したる爲め、漸次自國產の生絲を原料として自國内に蠶絲業の自的を以て機業場を創立するに至つた、又一面には蠶に關する雜誌及び婦人の協會等が起り、斯業の有利なる事を盛んに鼓吹し、政府に於ても伊太利佛蘭西の蠶業先進地に官吏を派遣して其實況を調査せしめ、又農務省内には蠶絲の一課を特に設けて專ら其奬勵の任に當らしむる事になつた、此の如き

犬頭の絲

本會幹事
學藝委員　練木喜三

戊年に因んだ犬頭の絲や、戊年に起たる蠶業界の出來事なと聞かばやと考證正確なる練木現事かも許へ新年早々押しかけて聞き得た談話は左の如くである。お粉糊柴胃の路に引籠中の練先生煩しだる無遠慮ら虎敷に乘て紙付いたが、既に遅かりし胸く夜叉くる迄御邪魔でしは心なき業なりけりと慈に記して謝罪に代ゆ（しげとみ）

イヤ御岩出度ウ……相變らず……少し風邪の氣味で、醫者から外出を止められて居るから、マダロクヘモ御無沙汰デ……イエモクヘ大したこともありませぬから案支御座いませぬ、サア先程も電話でソー云ふ御話してしたがネ、急な御話しですから充分の調べも致し兼ねますが、心付いたことだけ御話致たすことに致しませう。

一體犬頭絲に關しては延喜式に三河國の貢の内に犬頭の絲と二千絇眞の貢とあるのみで、他に是を見ませぬ、延喜式に記載してある位でありますから其當時はあつたに違ひあるまいと思ひますが、其出處由來に就いては詳しく書いたものが御座いませぬ。貢にする位なですから何か由緒があるだらうと思つて居りましたが、他にはドーモないなくてすから今私しの申上げるのは、彼の今昔物語にある處の御話に過きぬと御承知置を願いたう存じます。

今は昔、三河の國の郡司某なるもの妻を二人もちて二人に蠶飼させ多く儲けけるが、或る年もとの妻（本妻ならむ）が蠶いかなる事のありにしか曾死してければ、夫なる郡司いたく其妻を疎みて他の妻許りにのみ住ひ、寄り來ずなりぬ、かゝりければ、もとの妻が住居は生活も貧しくなりまさりて人影淋しく、儚かに下婢二人許りと心細くも悲しき月日送りけるが、或る日扇にさすらひてフト蠶一つ桑の葉にのれて勢氣好く桑を喰ひ居けるを見付ければ、早速桑と共に取り入れて養ひける程にいよゝ太うなりまさりければ憂きを慰む料にもなりつゝひ、彼の妻いと喜びて葉を採り、日に〳〵に與へて飼居りしにツト飛びかゝりて蠶を喰ひてけり、彼の妻之を見て蠶一つの故をもて犬を殺すにも忍びず、つくゝ我身の上を省み犬に向て嘆らく蠶一つだに得養ひ遂ることは叶はざる身にしあれば吾が夫に疎ん疎らるゝも理ながら、等て吾が身は斯かる宿世の因果を身に受けしか、哀れにも悲しき極みなりけりと犬に向て泣き伏しにける、されど斯てだにあるべきにあらねば泪拭きつ〳〵面上しに犬はフト嘘してけるよと見るまに二つの蠶の孔より白き絲一寸程出てければいとも奇しさに氣も紛れ、其絲引きて見るに果てしともなく出ければ、あはてふためき、篭取り出でゝ繰る程に繰れども〳〵蠶きばかとも、篭の數二三百も繰りたるにいつ盡きん様もなきに、こなたの蠶は盡きてければそこに有り合す桶などに入きとりて大凡四五千兩程繰き取りしとう絲の妻くると共に犬は倒れて死にける。

彼の妻は嘆しくも亦恐しく、立ちつ坐りつ犬と絲と見こう見しばし思案に沈しが、是れぞ神佛の犬になりて妻を助けさせ給なるべし、斯程冥加に除る身の加護を垂れさせ給ふとは露知らず、身が徒らに宿世の因果ぞと御怨み申せしが今更面はゆしと、泣く〳〵犬の死骸取り上て屋の うしろなる畠の桑の根本に埋め心ながらの回向もすまし。

〳〵ト昨日に變る身の幸は、それと云ねど面晴れて繰り返しつゝありたりしが、郡司其前を過きてながしめにフト見やれば、再妻ならぬ吾妻は、うるはしき絲繰りてける。

繰る絲の美しさに眼嬉らみ立ちとまり暫し見とれてありしが思ひける様、吾家にて繰りし絲は額多く色黑うして醜し此石の惡くてか、將た妻繰ふ鹿の水鏡宮しながらに潤を流る、思のしてか寄り添ひて、事の次第を聞きてける、妻はことの有様こま〴〵と語り出しに郡司大に驚き斯くも神佛の加護あらせ給ふ人を疑んぜしとの愚かさよ、と心に詫びて此の妻が許に止り、後の妻が許へは行かざりし、偖彼の犬を埋し所の桑の木に蠶の繭を造りてありければ又それを採りて絲に引きけるにうるはしき事類ひなければ國司此の事を公に申し上げしかば其より後も此蠶より得たる絲を、犬の頭の絲と云ひ貢として奉りたりとか而して、右の絲は農人所に納められ當時の帝の御衣を織る料となりし云々。

東京蠶業講習所附屬蠶業試驗場

コオー云ふ譯であるのですがネ、果して信實カドーか其邊のことに素より物語にある處の御話に過きぬと云ふは、其由來が解らず、其由來を記したものを見れば右の次第……ト云ツタ様な譯であるのですから可然御扁ひ致して置きませう……ナに。

戊年の出來事

デスカ有りますよ先程も申上げた通り一寸調べた丈ですから充分には參り兼ねぬが御同様に蠶業上記念すべき出來事があると思ふ……トイフモノハ彼の但馬の國大屋の上垣守國氏が養はされた養蠶秘錄に據て世人の熟知する處となれる彼の如く種の起源の一として數へらるゝ關東に於る大洪水の在つた年が、或は戊の年に當りはせまいかと思ふので……併し信濃蠶業沿革史に依れば此の洪水の有りしは、正に寛保戊の年なりしとあるが、又彼の信州小縣郡鹽尻村の大家今の佐藤善右衛門氏の祖父たる藤本嘉福翁の說には寛保亥年でアツタも云ふから、果して孰れが事實か殘念ながら今から確かに斷言は出來ない。只だ年號の上には聊か疑點がある何故かとならば同じく小縣

郡國見村の大家塚田與右衛門翁の蔵に關る養蠶秘書の記事に依れば元文年間に既に彼の大如來流行のことがあつて現に此種の本元の福島縣伊達郡伊達崎村では享保年間に金丸と云ふ種が發向して伸々手に入らなかつたことも書てあるが、又同書に元文年には既に結城地方の種屋は伊達郡に種を仕入れて關東地方に賣り捌いたと云ふ說も載つて居る、依之觀是彼の地では既に此頃から盛に種が出來て居たのである。

ソレカラ

例の養蠶秘錄には此洪水の時を只或る時とのみしてあつて確然知れぬけれども其後五十里の洪水があつて結城地方はそれが爲に非常の慘狀を呈したことが書てある。一處で五十里の洪水を調査したが、聞く處に依れば享保八卯年八月八日の出來事であるシテ見れば前の洪水は寶保でなくして享保の間逆ではあるまいか、果して此の推測が確實となれば成年は享保三年に當ると云ふ次第デ……何れなるやは知るを得ぬけれども奥州種の本場を以て稱せられた起原は慥に此の頃からやらうと思はれるから、是亦一の好記念としてよからうと思ふデス。

此の外にも

記念すべき事柄がある即ち彼の養蠶書の中で就中古書として認められる、數種中、成年に發行せられたものは私の調査する處に依れば三種あります、其一は佐藤友信氏の養蠶秘語、之は明和三年丙戌年に當り、上垣守國氏の養蠶秘錄は享和二年で之が丁戌年に當り、次に成田重兵衛氏の養蠶組織が文化十一年で之が甲戌年に當つて居る。

夫れから今凡ての養蠶家が使用する寒暖計であるが此の寒暖計を用ゐるに至つたのは今から六十一年前の庚戌の年に當つて居るのである、何を以て其が斯く云ふかと云へば即ち此の書があるからで（古書を示さる）元と〳〵養蠶家の使用する寒暖計は其昔し蠶の計と云つたもので是は福島縣伊達郡梁川町の名家中村善右衛門氏の創製に關るもので其年度は弘化嘉永の頃であつたが、夫れを蠶業界に廣めんが爲に工夫者たる中村善右衛門氏が蠶當計秘訣と云ふ書を著はしたが嘉永二酉年である之には用法のこと同育法のことを詳に載せてあるが之を當業者が實地に應用するに至つたのは確に戊年からであると見てよからうと思ふ……御

明治の御代……（の戊年）

になつてから我國に養蠶製絲に關する試驗并に講習の事業を開始し、今日の蠶業教育の淵源を爲たのが明治七年で戊年である此の時は内藤新宿試驗場内に置かれたのであるが、其後今の蠶業講習所の西ケ原に移されて廣く蠶界全般の試驗研究并に學理技術の講習を行ふに至つたのは十九年の戊で御座此の年には蠶種檢査規則も發布せられた而も此の年の生絲相場は一百二十七圓方高かつたので、賣行も可なりと云ふ方よりも百一百二十七圓方の平均直段が、六百五十七圓であつたが、前年で、總數は二萬六千三百五十餘俵（洋俵）價格一千七百三十二萬餘圓で、前年よりも數に於て一千八百餘金高で四百二十八萬餘圓の增加であるが、此の節の生絲貿易の上から見れば數取り位に過ぎない程であつたが夫れでも此の年の一月以來の絲況はなか〳〵の活況で品不底の爲に相場は昇り七月下旬には歐洲向は全く賣切れと云ふ氣持よい捌け方で價かに來國向が幾つたけれども、之とて品薄のために買ひ戰ふと云ふ有樣であつた。

夫れから三十一年の戊年には蠶種檢査法が實施せられた此の年の生絲相場は平均價格は八百六十九圓で、前年よりも六十五圓方の高直で、其總數は四萬八千餘俵（洋俵）價格總高四千二百四萬餘圓を減じたが、……之れは年の三月に米西戰爭が起り十月には英佛に亞非加事件が起つた爲に減じたのであると云ふ樣な譯で大略の調査でも右の通り戊の年として記念すべき幾多の事實があるデスナ……ナニ

今年の戊年はドーカト

云ふ御尋ねですか……先づ私は戊は國音いぬに過ずて喊に李田度い考へを持つて居りますよ、今試みに去ることいぬといふ點から申さうなら、去暮迄の樣な不景氣は恐くインで仕舞つて今年からは曾好景氣を迎へられ材料を以て福さるゝと信じます、又吾家にも何處の家にも貧乏神や悪魔や病毒や煩腦の犬などはイヌ（居ぬ）の歳で滅るだからさうし絲價は騰るでありませうし、何一つとして我々に幸福ふる前兆ならざるはなしと云ふみても好いと考へます、右の次第でありますから御互に充分働いて此の記念多き好い年を益々多幸に益々多福に送らうてはありませぬか……マア其邊の處で可然……!!!

▲蠶業者大會

群馬縣と蠶業教育者共に去十五日午後一時より群馬縣農會に開會大會を開き蠶實統一遂行に關し今後十時まで協議を遂げたり其趣意義に本會より主報者へ答申せる所に基く政府の實行を促し明年度豫算中に計上せんことを求むることゝなれり因て此答申によれば蚕種費約百五十萬圓内外を要し今後に之を實行し驅さるものゝ如く思ふ本年度において本員風の實行に指を染めんことを期する旨を協議し其具體方法として群馬埼玉兩縣の代表者各四名に十七日群馬縣代表者と東京に會し致に國家聯合會を形我して本會将に大日本農會に詣り主務省に願書を提出し御賞乘雨段に向て大運動を試むべしとのことなり

實務

養蠶年中行事

愛媛縣立農學校　池田榮太郎
馬場由壹

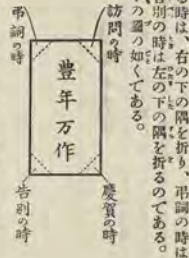
壹月(小寒)

晨鶏一聲驚月の舊夢を破れば、旭日燿々として東天に昇り四海の風物舊を送りて更に新を迎ふ、洋々たる和氣藹然たる瑞雲と化して高く天を蓋ひ、萬歳の聲は地より湧き昇りて限なく充ち渡り、千門萬戸の門松は千歳の翠を添へ、竹は萬古の色を保ちて榮へ行く御代の姿を現し、軒毎に飜へる日章旗は輝く御國の稜威を示す、吾人は幸にして此の聖世に遇ひ、山の如く高く海の如く深き鴻恩に浴して居る、されば此新正に際して陛下の萬歳を祈り奉ると共に刻苦硯磨以て聖恩の萬一に酬ひ奉らんことを期せねばならぬ。

名刺使用

年の始めに、新年賀會又は祝賀會を開きて名刺の交換をなし、樹しく聖明なる新年を祝し、國家の萬歳を祈るが是れ今日の慣例であるが、吾人は尚ほ併せて茲に我が蠶絲業の幸榮を賀すべきである、サテ近年名刺に意匠を凝らして二十錢乃至三十錢のものも珍らしくない、是れ一般に驕られたものであらう、然るに名刺を使用するに、概ね名刺を折らずに其儘に使用する樣であるが、歐洲にては名刺を出すときには必ず其一隅を折りて使用するを常とし、慶弔訪問夫々其折方を異にし、又一定の方法があつて其名刺を通じ出するなり、先づ其人に接ざるも其の名刺に依りて何んの用件であるかを知ることが出來る、是れ彼我の便宜を計つたものであらうが、近來我國に於ても一般に此法を用ゆる樣になつた、其折方は通常訪問の時は名刺の右の隅の上を折り、慶賀の爲めに名刺を通ずる時は、右の下の隅を折り、弔詞の時は左の上の隅を折り、告別の時は左の下の隅を折るのである。

例令ば下の圖の如くである。



其他夜會若しくば集會等に參集の時は名刺を中央より横に折り、初めて面會を求むる時は左の上隅より右の下隅に斜に折る、之等の事は一般に心得て置かねばならぬ。

各種の會合

養蠶家は一ケ年内の仕事を前年の狀況を察し、本年の氣候を豫想し、萬端の準備に勉むるは最も肝要なることである、殊に今日は養蠶家も農家も眼るあるから、各種の會合即ち蠶業講話會、研究會、演說會、幻燈會、協議會、懇親會等を開きて新業の改善を講じたり、同業者の交誼を暖むる等は實に有益なことであるから、必ず是等の會合を催し又は農學校或は經驗家に就て其道を學ぶも宜しい、若し事情に妨げられそれも出來ない人は獨り書籍を繙きて研究するも可なりである、そこで本年仕事の手始として行ふべき業務は第一蠶種の寒水洗滌である。

蠶種寒水洗滌

蠶種を寒水に浸漬する目的は卵面に附着して居る汚物即ち鱗毛、蛾尿、塵埃及び其他傷染性を有する病毒等を洗滌して清潔にするのである、之を行ふ時期は寒中が最も可しい、但し寒國地方は十一月中旬頃から行ふても差支なし、何故なれば此の時期は生物の發育を止めた時であるから水も絶て有機物を含有せずして清淨である、且つ到る所に浮游せる微菌等も此時には殆ど其活力を有せず、又當時は蠶卵の呼吸最も微弱なる期であるからである、今左に項を分ちて其方法の概略を記し度せう。

(一)寒水洗滌は最も寒氣最厳しい日の早朝に行ふのである、暖かい日は宜しくない、然し盆に曝露を加へた時は其後の天候を良く考へた上之を行ふことにせねばならん。

(二)蠶種又は換種の用に供する水は清潔のもので、一回目晝未明の頃に二箇の手桶又は盥に汲み取り、之れに盥なりて成るべく蠶種既埋に接近した所に置き、水中の塵埃を沈澱せしむると同時に、其水の溫度が空氣の溫度と略々同一となつた頃合手するのである。

(三)蠶種紙を取り一方なる容器の水中に浸漬して、凡そ二三時間の後其水の少しく汚れた頃取り出して斜なる板上に置き、柴い刷毛か或は大きな筆に醇之を洗ひ、更に一方の容器の水中で洗ふのである、孰時間水中に浸漬するものもあるけれども、是れは蠶卵の生理上良だ宜しくない故に長くも概ね五六時間番長到は十時間乃至十五時間を越へてはならぬ。

(四)蠶種を洗つたならば乎かな盥盤の鑑或は清潔な床上に鑑を敷き列べ、蠶種を水氣を去つて全く水温を止めない程に至つて蔭干となる所に晒し翻りて乾く、決して日光若しくは火氣に近づけてはならぬ。(養蠶秘水

温のあるうちは殊に熱りとすず、固して蠶種の周端に絲を附け置き放飼の終るまで毎日二回づゝ上下し動け後へ、金剛一樽に選進を乾く樣法意ればなるべく、然りてなければ他日發生に臨んで多の過進を生ずるの恐れがある。

（五）寒國地方にあつては水氣の全く去らない間は氷結するから、長日數を要する如き場合、蠶業者は暖或は火力を用ひて氷結を防ぐもあるが、如何に暖かからといつても害なきものなれども、換して過夫氣及び暖かなる場所に出すは其てない、又用ゆる蠶器は總て清潔でなければならぬ。腐臭、臭氣、香氣、腥氣、酒臭等凡そ刺戟性の氣味あるものは最も有毒なものである。

（六）注意なるは乾き不充分にて貯藏するときは濕氣の籠めこ蠶卵を害すること甚だ大なるものであるから、溽暑の蠶種一枚毎に其重量を量り、之を測量に記し置いて乾燥後迄と同量以内になるまでは貯藏してはならぬ。

蠶種貯藏器

蠶種貯藏器には種々の構造法があるけれども、何れも大同小異であるが、併し其目的とする所に於ては何れの法にても異なない、今茲に東西蠶業講習所で專ら使用せらるゝものを擧げて參考に供しやう、能く乾燥した香のない木材を以て二重の箱を造り、内箱と外箱とは少くも四五寸以上を隔て、其間に燒瓦（又は黑色に燒き焦したもの）又は乾燥した粒狀、鋸屑若くは登心屑或は生石灰等の如き不傳導物質を填充し、蓋の閉合部は俗に言ふ印籠蓋の形として厚き羅紗又は綿布を張り極めて緊密せしめ、蓋の中央に小孔を穿ち之に寒暖計を挿入れて箱内の溫度を觀測するの便に供するのである、内部の容積は貯藏する蠶種の數に應じ大小を異にするといふことは勿論なれども、百蛾の產卵一枚に付き概ね「一リットル」、「我が五合五勺」の容氣を與ふれば充分密閉しても空氣缺乏の爲めに卵子の生理上に害を與ふることはないから、一枚に對し五分以上の間隙を與へて、蠶種を和密に接せない樣別に造つた種架に挿入して、箱の内に納めて寒暖計を挿入した小孔の周圍には綿花若しくは護謨を挿入して外氣の侵入を防ぐのである。

イ
ロ
ハ
ニ
ホ
ヘ
ト
チ
リ
ヌ
ル
ヲ
(イ)
(ロ)
(ハ)
(ニ)
(ホ)
(ヘ)
(ト)
(チ)
(リ)
(ヌ)
(ル)
(ヲ)
取の手
外のたるも
内の明も
明の
明の
明の

り、乃ち本邦在来の器械に自己の考案を加へ之に伊佛の器械を参酌して遂に乾燥式再繰蒸汽器械を創作し、二十五年一月中漸く其の工を終り非常の好成績を得るに至れり。

貯繭法を創案す

本邦の氣候たる、空中常に多量の濕氣を含有すると以て天然の乾燥及杜撰なる貯繭法に基くときは繭質を害すること甚だしく爲めに製糸上の効み多くして量産に減じ、且つ品位を著しく失墜するの缺點あり、君大に之を慨し只管之れが改善に寧心せしが、二十三年四月中會々森田眞氏の著一貯繭新法一の出づるに遭へるより直ちに一本を購ひて其の法を試みしも、情い同年森田氏病て逝きしより其遺志を繼ぎて其の法を攻究し幾多の苦難を嘗むること數年遂に明治二十五年乾燥貯繭を創案せり、該法を用ふるの結果は解舒を良好にし絲量を増加すること、蒸しきものあるより遠く之を凌へ、聞き、亦自費を投じて該法の有利なるを明導せしより前記の故良製絲器と共に各府縣廳、農商務省、學校、横濱、神戸、兩生絲檢査所等より參考備品として要求し來るもの續々として絶えず、二府十六縣の當業者亦相率ゐて來り說つて其の實地傳習を受けしより該法は今日殆ど全國に行はるゝに至れり。

生絲切繊器を發明す

本邦の生絲由來個節の多きを以て歐米に郤けらる、君常に之を慨し其の改良に心を潜めたりと雖も未だ良案を得ず、時に明治二十八年横濱生絲合名會社組織育支店長新井領一郎氏我邦絲家を戒めて曰く「本邦の生絲細節の多し今にして之が矯正を計るにあらずんば遂に教ふべからざるに至らん」と君茲に於て大に心を勵まし其由て來る處を探査して其の原因を究め苦心熟慮の結果遂に一の生絲切繊器を發明し明治二十九年九月特許權を得るに至れり。

蠶種「伯陽」の選出

君本邦の蠶糸にして形狀、繭質、纖維齊一ならざるより製絲に多大の困難を感ずるを嘆じ、率先良種を選定して之を絲一せんと欲し二十七年横濱生絲貿易商盛澤商店に托して清國種、歐米種、農學校養蠶教師正垣種、太氏種等を輸入し之を同縣農學校養蠶教師正垣種、太氏に依囑して飼育を試むること三年遂に二十九年七月に至り本邦未曾有の良繭を得るに至れり、然るに翌三十年に至り同縣中央蠶絲組合聯合會は其の規定に依り同縣下飼育の蠶繭、熱、小石丸の三種中青熟に代ふるに君の新選に係る清國種を以てせんとの決議せり、由て君同農學校長山瀬幸人氏と謀り該種に「伯陽」と命名し、偏く無代を以て之を養蠶家に頒付し以て盛に其の飼育を誘導せり。

「山陰又昔」の普及

君義に「伯陽」を得しも黒斑年の統計比較の結果は本邦の蠶種を根本的に改良せずんば滅亡に陥るの勢を君に示し、君更らに三十一年正垣太氏外數氏と謀り六月農務省の認可を得て東伯郡蠶糸同業組合を設立し爾ほ自ら四十餘坪の三

階建原蠶種製造所を建設して組合に貸與し正垣氏を技術擔當の任に當らしめ各種蠶繭中の良種を特選し特別改良蠶種を製造し、別に該組合の規定に基きて種繭選定會を組織し以て蠶種の改良を促したり、然るに三年三年不幸にして政黨紛爭の餘波を蠶糸業界に至れるより翌年郡山陰製糸會社内に蠶種部を設け正垣氏を以て技術師たらしめ、遂に還元原種法を採用し「山陰又昔」の良種を得たり、然るに「山陰又昔」は天候不順の影響を受けること少く、普通蠶種に比し三割以上の増收を見且つ絲質善良にして絲量豊富なるより東伯郡は勿論時に同種を飼育するに一定し漸次東西に普及し、本縣又同種を推て一種としたるより終に名を天下に博するに至れり、該蠶種の注文年々數萬の多きに達すといふに至りては君が苦心亦其の功しからずといふべし宜なる哉君明治初年以來各種の公職に從ひ常に誠意を盡くして事に當り縣令を受けたること、本會總裁宮殿下君が蠶界に盡くせる功を嘉みせられ明治四十年二月第二回總會に於て賜ふに金賞牌を以てせられたり、君希ばくは自重自愛蠶界の爲めに永く力を盡くさんことを。

優等賞の光榮を擔へる白石製絲所

白石製絲場は何處に在るか

重富三男三

とは勿論遠なく、敢て御龍を乎して奥州仙臺白石詰チロ

蠶糸賞の光榮を擔へる白石製絲所

昔に勝るものありや

然り一つあり萌芽を白石としては持て居るかは知らぬが、現在に於て余の知れる範圍に一つある、誇りとするヨリ多くを持たぬが慣かに一つある、敢て粹を以てしては……意氣を以てしては昔しながらの白石なるものに、及ばざるや遠矣の感はあるが實用的に而かも宇内に通ずる點にシ〳〵の粹な記憶を呼び起さずとも、既に白石と云へば昔し奥州、今は宮城縣で刈田郡の白石町なるとは改めて茲に記する迄の要もなからう、要はなからうとは思ひけれどもダガ、ガアマアーに就ては五月の田植の時を以て有名な白石でも、夫は米と白石との關係であつて、我等の推はる蠶とか絲とかには除りの關係を持たぬ、田植を夢みればヤガ、ガアマアーを思ふが、白石を思ふ……其白なる音響なり文字なりが耳朶を打つ一瞬間に若しくは眼に映じた一刹那に……？絲！！のことを思ひ起すものの數は恐らくあるまい物の數には入らぬ我蠶ヂヤから云ふと全く然りと答へよる外に何者を持たぬ、……然り今日迄は刈田郡白石町及其附近では白石なる名と共に或る他の記憶を刹那の間に喚び起したかも知れぬ、御其區域を大にすれば濃度の淡び記憶の何者かを名と共に呼び起したかも知れぬが、全國に亙り上は姫君始め率相より下は端一八公に至るまで、名の音響文字の印象する刹那に記憶を新にしたのは白石としては他になかつた……然も他になく、然らば今日以後

昔に勝るものありや

然り一つあり萌芽を白石としては持て居るかは知らぬが、現在に於て余の知れる範圍に一つある、誇りとするヨリ多くを持たぬが慣かに一つある、敢て粹を以てしては……意氣を以てしては昔しながらの白石なるものに、及ばざるや遠矣の感はあるが實用的に而かも宇内に通ずる點に

於ては適かに絶絶せる材である、彼は姫君初め宰相より熊八公に至る有ゆる階級を通じても恐らく國内に止まり時の推移と共に今は又消え行く感がある、又は、憂國の志士仁人も恐ろか、蠶絲業なる階級を通じて遠く歐米の機業家に迄、胸炙さるに足る否、胸炙さるゝ誇るべき材で今日以後は慟して事柄の新しい丈け尚實用的であるだけ、それ丈け強く印象を復現するであらう……其復現する印象とは何？即ち今次の本會、宮城支會品評會に出品して優等の選に入り總裁殿下より賞牌を賜はれたる生絲……其生絲を製せる白石製絲所是である……嗚呼、白石製絲所……何たる光榮……何たる名譽ぞや、僕は今稿を起す中できへ白石町を想像し其製絲所に働く工女が整然として湯釜の折工場主の姿よりも、働きつゝある工女の嬉しさはドンナであつたらうと想像して見るが、又勝つて兜の緒をゞ賞

會社から郡に橋送をしめ、十五ヶ年後には全部會社の手に移ると云ふ組織で三十四年の春繭から繰絲し初めたのであるが今日迄いかなる年でも常に順風に帆を擧げ蹉跎轉覆がなきのみか、エキストラを挽いて多大の配當と積立金とをして居る殊に現社長鈴木清之輔君を得るに至つて一段の向上をしたげつゝあるのは此の性格に負ふ處少でない、誠に製絲界に取つては誠へ向きの人である、敢て製絲界のみではない、其性格は銀行界に於ても、通信界に於ても必要とする處で、君が過去半生は僅に此の方面に於て稀有の成功をして居る、吾人は白石製絲場の爲に永く其椅子を離れざらんことを願るのであるが。

抑も此の誇るべき

記錄を會社組織の製絲場が有するに至つては其偏に研究の價があるではないか、コヽダ我童が精神美程崇高雄大のものはないと云ふは、ドコを叩けども精神、誠意事業の爲に、家の爲に、町の爲に、國家の爲にと云ふ響の外には何等の骨奪も漏れぬ、斯る鼎の足があり、斯る輪があるからして美しい花も咲のである。恐らくは豫期に違はず白石は永くいやし増しに榮ゆるのであらうが、解剖して見たいのは鼎足となつた三氏の面影である。

白石製絲所事務所主任鳥居忠三郎君

けれども佐藤君は茲に贊するに及ばまい。

鈴木清之助氏、日輪參照は該製絲場設立當時謀議に與つた味右工門氏の長子で、宮城縣下に於ける青年實業家中の卻々たる者である、思慮堅實、用意周到、精緻なる觀察眼を擧げて事を處する果斷である、蓋し白石製絲場が順風に帆を擧げつゝあるのは此の性格に負ふ處少でない、誠に製絲界に取つては誠へ向きの人である、敢て製絲界のみではない、其性格は銀行界に於ても、通信界に於ても必要とする處で、君が過去半生は僅に此の方面に於て稀有の成功をして居る、吾人は白石製絲場の爲に永く其椅子を離れざらんことを願るのであるが。

船がよくつても

船長がよくつても航海長が悪かつたら本業を闘り各せたボロ船に敏腕の航海長が居るに劣ること數段である、製絲業上に於ても最も其嫌ひがあり、船に於ても航海長に四敵すべき製絲場の航海長は現業長である、白石製絲場は現業長を得たと云ふ點に就ては、余は少からず感謝の意を表せざるを得ぬ、温厚の君手面も枝に長じ、十年一日の如く創立以來專心部下を育勵して餘念なき様は森本幸太郎其人である、多くは現業長其人を得ぬか或は、現業長が自己の輪を飛び出したがるものであるから、君は敢て其輪を殺ぼめはせずやの嘆があるのであるが、君に於ては、温容迫らず、不平の工女も工場に入て君の顏を見たならば不思議に怒りは釋くるであらうと想像するは

記さねばならぬのは以上の三氏を繋ぐ輪たる工女である、人は非常の出來事に逢へば非常の變化を來すものであるが、又變化せずに意氣を增大するものである、會々異常の火災に逢へて涙をながらに非常の刺戟を與へるものである、偶夫時代の意氣を增大し堅忍自重勉めて、止ぬ向上心を製絲場と共に起して、我家を昔の面影に引き返すべく、更に之を美化すべく一心不亂に動いた其勇奮的智慧ひ性となつて美しい白石の花を咲くに至つた者である、今日から見るならば個性となつて居ればども、其最初に於ては働くもの、統御するもの、背の折た事てあつたらうと想像するが、兎に角此の性格を神、上から導き得た佐藤文衛君の企畫は没却してはならぬ、是と同時に德化するに殿々たる森本君、他面には間接に製絲場を運轉せしめた鈴木君の功果は没してはならぬ、何故なれば若し運用其當を誤り、拆角增大しかけた工女の意氣も鈍らざるを得ぬハメに陥る、斯くて光調が亂れるならば以上の外に事務の上山田誠一君の功も與つて力あるが經營其他は他稿に記すとして、茲に一先づ擱筆するが、終に臨み若人が白石町の爲に所謂の省みて各自が恭儉己を抑すると共に事業を愛されんことを、懶かに君は其滿身を迸る優婉の性格を以て不言の間に、工女を懷かしむる働を以て居る、之が抑も得られぬ工務長たる所以である。

マダ此の外に

優等賞の光榮を擔へる

鮎澤房太郎君

養蠶製種の法を究む

君は山梨縣東山梨郡休息村の人、家固と高僧を出だしたことあり世々農桑を營む、君が父朝智氏亦農桑の業に親しむこと深く、彼の輪川蠶種の製造に從ひ、其業既に盛なるものありきと雖、好事魔多く遂に失敗を來す、然れども父君之に屈せず更に業を新にして內地用蠶種の製造に從事し南北都留地方へ販賣して良種の評を得たり、君幼より農桑の業を好み風に父君の業を扶け其大の功あり、二十歳にして既に父に代りて養蠶製種の事に從ひ、豐凶と養蠶の盛衰とを自己の實に歸し、然れども君常に時何面の身に鑑み、事に當りて解し得ざる點に遭遇すること數次、而かも常に之を誠みとせり、明治二十三年君乃ち發然として蠶業を科學的に研究せんと欲し長野縣小縣郡の蠶種製造家氏を聘して學理と實際との二面より製種用蠶見の飼育法及製種法を研究し、變化偽ぎ心に之を專にせしより君研鑽未だ幾干ならざるに已に自得するところあり、某氏の如きも其の記憶の速にして應用の才を驚嘆するに驚倒せしと云ふ、かくて君其の行ふところの養蠶及製種の目を悉く一新し在來の長所を採りて短所を捨て、之に得たる智識と技術とを加味し以て父祖の業をして陳腐たらしむるに至れ

優等賞の光榮を擔へる白石製絲所

養蠶製種の法を究む

君は山梨縣東山梨郡休息村の人、家固と高僧を出だしたことあり世々農桑を營む、君が父朝智氏亦農桑の業に親しむこと深く、彼の輪川蠶種の製造に從ひ、其業既に盛なるものありきと雖、好事魔多く遂に失敗を來す、然れども父君之に屈せず更に業を新にして內地用蠶種の製造に從事し南北都留地方へ販賣して良種の評を得たり、君幼より農桑の業を好み風に父君の業を扶け其大の功あり、二十歳にして既に父に代りて養蠶製種の事に從ひ、豐凶と養蠶の盛衰とを自己の實に歸し、然れども君常に時何面の身に鑑み、事に當りて解し得ざる點に遭遇すること數次、而かも常に之を誠みとせり、明治二十三年君乃ち發然として蠶業を科學的に研究せんと欲し長野縣小縣郡の蠶種製造家氏を聘して學理と實際との二面より製種用蠶見の飼育法及製種法を研究し、變化偽ぎ心に之を專にせしより君研鑽未だ幾干ならざるに已に自得するところあり、某氏の如きも其の記憶の速にして應用の才を驚嘆するに驚倒せしと云ふ、かくて君其の行ふところの養蠶及製種の目を悉く一新し在來の長所を採りて短所を捨て、之に得たる智識と技術とを加味し以て父祖の業をして陳腐たらしむるに至れ

客氣新事業を企てゝ成らず

君が熱心なる研究によりて漸く其面目を改め發展の實を擧げ、家れども客氣過ぎるし易きよく之に默し得べき、乃ち明治二十九年從來の舊態に新生面を開かんと欲し事を父君に托して自ら絲綢西となり、兼ねて國產唐絲織を京濱地方に行商して成功の端兒たらんとせしが奮勵刻苦して面白くも何の優るところなく春風秋雨空しく過ぎて唯自己の老ゆるあるのみ、此卒然として覺るところの澄業にして製糸業は父祖よりの遺業にして、年々、三十八年に至りて、鳴呼過去の夢、嘗て

彙報

蓖麻子の葉を以て飼養する蠶兒

農學士 藤田敏郎

（外務省への報告）

蓖麻子の葉を食する「エリー」又は「エンゲー」Ricinus Eri, Ricinus 學名 Ricinus Cibus は飼養頗る簡易、蠶蛾孵化其食料たる蓖麻子葉に本邦九州四國琉球及臺灣等に於ては四時繁茂する見込がある。得る處の絲は黐絲となし、繭殼物其他となし、且繭の見本蓖麻子の種子を再三回送したが、未だ本邦に於ける人々の注意を惹起せざるものと思はるゝ、因て近日公表せる在ブサ眞事試驗場馬島學士「マクスウエル、レフィル」氏の「エリー」に關する研究並に「ラス、ウ、ムケルウ」氏の「オンゴール」所説他評説を參照し左に「エリー」蠶飼育の概況を述べやう。

エリー蠶は Attacus cynthia と稱する「ヒマラヤ」山及「アスサム」洲に産出する野生蟲を馴飼したるのであらうと云ふのである、從來印度に於て飼育する地方を「アスサム及東ベンゴール」州に限られたが、過る二年間「ブサ」試驗場に於て試育せしに良好の結果を擧げたのである。

エリー蠶の特色は第一蓖麻子の葉のみを食用し、桑葉を食はない、第二繭の方は閉ぢられず、蛾は繭を破ることなく自由に脱出する、然るに絲の口は無數であるから、繰絲は困難であつて印度では絲結を專らとするけれども佛國では繰絲の良法を發明したと云ふことである、第三右の如く蛾は繭を害せずに出づるから、他の蠶の如く蒸殺する必要はない、第四エリー種は一ケ年七八回孵化するから、少數を飼ひ、從て蓖麻子葉多き時は多數を飼養し、少きときは少數を飼ひ、容易に次期多數の蠶卵を得る便がある、第五エリー蠶及蛾は充分馴養されて居るから、室外に出づることはない、第六エリー蠶は强壯であつて、流行病的疾患に罹ることなく、家屋の構造如何に拘はらず、蓖麻子の成長する地方に於て飼育し得らるゝので「ブサ」にては竹柱草葺の小屋にて飼養している、第七エリー繭は煮て棉の如くなし、棉花と同樣紡績し、其絲は以て棉絲の如く容易に織成することが出來、其織物は丈夫である、第八エリー絲は染色容易に且褪色せない特色がある、殊に植物性色素に良いのである。

エリー蠶の生活、他の蠶と同樣四段落ある、第一蛾、第二卵、第三蟻、第四繭中の蛹となる、蟲の中に四回蛻を脱し毎回著しく成長する、四眠を終り四五日の後繭殼の一部分をかざる）態をなすを度とする、荷造用の絲の如く細く割りたる木、乾草、乾葉を充たしたる竹籠中に投じ成繭せしむるに繭は凡そ三日を要し七日の終りに繭を取集め製絲又は種取の準備をする、蛾は前に記載せし如く繭を噛破らずして容易に脱出するものであつて繭より出れば直に繭の上に多量に脱蕊する、從て出づるや否や他の竹籠内に移入するを法とし、印度にては竹籠内に産卵せしむる、或地方にては籠の内に米藁を入れ、其藁に産卵せしむる、一雌蛾は通常二三百卵を産するけれども、强健なるものを飼養せんとする者は初夜に産みし七八十個のみを取り翌日母蛾を棄てる、乾燥期には蠶卵の上に濕ひたる布を覆ひ、雨期には覆はず、斯くして孵化するものあれば蓖麻子の嫩葉を其上に置き、幼蟲の葉上に登るものは、葉と共に他の竹籠に移すのである、從て床を替るも亦此方法に依るのである。

「アスサム」州産地にては一ケ年七回「ブサ」にては七回成繭する、暑期には卵より蛾に變ずる迄四十五日を要し、一二月の冷期には八十日を要する、エリー蟲は印度北方の乾燥したる華氏百一二十度の暑氣には體力衰ふるやうに看へる、是等の地方にては夫より卵を取らずして雨期に及び「アスサム」より新鮮なる蠶卵を得るを良とする若本邦に於て試養する場合には、七八月間は「エリー」蠶卵を風穴又は氷室の物に貯へ、大暑氣孵化せしめないやうにするのが良いやうに思はる。

「エリー」蠶飼養に用ゆる器具は極めて簡單である、家は前に述べし如く堀立小家であつて屋根は草葺、柱は竹又は丸太床は土間である、本邦九州南部、琉球、臺灣では是と同樣で良からう、器具は稻わらで拵へた竹籠より成り、蟲を飼ふにも成繭せしむるにも蠶卵貯繭にも亦籠である。

蛾の出たる繭は「シャー」（凡そ英の二封度）に付厚さものは二千五百薄き繭は四千個である、通常繭一英斤を得るには蓖麻子葉七十五封度を要する、「シャー」の出殼繭より十二「チタック」即七割五分の絹布を得る、普通とする繭は十割中蓖麻子葉を燒きたる灰又は曹達を含み、繭一「シャー」に付灰一曹達を含み、繭一「シャー」に付曹達一「シャー」の割合にて使用する、曹達の場合には繭一「シャー」に付曹達一「シャー」の四分の一にて充分である、斯くして四五十分間煮沸すれば繭殼質は柔軟となり、清水にて充分洗濯し、裏返しとなし、更に洗ひ、然る後紡績をする「アスサム」其他に於ては紡績の法は古風なる棉花紡績と同樣車を用ゐ、温りたる絹棉圓を手に持ちて紡ぎ、若し乾燥したる絹棉なるときは棉花又は羊毛と同樣

兵庫縣但馬國鳴鶴山風穴の眺景

の方法にて紡績する、温ゝたる綿編より紡績するものは細く絲貫強く細布製織に用ゐられて居る「ブサ」試驗場にては足踏紡車を用ゐ、大に便益を得たと云ふとである。

「エリー」蠶絲の製織は極めて疎遠幼稚のものである、苧麻、苧麻子は地味膏腴の地でなくとも、能く繁茂し、印度純熱帶地にては高さ四五間に達し、幹の太さ直徑三吋に及ぶのである、苧麻子は「エリー」蠶を飼養する前五六ケ月に播種する必要がある。

在「ブサ」試驗場見蠶學主任「マクスネエル、レフロイ」氏に交渉せしに「エリー」蠶卵及蛹の生息する繭を欣然分與するも輕加太太邦間貿易船中冷藏するか、又は他の特別なる方法を講ぜざれば一週間中に孵化及び二週間内に發蛾し、廢物となるから充分の注意を要するとのことである、僅ふに輕種を得んとするものは四五月の交蠶卵と蠶繭二種を携帶、輕加太を出帆し、豫て船長に交渉して、之を船中冷藏庫の傍に貯へ、水温はなるべく注意するときは、發蛾孵化することはなからう、但し本邦又は臺灣島へ到着の上は直に發生するから豫て苧麻子を栽培し置くことは緊要である。

横濱市場

十二月中の横濱市場 十一月の半頃には上一八百十圓とまで落ち込んだから、此勢では遂に八百圓臺を破ることはせぬかと氣遣はれた横濱市場は十二月に入つて如何なる現象を呈するであらうと安き心もなかつたが、恰も好し正金銀行に於ける外國爲替相場の關係は輸出商の爲に大に有利となつた折柄歐米共に絲價の安直に乘じて大に買進み、半ケ月間に二千餘俵も賣行いたので氣勢一轉絲價は忽ち五十圓方も引返して上一八百六十圓となり大に棹尾の活躍を演じて以て越年したのである。

價格の差 十二月中に於て最も高直に賣れたのは三河國賣蠶の九百四十圓で最も低直に賣れたのは岩代共同三馬折返の七百十圓である、然るに昨年同月の高直に甲斐矢島組の金矢太が千〇五十五圓で低直が岩代共同三馬折返の八百六十圓であるから昨年と今年とを比較すれば高直に於て五十圓の低直に於て五十圓の較差があるのである、以て本年絲價の趨勢が略ぼ察せらるゝであらう。

生絲の集散

本月中に横濱市場に集散した生絲の數量は左表の如くである。

明治四十一年十二月自一日至三十一日生絲集散表

巻糸	持越	入荷	賣了	積戻	繰越
座繰	三四五二七	二二〇〇八	二一〇〇三	一六五五	三三八五六
座繰	七三四六	二五二七	三一九五	三〇五	六二七三
座繰	一六〇〇	一九六五	一六九	一七五一	
座繰	一八一	一〇六	二九	三五八	
合計	四三六五四	二六六〇六	二五九六三	二一一五八	四二一三八

備考
一、表中早位節は九貫目を省す

明治四十二年十二月自一日至三十一日生絲集散日別表

| 巻糸 | 座繰 | 座繰 | 座繰

| | | |

而して三井物産原輸出店の活動に依りて手合高の大部を占め居る筈であるが、八千餘個の大手合は未曾有の大賣行といはねばならぬ。

明治四十二年の生絲貿易

回顧すれば明治四十二年の我生絲貿易界ほど大矛盾の現象を示した歳はあるまい、曰く大矛盾とは何か大盛況にして大不況即ち是れである、彼の輸出數量一千三百萬片を算せしが如きは從來未曾有の輸出額であつて、之を一昨年度に比すれば實に百四十七萬八千斤の增加である、又其之價格の如きも昨年度は一億二千五十萬圓を算し、之を一昨年度に比ればこれ亦一千百八十九萬二千圓の增額である、此の如く數量價格共に何れも開港以來空前の大盛況であつたが、併し價格の多かりしは數量の多かつたが爲で、之を生絲個々の直段に就て見れば昔ては一千四百圓臺に迄騰勝した上一の如き八百十圓にまで下落したとともあつて實に去三十四年以來の最安直で終始取引せられたから、製絲家の受けた打撃は決して尋常一樣でない、故に市場は不況又不況で經過し、遂に全一ケ年を通じての市場は悉く不振を呈した。

欧米聞ではたれか大日本蠶絲會長野原會支部長信南市七郡委員那須合絲會々長の景

▲四月　道々新古の商況に接近し買入氣乘りなく欧米需要地の在荷薄を根ざしに拘らず取引當用口に限られ居たるを以て絲價漸落へ百六十五圓の安直となりつて市場は漸く寂寞の感ずるに至つた。

▲五月　早くも新調の收穫か豫想し人氣は世界の養蠶狀態に注目するやうになつて取引は減切り減少したけれども未だ絲價は八百六七十圓を保つた月半ばに至り伊豆松崎に於ける新調は一百日圓六十錢の御祝儀前ひあり爾後の取引は稍高直の感ひあつたけれども絲況の軟弱と共に漸相場も下押しなる見た。

▲六月　世界の收繭狀態は東欧諸國減少したるも支那及び本邦産額の散堆ゝ國へられ絲價は益騰落して八百二十圓の安直を現した本月十二日には新絲三州藤實社十番九百六十圓に下列手合せあり二十二日に至り上一番九百二十五圓の刺手合なり本年新絲に對する一般の豫想も略定められたるが如くあつた。

▲七月　新絲の出廻り增加市場漸く色めき來り恰も新調取引盛況にて製絲家は國貿入れの發掌にて新調盛發品の買煽りなる爲なれば絲價も弗比較的高直に取引せられ上一番に九百圓臺にありしも中旬より八百八十五圓にこち形勢變調を來した。

▲八月　新絲の取引狀況は産額の減少から續年の當時より一割高位に該當したけれども本邦生絲に支那絲增出の影響と銀塊の下落に二者しく打撃を蒙り月末には八百七十五圓に下押しされた。

▲九月　伊佛絲の代用として細笛絲品は比較的好成績絲掛し居たる産出の增加は絲價の低落を從ふし太筋の下押しと同時に細笛のも漸次下落した。

▲十月　出廻りの最盛季にて取引活況を基したけれども欧洲向の好況なる割合に米國は新絲只來續々餘ればさりしの割有り一般の豫想に反したけれども秋繭絲價格幾分安直に應ずるの稀たから商談は圓滑に運ばれた。

▲十一月　市況は欧洲向きに依り可駁はひ來國向は巻向の期布の徒有未完なる爲かゆ活氣に乏しく大體の取引は例年見さるほど多額にあつたけれども絲價は益々下落し賣人の八百五十圓最安直說は全く相違し月の中ばには八百十圓に落込み八百圓を豫想するものあるに至つた。

▲十二月　絲價の低落は大に海外の需要を喚起したるが如くにて賣行益々旺盛上一番は遠に八百六十圓迄引返し年終局を告げた。

問答

蠶室消毒法に付質問

大分郡　安永常胤

農業新聞第百一號に載せ易なる蠶室消毒劑と題して、理學博士佐々木忠次郎氏の說が掲載せられてありましたが其要に曰く。

一、フォルマリン　一分
一、硫酸　三分
右合並二合五勺に對し百二拾匁の生石灰を加ふれば直にフォルムアルデヒード瓦斯發にて大凡一間四方の室に消毒すると見る中略養蠶前後の儀式的の消毒に酒足せず、能ふべくんば養蠶中にも部分的種々のバクテリアの發來しつゝあることを忘れずして、飼育中の消毒を施して圓滑なる養蠶の結果を望む云々とありましたと仰に就て左の例を伺ひたい。

一、フォルマリン四分に水六分を合したるものなるや

二、養蠶中右の方法に依り消毒するも蠶兒に害なきや

三、消毒の際蠶具を架上へ蔽置せ室と同時に消毒を了するものと見込む可否如何

四、八疊一間とせしも天井の高低に依り坪數に差あり坪方尺如何

五、消毒の際に適度に開孔あるものと見込む坪數如何

學士會員　理學博士　佐々木忠次郎

（一）一合五勺のフォルマリンは能く七勺の纖維を溶ぎ入れたるものなり百二十匁の生石灰に振掛られば、忽ち消毒瓦斯が發生する、此瓦斯發生に八疊一間

な充分に消毒するに足るのである。

（二）養蠶中右の方法にて消毒するも蠶兒には無害である。

（三）消毒の際蠶具を架上に積へば同時に消毒することを得るものである。

（四）消毒せんと欲する部屋は豫め其容積を測り置き、之に應じて消毒瓦斯の分量を加減するがよい。

（五）消毒の際は温度に關係ない。

輕便殺蛆法に就き質問

長野縣 通常會員　井上富喜

收繭に適當の時期と思ふ頃、戸をメ切除蟲菊粉を少許燒きて、蠶蛹に寄生の蠅蛆は皆死ぬと聞きましたが實際ですか。

答

學藝委員 農學士　明石弘

之に關しては特に試驗をなしたる事はないが、除蟲菊は蟲に對し甚しく有毒のものであるから、假令蛆を殺し得るとするも蠶蛹の生理を害し、之れより羽化せる蛾を虛弱にするであらう。

野鼠の被害に就き質問

長野縣 通常會員　井上富喜

栽桑後三年目位迄の間に冬、又は早春の交、野鼠が桑の根を喰害して枯らしますが、之に良き豫防法はありますまいか。

答

學藝委員 農學士　明石弘

野鼠のチブス菌を培養し、之れを番茶糰子に混し、被害の圃場に置く時は、野鼠は之れを食し、チブス菌に犯され斃死するもので、且野鼠には共喰の性ありて漸々チブス菌を蔓延せしめ、野鼠を絶滅することが出來る、故に近頃團體共同して此法を行ふと聞くが、併し個人的に行ふには、ワナに依つて捕ふるか桑樹の根際三四尺の間を割竹で包むより他に便法はない。

桑樹の害蟲に就き質問

廣島縣 通常會員　清水淳太郎

桑樹の根刈仕立にして夏刈をなしたるもの丶新梢の盛んに伸長したるもの、及び春桑實生苗（二年生）にして七月下旬頃より九月下旬の間に於て枯凋するもの丶あるのを見たから、之れを檢するに新梢及苗木の幹の土際に接する部分は樹皮腐蝕し中に長さ凡そ七八厘にして淡紅色を呈せる仔蟲が多數存在して居た、此害蟲は如何なる名稱のもので如何なる習性を有し、如何なる經過の下に生存するものであるか、及び其驅除豫防法を詳細に御教示下されたい。

答

學藝委員 農學士　明石弘

送附の標本を見るに癭蠅科（Cecidomyidae）に屬する蛆の害を被りたるものである、此害蟲に就ては未だ研究記載せられたるものなく、本年長野山梨兩縣にても此害を被つた、其經過習性に就きては目下調査中であるから從つて驅除豫防法に就きても確答し難い。

赤澁病に就き質問

栃木縣 通常會員　山越春吉

私の地方は桑葉に赤澁がでてきまして飼育に困却致しますが、赤澁のできない方法を敎ひて下さへ。

答

學藝委員 農學士　明石弘

桑の赤澁病は春より夏にかけては其胞子によりて繁殖するもので、被害芽葉の表面に生ずる橙黄色の粉末は即ち其胞子である、胞子が風の爲めに飛散して他の芽葉に附着すれば、發芽して菌絲を延ばすので、此菌絲が遂に枝條の內部に蔓延するに至る秋期に至れば胞子を結ばなくなり、葉も落ちてしまうが、枝條の內部へ入込んだ菌絲は其儘冬を越し、春期桑樹の發芽する頃になれば、芽葉の內へ蔓延し此所に胞子を結ぶものである故に赤澁病の害を被ることは每年枝條を伐切する根刈には割合に少くて、高木に多い理由である、故に此被害を免れんには、春期芽に橙黄色の粉末を發見したならば、其胞子の飛散せぬ內に其芽を摘去して燒燬るは勿論、其枝條にも菌絲の潛伏して居るものであるから、燒燬てるがよい、尙本病の發生甚しければ桑樹の枝條を全部伐切して燒燬て又可成高木仕立を廢するがよい。

濡桑乾燥法に就き質問

茨城縣 通常會員　鴻巢乙治

大日本蠶絲會報第百九十六號說林欄中田盛西江氏の說に京都府天田郡福知山の人伊木茅氏創案に係る、濡桑乾燥法と云ふ說明の中に、玉蜀黍の莖にて製すと云ふことがありましたが其製法を委しく御敎示下さい。

答

田盛西江

玉蜀黍の莖で濡桑を乾かすものを製する法は、創案者に對して桑粉か發表するのは餘りよくないけれども、夫れ程熱心に聞きたいとあるのに强いて默して居られぬから左に答ふる事にした。

玉蜀黍の莖でさへあれば野晒しになつて本質さへ失はねば、生でも乾枯したのでもよいから、製せんと思ふものを先づ流れ水の様な清水へ浸すこと二三週間で夫れから水より上げて皮を剝ぐ其皮と云ふのは玉蜀黍の樣な禾本科類では葉柄の事で所謂ヘカマのことである、竹の様な硬い彼の皮を剝ぐのではない、而して濯れいに洗つて能く日當で乾かし、之を長閑に刻み細末にするのである、水に漬けるとアクが脫けるので出來上つてから水分の吸收力が强くて不潔の汁を出さぬ利益がある。

扨て刻むのには揃りて餘り太とからぬ位に揃て束ねて、臺の上で桑切包丁の如き大なる利刃で刻む、其大さは米粒位が適當である、其積りで包丁を入れる、其包丁の入れ方は莖を斜めに入れる、そうすると切りよい、從て其いものが出來るのである、決して押切抔で切ることは不可ぬのである、何とれば押切ては粉なになる恐れがある、粉か、未だ太と過ぎる樣なものでば、要にたゝぬ、斜切が終ると縱横一分刻みに刻むのである。

次に精米と糠とを分ける篩で未だ荒らいものを取る、荒いものは又刻み直して此篩を越させる、荒いのが無くなると次には糠と小米とを分ける、篩で仕分け粉を抜く其れが即ち成品である、之れを貯へ置き黴びぬ様にして天候の變に備へるのである、粉は雜蠶用の糠六割粉四割位の一比に混じて、除沙用に供するなら絲であるして一本の莖から約一升出來得るから濡桑五百匁を乾かすに足る、使用法と云ふのは濡桑を豫め量り置き板椀若しくは席上にて濡桑一貫匁に對し粉末二升の割合を混じ合せ、能く攪拌し次に積み重れて上より可なり强く壓すること數分間にして攪拌する、內を外へ下を上にする様な必持て攪拌し、又積み重れ壓し數回之を反覆して三十分間位を要すると、全く脫水して粉末は自から席上に墮り、大多數の桑は手にて仕分けられ、少數の桑丈を粉と分けるのに篩を用ゆれば足る、仕分たる粉末は引續き使用せれば晴天に乾燥せしめて、次の雨期には同割合で使用し得るのである、若し引續き使用せんと欲せば布袋に容れ棒を以て兩方より壓へ、水を搾り去り篩より出して、今度は一貫匁の濡桑に對し四升の割合で混ぜ合せ、前記の方法にて乾燥せしむる倘は引續き使用せんと欲せば二回目方法を操返すのみてある、而して使用終れば晴天を待ち乾燥せしめ變に備ふるのてあるが其効新らしきものと同樣にて而かも數年間使用に堪ふると云ふのである。

說林

蠶絲の統一に就て

通常會員 岩手縣立農學校教諭　田村兼造

蠶種統一の目的如何と云はゞ一に生絲の統一を計らんとするにありと稱し、恐らく他に目的の存すべきことなかるべし、故に言を換へて之を言はば、生絲の統一を計らんとするに外ならざるべし、然らば蠶種統一問題を生絲統一問題と解釋するも可ならんと信ず、然れども生絲の統一を計らんとせば、蠶種の統一のみにては到底其目的を達し得るものにあらず、何となれば蠶種の統一は其生絲統一の一部分に過ぎざればなり、例へば同種の蠶にても之れが食物たる桑の種類によりて其蠶兒の發育に及ぼす響影は頗る大なるものにて、其蠶兒の種類の差より同種の蠶を異種類の桑にて飼育する方、却て其差大なることあり、即ち魯桑の如き桑にて養ひたるものと、九紋龍の如き桑にて飼育したるものとは、其收繭に於てすら蟻量一匁に付二三升の差を生ずることあり、又同じ野桑にて

も之を畑地に栽培したるものと、山野に自生するものとは大に其結果に於て大に其趣を異にするものなり、即ち前者八に及ぼす影響少からざるべし、後者は七三、の割合に發育す、從て其絹絲の統一を計らんとせば、蠶種の統一を計ると相待つて桑種の統一をも全書すること肝要なり。

故に生絲の統一を計らんとせば、蠶種の統一を計ると相待つて桑種の統一をも全書すること肝要なり。

又生絲の統一には無論蠶種の統一及び蠶兒の專飼料たる桑種の統一をも計らざるべからず、飼育法の如何によりては同種類の蠶にても異種類の蠶種に於けるよりも其差大なるものなり例へば飼育中に於ける溫度の影響に就て揭げんに、蒲氏七十二度にて飼育せるは一繭の絲長四百二十六回纖度三一デニール一回纖度しに、六十七度にて飼育せしは一繭の絲長三百四十九回纖度二一デニール一二五にして、回數に於て七十七回の差を生じ、纖度に於ては〇、八九デニールの差を生じたり、然るに本邦種海蠶九種の平均一繭の絲長は五百三十七回纖度二一デニール一七一清國種十種の平均一繭の絲長は五百八十二回纖度二一デニール一四七にして、其差絲長に於て四十五回纖度に於て〇、二四一デニールの差なること疑なし、吾人は本邦種と支那種の全然異なることを知りて、其絲質の差の僅少なるにかゝはらず、況んや又昔小石丸等本邦種間に於ておや、是等本邦種間にありては殆んど差なしと云ふも敢て過言にあらざるべし、然れども之を詳細に調査するときは本邦種も其種類同名異種、異名同種のもの夥多ありて其差の大なるものの悲しとせず。

兎に角余は生絲の統一を計らんとせば蠶種の統一及び桑種の統一を計り、併せて飼育法の統一を計らざるべからずと信ず。

要するに蠶兒の成繭たるや其一蛾の產みたる卵粒は約五百粒あり、是より孵化したる蠶兒の成繭には闕きあり長きあり短きあり縊なれたるあり否らざるあり、其色にも濃淡種々あり同功繭ありて、如何樣に統一を計らんとするも、一蛾の產みたる卵より孵化したる蠶兒の成繭に於てすら、斯の如き有樣なれば一養蠶家の產繭數千萬粒の繭能く同一の絹絲をなすべくもあらず、況んや本邦全國一ヶ年の產繭八百億粒以上の多數に於てをや。

然れども勉めて之れが統一を計らんとせば第一蠶兒種類の統一、第二桑種類の統一、第三蠶兒飼育法の統一を計るは最も必要の事故にして、其最終的の加えたる製絲法の統一は最も急の急なるものにして、比較的の人工的に種々の原料たるとも統一し得るものなれば、此種の統一は忽にすべからざるものなりと信ず。

生繭の賣買禁止

農業會員　金谷權之助

生繭の賣買禁止と云ふ事は全乾繰後繭を賣買すると云ふ事である、若し國法を以て生繭の賣買を絕對的に禁止したならば、如何なる影響が蠶絲業界に來るであらうか、第一に製絲業者の買繭始めたるを以て、其れ丈け益賣りが出來るから、出來得る丈け早く繰き取ると云ふ事になる、そこで若し之れを干繭の賣買と云ふ事にすれば、製絲家も慌てゝ買ふ必要なく、養蠶家も急いで收繭した處で格別の利得もなくなるから自然早播の弊を增ずる事になる。

第三運搬費の輕減　之れは客積弁に重量の減少したものは反て割のものよりより易く運搬せらるゝと云ふ事であるから、別に論ずる迄のこともないが、唯だ茲に一言添えたいのは、運搬中及び生繭購入當時の堆積より起る蒸熱の發酵に品質を損傷し、延て絲量の減耗を來す事である、製絲家は因襲の久しき早慣の際止むを得ざるの現象として何等意に介せざるが如くなれども、之れを詳細に計算したらば、如何に國家的大損耗となるであらう、實に惜しむべきの至りである。

第四製絲業者資本固定の不要　之れは製絲家に取つては事業經營上の難易に甚大なる關係を有する事と思はれる、若し乾繭の賣買と云ふ事になつたならば、一年中の原料の生繭を一時に購入せねばならぬと云ふ、即ち一年に多額の資本を固定

害の全滅、第二早播の弊の自然消滅、第三運搬費の輕減、第四製絲業者資本固定の不要、其の外種々の利弊も伴隨するであらうが、先づ大體擂げを之れ丈けに止めして以下略を述べて少しく述べて見やう。

第一蠶蛆害の全滅　蠶界の大敵蛆害の撲滅策に就ては斯界多年の宿題であつて、諸種の方面より攻究せられて居るが、未だ適當なる解決を得ない、蠶病豫防法布以來僅かに一部地方に於ては其の害の幾分は輕減せられた事であらうが、逐年蠶兒飼育戶數の增殖するのと、產繭額の增加し行くのとで、蛆害の增減は相殺してより良上に被害率を向上せしめつゝあるやうにしか、何ぞ現今の人文の程度では蠶病豫防法の實行と相俟つて生繭の賣買を禁止するより外に良策はないと思ふ。

第二早播の弊の自然消滅　生繭の賣買をさへ禁止したならば自然に早播きの弊は無くなる、目下の有樣では生繭の內は重量賣買であるから、生產者は少しでも餘分に賣數を得べく、化蛹せざるうちに賣買を終へんとする傾向あるが、蛹中であらうが、繰繭中であらうが、製絲家の迷惑、國家的の不利益なんどには委細頓着なく收繭する、それに賣

させて了まうと云ふ必要はなくなる、従て得れば従て優絲し賣つては買ひ、買つては賣る、こんな風にしたなれば大した資金を要せずとも済む、従て外商に乗せられて相場外の不利の値を忍んで賣り放すべく餘儀なくせらるゝと云ふ様な機會も自然少なくなりはしまいか。

其處で若し此の生糸賣買が出來ぬと云ふ事になつたら、恐らく問題は乾繭場の設立である、それは箇人の經營にしても共同事業としても何れに任ずるも好い、自然の成行に任せて此の乾繭場の智識も進み、今よりより以上に良好なる乾繭器が考案せらるゝ事になるであらう、比較的に乾繭の經驗及び智識も富んで居る製絲家の考ひからは此の乾繭事業を製絲家以外の手に委ねると云ふ事は少しく險呑らしく思はるゝかも知れぬが、それは杞人の憂である、近頃各地に開催せらるゝ共進會品評會、出品繭審査の實績に徴すれば、思半ばに過ぐるものあらんだ、それで此の乾繭事業は何うしても國営すべき性質のものと思ふ、分業となり獨立して始めて進歩改善するのが一般事業の通則である。

それて愈々此の乾繭場が出來ると之れが用事として乾燥した處の繭を直に擔保品として、資金の融通を計る倉庫業と云ふ樣な者がぼつぼつ出ずるを待ない、されば養蚕家も製絲家も絲況に前以ぬ突飛の値で繭を買ふ事は常に絲價と平準を保つ樣になる、自分は以上の精神を以て小規模ながら自宅に乾繭器を据ゑ付けて乾燥してからでなければ賣却せず、自家の蚕糸は自家の繭を以て同樣乾燥し貯蔵して時に應じて賣却すべき性質のものと思ふて居る、唯だ日光の代りに汽熱か火熱かをかもて乾燥する丈けの相違である。そんな風に趨勢觀すべきものでない自分は養蚕家の事に対する意見の宿論を持すると共に、賣買の禁止は國家的の見て居るから知れない大體に於て生繭の賣買禁止は國家的有利の方法である事は異論はあるまい、より少しの不利點があるにしても、それは以上述べた處の四ヶの有利なる理由の内の一つ丈けて償ふて餘りある事と思ふ。

自分は以上の知き理由下の下に生糸繭賣買の禁止を希望する、のものであるが、吾が國蚕絲業者諸君の高見如何、宜敷審議討究して若し果して國家的に有利の方法たるを失はず大日本蚕絲會の仕事として之れが法律制定を政府并に帝國議院へ交渉せらるゝかも知れない。

原蚕種統一に就て

芳賀蚕商務者蚕絲課長の談なりとて部下の各課間に左の起草書を渡せり

一、蚕種統一に就ては、蚕種の品質は蚕糸の品質に直接影響を及ぼすものなるを以て、蚕種の統一は蚕糸業の改良上最も重要なる問題なりとす、而して

ラットホームには松永師團長、小泉、横田兩少將、山形醫學校長能勢教授、判所長和達市長川教育會長其他文武諸官數十名の事迎を受けさせられ御機嫌麗はしく寺田支會長の御先導にて御降車あらせられ、事迎の一同に一々御會釋を給ひ、停車場樓上に入らせられ暫時、御少憩の後、更に御收家倉田御四武官の黒崎家從を隨へ松島に成らせらる、依て本多理事は亟富書記を伴ひ御陪從申上げ、一時五分發にて直ちに同場に向ひ途中、岩切利府驛に於ても盛なる事迎を受け、午後二時七分松島驛に御着あらせたり、夫より御料馬車に召され根本鹽釜署長の先驅、鈴木内務部長の御先導にて隨員を隨へさせ、來風烈しく吹荒くるを物ともなし給はず、車上より沿道耕田の積穂の豐かなる之御覽遊はされつゝ、午後三時三十分大觀山貴賓館に御着、御休憩茲に松島の風光を賞でさせ、御手つから御揚帶の宮其機を以て四邊の景色をレンズに收められ鳴へり、同所休憩ふかに二十分間にして御降坂直ちに松島海岸に御足を運ばせ給ひ、同阜頭に於て再び五大堂並に瑞巌寺船館を御撮影遊はされしが、少からず御氣に召されたるやう拜し奉つたり、山水の光景、衆人の目に至る大なりと謂ふべし、午後三時宮城丸に御乘船水上警察船に御護衛され、警衛者陪隨の青葉丸等續いて鹽釜に向はせられ、時に夕陽波面に相映じ幾百の松洲は松の緑と紅葉の紅を混じて時を得顔の觀ひなく、右に向へ左に流る島々を御覽ぜられて暫らくレンズに收められ、船の進行中海面なづる秋風も御厭

右終つて早川支會副會長會計及業務報告を爲せり。

依つて有功章受賞者は總代早川智寛氏答辭を述べたり。

夫より寺田支會長は更に縣に於ける蠶絲業功勞者を推薦して本會に於て授與せり其功績を表彰されたるもの左の如し。

一等有功章

寺田祐之

二等有功章

鈴木邦義　草間宗旺　中田邦内　河田鄂三郎　飯塚清通　伊知地靖臣　小倉信光　五等有功章　鈴木實　入乙女盛次　大立目識吾　清野喜代衛門　長谷川義雄　永澤弘治　佐々木貫治　伊東庄蔵　鹿島儀三郎　坪田鄂堯　加藤丙虎郎　金森安之助　島橋富士郎　丹羽敬太郎　早川智亮　長野崇治　古藤泰助　小野寺延平　石澤市平　高橋長十郎　佐藤新三郎　鈴木清之輔　木多三學　米澤豐治　岩佐清平　小野寺延平　伊藤三郎

ては種々の御下問あり夫より第二號館に於ける木工品竹細工杞柳細工參考館に於て各府縣より出品せる各種の特産物を御覽相成り、陸上御休憩室に入らせられ寺田知事に縣下産業の狀況を御下問あり斯て午前十一時半御退場あらせられし非常に御滿足にて御旅館に御歸還後殿下には左の品々を御買上げあらせられたり。

△漆器二梨子地拔模樣名刺盆外盆類十四點△堆朱細工△盆類十數點△仙臺平七反△八ッ橋織四反△常盤紬形十反△五色華十箱△仙臺箱簞笥一棹

殿下演武大會へ成らせらる

午後二時殿下には御機嫌麗しく旅館を出でさせ賜ひ、武醫會なる演武場に成らせられ、夫れより當時興行中なりし相撲場に成らせられ殊の外興ぜられ給ひて日暮るゝ頃階行社の御內實に臨ませられたり。

御宴會場に臨ませられしは午後五時頃なりしが暫時御休憩の後御座所に就かせられ一同に御會釋あり、續て御宴を賜はる夫より支會長の發聲にて一同殿下の高壽を三唱し終りて五時三十分殿下には御退場御旅館に御歸還あらせられたり。

總裁殿下御歸京

十三日午前八時五十五分仙臺發御歸京の豫定に御在しましゝかども俄かに御變更相成り十三日一日御滯在あらせられ其夜八時發海岸線にて御歸京遊ばさるゝ事と御決定あらせられたるを以て御教示に依り前日午後八時の汽車にて先發せられたり。

時移りて御發車間近になりたれば御着車の折の如く各學校其他官民の來送を受けさせられ御機嫌麗はしくプラットホームを離れさせ賜ひ翌日午前五時無事御着京あらせられぬ。

山梨支會品評會褒賞授與式

大日本蠶絲會山梨支會第二回品評會は去九月十五日より十八日迄甲府市鵜飼公園機山館に開設し、十六日を以て同館に於て褒賞授與式を擧行したり、當日は午前十時より本會理事吉池慶正學藝委員八田逸也閑氏の趣旨説明あり、午後一時褒賞授與式を行ふ、愛知するもの官民合志流石の同館も溢るゝ計りの盛況を極めたり、八田御代理として賞狀を柿沼支會長に、次で會員代理として賞狀を柿沼支會長に、次で會員代理として賞狀を柿沼支會長に、次で會員

な謝辞を述べ以て其影響を軽減するに努めざるべからず本会の本報賞に此に存せり今の當局の盛力と會員諸君の熱誠とに依り會員の数萬を超へ如上の針路に歩一歩近き つゝある國家の爲め慶賀する所なり山梨支會長は之を所謂外国三品会集比較審査に以て改良の賞に供せんと予向に表明せり之を以て由来本報賞業は其発達極に一面地方技士後進の為め啓蒙する所鈍少ならざるものありしと雖も近時特殊造地の隆々として發達するに比すれば其速力遲きを恨に以て遺憾とする所なり一昨四月年に於ける水英江戸博覧会に際し其方面に斯業盛衰のみに非ざるべき事を以て同情の赤誠を表せざるべからず加ふるに當文會の基礎亦即からざるの感みあり應援は當局並に會員諸君今次の品評會を以て品賞の査定のみに止めず之を革新の動機とし大に會員を増幕して支會の基礎を確立すると共に一般地方改良増殖の賞を収め得る國家の頭脳を涵養せんことを期待か希望なる述べて告辞とす

明治四十二年十月十六日

大日本蠶絲會會長　正三位勲一等　男爵　松平正直

式辞

天清く氣爽かに稲米の実熟して農家狩猟の盛んを此時に方り我大日本蠶絲會山梨支會第二回品評會授與式を挙ぐ

翔本會の出品は七百點に満たずと雖ども区域に斯業の発達地を網羅して二府二十二縣に亘り而かも殆く精な技を尋か寒めたるは以て我を以足る然りと雖も世間目に見て改良實力發達伊益々増なるときに方り國家に萬鈞の重きを負担する蠶絲の改善發達は一層の急要を感ぜずんばあらず當家者多くも本會幣金の威嚇に怒り懶々怠り研鑽なか加へ以て斯業の大成を期せんことを一言以て辞とす

明治四十二年十月十六日

大日本蠶絲會山梨支會長正五位勲三等　熊谷寛一郎

答辞

大日本蠶絲會山梨支會第二回品評會を開設せらるゝに當り不肖等の出品中に受賞の栄を荷ひ本日此盛大なる式場に於て優等ある賞状を賜り加ふるに會頭閣下並に文會長閣下の懇切なる経験の教示を賜はり感謝に堪へず今一層奮勉して益々斯業の改善發達に尽瘁せんことを誓ふ

明治四十二年十月十六日

受賞者　熊代甲斐蠶業月報社　代表者　早川文太郎

謹して此度品評賞の光栄を得られたれは左の二名なりとす

山梨縣東山梨郡休息村　結澤房太郎

埼玉縣見玉郡見玉町　浅見平三郎

富山支會品評會褒賞授與式

大日本蠶絲會富山支會の第三回蠶種製生繭品評會の褒賞授與式は十一月十日午前十一時より井波別院太子堂に於て挙行されたるが、出席者千餘名、式は君が代の奏樂に始まり、次て伊東支會副會長は開會を報じ、宇左美支會長は戊申詔書を拝讀し夫より波邊審査長の審査報告あり、次て支會長より授賞者に賞状を交付し引続き桑園及び模製繭組工女授賞者に賞状を交付したる後練水品頒代理の告辞宇佐美支會長の告辞演說笠浦郡長総代野松郡會議長八尾蠶業學校長の祝辞藤澤受賞者組代の答辞ありて閉式し、式後講習所技師は「蠶業法改良の必要」と題して横田東京蠶業講習所技師は「蠶絲業の將來」と題して各有益なる講話を述られ閉會し、次後一同は金平楼にて祝宴會場に赴たるが各所とも頗る盛況を呈したり

授賞者は優等賞三名、一等賞二十六名、二等賞百十七名、三等賞四百十二名四等賞七百十六名にして賞品は優等銀製香炉、一等は銀盃二三等は木盃なり内重なる受賞者は左の如し。

▲優等賞（蠶種）井波町藤澤五三郎（繭）八尾町鍋屋喜藤利兵衛

▲一等賞（蠶種）新潟縣魚川栗矢、井波町瀬賀民次郎（繭）西礪波郡谷村吳衛、蠶種）新潟縣江戸大郎、富山縣蠶種長とも子、下新川郡中野砂次郎、井波町高倉和一郎、水見郡高田宗治、出町蠶商ニ付子（生繭）婦先町清光社、（繭絲）井波町蠶絲會富山支會井波婦人部

▲褒賞二等賞　下新川郡大森惣三、婦人部館江芳次郎、同郡中川藤平、同郡青木六右衛門、射水郡多賀十吉、水見郡梅梅石衛門、同郡鵜飼佐太郎、東礪波郡松島信一、同郡都外芳一、同郡大森惣蔵、西礪波郡義浦喜三郎、西礪波郡藤生治郎

▲製糸技會二等賞　婦引郡坂田ひさ子（繭）東礪波郡織田さと子（繭）田鍋浦工女）

▲三等賞（繭）婦引八尾町中村佐四郎外五百人▲褒賞（蠶種）八尾町べ野喜兵衛外四百十一名▲四等賞（蠶種）八尾町青山平三郎　外七百十五名

次に渡邊審査長の申告文は左の如し

申告　文

大日本蠶絲會富山支會第三回品評會第二回品評會第二回品評會技會に於ける各審査に識見有益者の顧問に依り茲に終了し其成績を總評して申告するに當りたれ泡に光榮之に共に光榮とする所也

今回の出品は總数百四十六點蠶三千百四十九點生繭二十六點出殼繭百〇六點真綿六十一點製糸十二點總計三千五百點四百三十六點外発送四百點として之を出品者二府二十二縣に及り前年に比較するの盛況を為ぜり今其品成績に就て概評すれば左の如し

△繭　仕赤鶴ありて比較的良好なりと雖殊に際し雖固に満たれたるに拘らず比較的良なるも時に或は色性劣たるものあるは慎重を以て蠶にありては給人と見るべきものなり然れども出品多きは賞状とされとも各種の繭ん進ずるの傾向あり不生産的状態象ひしきと外観表性の美なるも惨憺害花土不合格に陥りしものあるは遺憾とす

△生繭　は品質概して其好なり且纖度均均にして而かも粉角の固着善たしきものあるは頗すこし玉繭の点減にあり且つ出殼繭　は見るに足るべきものあり之繭は大部に於て之を出品を見るに躊躇不良の於品あるは惜むべし

△真綿　の品質概なるは満質すべし立る微陳列場中一興彩を放てるか

△蠶具　は整然優なるを以て論評の價値なきも雖下に於て之を出品を見るに

△製糸　は改時一大興目を欧人見るべきものあるに欧常持く能とず然れども施設転設機管理立法等に於て更に設時の改良を要すべきものあり非に研機為園の何たるを知ぜざるが如き改は今向老練見る塔へざる色樹か殺樹顧みるるが如きものあるに深く遺憾とす

△優等品　中絲新にして有益の出品多かりしも富示者人は特来益々新種の出品者模出せんことを切望す

△製糸技會　にありては工女五人に付一人の割合により優等を選抜之れに當らしめたるにより概れ其成績を得たり唯失れ者無不注意に流有来練相基に傾き改は集時間多く人絲量か減少あるものあるは深く改むべしと之を思考するに全般の結果第一回及び第二回審査時に比較すれば進歩に於て多きのみならず結賞の良好なること確に数等か越て予は実き三十八年蠶業奨励策防法の公布せらるゝ際本縣に挙して以来我に前年幾品評會の經驗と溝壮と遠事するの光榮を有す顧みて往時と道顧する時は特た今昔の感に堪へざる也時世偽れ人一大改革を見るに至りたる所以のものは當に長官閣下の指導指揮したる賜にして縣政機関及縣関聯者の有力なる援提とれるは勿論営業者諸氏勉励の結果に外ならず之れ余の深く感謝する所也云々

明治四十二年十一月十日　審査委員長正七位　渡邊家八

會務錄事

支會職員の囑託

本會秋田支會幹事長、島取支會副會長及幹事長は今回各其支會長よりの推薦に依り、總裁殿下より、該に下野、信濃、秋田の三支會委員部長に囑託せられたり。

秋田支會幹事長　池本馬太郎

島取支會副會長　石津和風　同幹事長　高橋

下野支會委員部長　那須内藤雅樂助　鹽谷中四正信

信濃支會委員部長　上伊那黒川光治　四筑摩平川房吉

南安曇　福田富成　諏訪犬童長豐

東筑摩　宮津宗三郎

秋田支會委員部長　平鹿鈴居龜太郎

特別會員の推擧

左記の諸氏は本會々務に貢獻せられたるを以て本會々頭より今回特別會員に推擧せられたり。

鈴木貫太郎	江川民三郎	横山惣八	中村鶴一郎	遠藤八一郎	秋田支會
鈴木順三	江川民三郎	松林快二	芝原邦太郎	宮城卓二	秋田支會
田宮徹太郎	久保田友平	大堀藤二	宮城卓二		
星野軍二	中村鶴一郎	芝原邦太郎	宮城卓二		
牛鶴悦	大堀藤二				
秋田支會	秋田支會				

會員增減府縣別表

府縣名	明治四十一年末會員數	明治四十二年末會員數	差引增	差引減
北海道	一〇六	九九		七
東京	一、〇〇九	八五九		一五〇
京都	七二五	六八一		四四
大阪	一八	一七		一
神奈川	二三二	二〇七		二五
兵庫	一四〇	一三〇		一〇
長崎	一〇四	一〇〇		一八
新潟	一、一三六	一、〇一四		八六
埼玉	六七一三	六七〇五		八
群馬	二二二七	一九七八		二四九
千葉	三六五	三三五		三五
茨城	五九一三	四七四一		九三
栃木	二六〇七	一五九八		一〇〇九
奈良	二七〇	二七〇		△
三重	一、三二六	八九八七		三
愛知	一、九八七	一、六三六		四二九
岡山	一〇七一二	三五一		九三
靜岡	一〇、六二〇	一〇、六二〇		一〇八
山梨	一、〇三一	九二三		一〇〇
滋賀	六七六	五七四		一〇二
岐阜	二、七四一	四二一		二
福島	一六、〇〇一	二、三二〇		一〇、五二一九
長野	五、四八三	五四八三		五四八三
宮城	一、六四二	一、一六三		四七七九
鳥取	五二一九	四五一三		七〇六
福井	四二七	三九三		一三一
秋田	一、六八	一五九		九
山形	一、〇二七	九五三		七四
青森	一三九	一二八		一一
山梨	一三九	一一一		一一
石川	六一一五	四一一二		一〇九
富山	四六九	八五六		三〇三
鳥取	一、〇四〇	一、〇一		三八八
島根	一、〇四〇	七一九		三二一
岡山	三四九	一五六		一九三
廣島	三四九	一五六		四四
山口	六三〇	五八六		四四
和歌山	一三四	一〇一		七
德島	三三四	二九一		四三
香川	二六	二二二		四
愛媛	二四七	一九二		五五
高知	一、〇八〇	五八八		
福岡	六一九	三六三		
大分	七八七	二五六		
佐賀	二二〇	四五		
熊本	三一九三八	一一〇		
宮崎	一一六〇	三八七八		
鹿兒島	三一三	一六〇		
沖繩	一	二六四		
齊爾其他	一	四九		
計	七七、四六九	五四、三三九		二三、一三〇

備考　現在會員の實數は千萬四百五千人に達すると雖、新潟の約八千人埼玉の六千人栃木の約三千人宮城の約七千福島の約六千人合計約二萬八九千人は支會に於て申込書整理中に係り來たず本會に到達せざるを以て本表には之れを算入せず、本表の三人を減じたるは他縣に轉居したるに依る

蠶桑雜報

▲十ケ年生絲集散と元旦の在荷

横濱市場に於ける既往十ケ年間の生絲集散實況と左の如くである（各一月より十二月に至る計算である）

年次	入荷高	賣却高	積置高
三十三年	二二、四八二	七九、一〇七	一〇、〇〇六
三十四年	一四七、二四五	一五一、一〇八	一〇、三五三
三十五年	一五二、八六四	一三九、一三九	一一、一一一
三十六年	一四五、三〇五	一二二、三三九	一二、三三九
三十七年	一六六、八八〇	一一七、一四九七	一一、一八六三
三十八年	一四〇、六九六	一二〇、五九八	一六、六九三

▲聯合會標準繭調査

群馬縣蠶業組合聯合會第五回原々種標準繭調査成績表は左の如くである。

次數	原繭肉眼點	同上器械點	蠶種點	合計點	平均一數アニール
一	一一六	一、二四五	八八	三、二五	第六三五 ア二七五

回	買	賣
二	一〇一	一〇七〇
三	一〇一	一一五六
四	九二二	一一六五
五	一〇〇五	一一一〇
七八	一一一〇	一一五五
七	一一〇七〇	一一九一
八	九六〇	七八
九	九二五	七七
一〇	一〇二〇	八九
一一	一〇八〇	五七
一二	八九五	六二
二	二八四〇	八六
三	二九五五	七七
四	二八四五	七七
五	二七三〇	七七
六	二七六〇	七〇
七	二八八〇	九〇
八	二九四〇	七七
九	二九五五	七七
一〇	二七三〇	六二
一一	二四一〇	五七
一二	二三三五	六二

備考

糸長　最長七百三十五節　最短三百五十四節　平均五百四十二節

デニール　最長三三九　最短二四九　平均二二四

▲北海道廳の養蚕補助　本年度北海道廳に於て補助金交付の各蚕種補助蠶業に就設及び新設各合せ蚕種調査所二十三箇所、蠶業改良試験場十八、生繭共販乾燥所六箇所の集定にて、之が補助助樹に關し各支廳をして民間の新設希望者の調査せしめたるに道廳へ申出したる本年度新設希望数は蚕種調査所十八、蠶業改良試験所十九、蠶業乾燥所十九箇所にして既に集定員に達せるも道廳は最も確實と認ゐるものに限り補助額を為す方針にて出願期に本年三月三十日迄なれば希望者は尚ほ此の期を誤らず願書提出す可しとのことである。

▲蠶絲業組合調査　農商務省の調査に係る蠶絲業に關する全國同業組合の現況は左の如くである。

同業組合数百五十九にして前年度に比し十七組合増加した▲同業組合の蠶繭産額は合計三十六萬四千九百四十四圓にして一組合平均二千四百五圓に相當する事業費総合計二十六萬八千七百十二圓にて一組合平均千五百十八圓に當る▲府縣郡市より補助を受くる組織九萬千五百九十二圓にして内府縣より受くる金額四萬四千六百十三圓を支出し、種々改良を新設する計畫なるが、新設地方は目下調査中にして未定であるとゆふこと。

▲蠶種統一　蠶業試驗に關する經費三萬圓は地方蠶業試驗所の擴張に關するものなるも、並に蠶種統一に關する試驗調査をなさるる筈である。

▲昨年に於ける世界の蠶況　昨年に於ける世界蠶絲國の養蠶狀況に關し農商務省の調査に依れば歐洲に於ける蚕繭産は大健に於て前年と大差なく、伊國西に於て僅少の増産があつたけれども、伊太利に於ては養蠶生産地に於ける桑葉の凶作、前年に比し一割内外の減收を招きしもの、如く、其他諸國に於ける産繭額に亦多少の増減があつたけれども歐洲蚕繭産の大勢に關しぬやうである。

蚕東統國に於ける蚕繭額に就ては確かに統計の據るべきものなく、支那に於ても亦全國を通じて北蚕繭額を推知するに由なく、前各國に於ける蠶況の概要を掲ぐれば左の如くである。

伊國　四月一日

昨年三月より四月上旬に亙る間氣候寒冷にして桑樹の發芽遅れたるが為め、蠶見の掃立は平年より一週間前後遅延し、四月十五日乃至二十日の間それを行つた其感蠶は前年に比し相當の掃立後は氣温上昇し悪寒の發育を促し、蠶見の經過亦佳良であつたが、三月末日アプリル、アプリル、ドローム、ドローム、ドローム

蠶業雜報

に歩したるものあるのみならず、同地方農民の他國へ移住するもの少なかりしため、蚕繭見の飼育量を減少した。

蠶見の繭文は例年の如く五月五日から翌十五日の間に於て行はれ、同月中旬ヲノ、翌月に於て陰雨打續きたるも天候概して平順にて、殊に蚕食より蔟後は、蠶見の經過良好にして軟化病卵化病等の發生を見ることなく、何事も無事にして、且上蔟中の乾燥は頗る良成なりし蔟結の結果良好であつたと云ふことである。而して昨年の產蠶數に就ては未だ確定せる報告に接せわけれども以上述べたる如く特なる天災の爲め飼育數良なりしため、前年に比し一割内外減なりたる如く、無想せらるものの如くである。今既往三ヶ年に於ける產蠶額を示せば左表の如くである。

年度	一九〇九年	一九一〇年	一九一〇年
產蠶額	五三、一六三、〇〇〇	五七、〇五八、〇〇〇	五三、八三六、〇〇〇

年度	千九百九年	千九百八年	千九百七年
產蠶額	一、〇一五、〇〇〇	一、一一〇、〇〇〇	八三〇、〇〇〇

年度	千九百六年	千九百七年	千九百八年
產蠶額	一、一一〇、〇〇〇	八三〇、〇〇〇	一、〇一五、〇〇〇

蠶の相場は低落して、一基に對し、三、七七〇円至三、〇七〇円前外である。但一〇七〇円は見我三十八錢七厘に相當する。今既往三ヶ年に於ける產蠶額を示せば左表の如くである。

年度	千九百十四年	千九百十五年	千九百十六年
產蠶額	一、一一〇、〇〇〇	一、〇一五、〇〇〇	八三〇、〇〇〇

▲口繪の解

（第一頁）富士山の麓は本會から目英博覽會へ出品したる富士の模型を撮影したのであります、詳細は蠶務技師の中に記してあるから茲には之を書きませう。正月の御祝ひも無れて特に此頁へ掲げたのであります。

（第二頁）東京蠶業講習所より目英博覽會へ出品せられたる模型を撮影したのであります此出品は蠶業製絲に關係ある如何なるものでありますか此頁に其全體を知らむる目的で掲げたのであります、なほ意匠上に於て蠶業官廳氏に依りて考案せられたのであります、第一室には三十餘後の鳥模が十五天の令蠶相手に接種表衆御收繭の作業を爲し、第二室には十六七の令蠶が桑葉共て立る第三室には十八九の令蠶が二十五六の蠶人と二十五六の蠶人とがありて其一人は給桑為他の一人は例桑為當し、次なる第四室には十八九の蠶人が其繭作を為びつゝ、蠶に一人は例桑為當し、次なる第四室には十八九の蠶人が其繭作を為びつゝ、蠶にしきに此蠶する其繭に三ヶ年後の鳥模ならき蠶人が某々たる鳥蠶を所登居る

文藝

俳句

賞懸

花の本花翁宗匠

秀逸

蜂の巣の蜜や朝日の出り初め　甲州　越月

蜂の巣の蜜や朝日の出り初め　甲州　蓬江

蜂の巣の蜜や朝日の出り初め　甲州　蓬流

蜂の巣の蜜や朝日の出り初め　江戸　江水

蜂の巣の蜜や朝日の出り初め　水戸　後桃

蜂の巣の蜜や朝日の出り初め　水戸　後桃

蜂の巣の蜜や朝日の出り初め　水戸　後桃

人　天
萬歳や譽く並も春の祭　武蔵　想月　門松や植て置てもよいところ　敦賀　雲隣
地　追加
屠蘇酌むや拜領の太刀床にして　伊勢　酒蛙　老の眼の覺て間のあり初日の出　選者　花翁

懸賞募集 狂句（第四回　抜萃）

金坊子選　秀逸　二十三回

絲價暴落有り息来る息虹の息　但馬　鷺村

▲人賞
色付けば油断のならぬ蠶種　滋賀　藤木藤花

▲地賞
我蠶の流産だなと桑を振り　愛知　河合水陽

▲天賞
蠶種買り先づ鶏と馬を褒め　美濃　田口芳月

▲選者吟
理論と實際多少相違と蠶敎師逃げ　金坊子

懸賞募集 俚謠（第二十三回抜萃）

高橋鬼川選

▲秀逸
寢ては途切れ起きては世愛　聖にや子の守お蠶の守　肥後平山

怒りすき人程厚き繭なりとり　愛知　下川
天の蟲地の蟲人の智で飼はれ　丹波　古城
蠶下手蠶屋なばかり早く云ひ　埼玉　松風
居候に飼はした蠶は一ひ過し　丹波　青蠶
来人仲買相場に聞なしげ下げし　肥後　平山

紙なつけて蠶種屋の口に一と思案　丹後　千西
柔かな心で飼ふた黒い繭　伯耆　蠶子
民間ふるは技子の飼ふた黒い繭　同人
色彩のよいのは繭も早く賣れ　羽前　枯葉

無い情に浮立つ繭も、水をそそぎて沈み浮
忍にとり組て來る間も、丸く太つて繭の
結れた糊に繭玉咲かせ、蠶に買ふ早始め
蠶の繭を蠶屋の繰れば、寢て買ふ日にかり
家や工場で繰機が、働ける、主人は日に繭ける
替めしやんすな道のふしちだな可愛い蠶にやられぬ
夜なべ、蠶なんて蠶の動め繰んて、繭にした嬉し尺
夜桑切る時くく時くめ見れば、さしひ
繭じやあるまい蠶の上、解たる島田に折挿
蠶上手で蠶の繭、富士の山の繭
吉野の桑の葉、あれの繭、富士の山の繭
蠶上手で蠶の繭、富士の山の繭
主の業に、ぬしはけど、たいぬ此繭が立つ
繭ふ蠶、女の心に似て、ぬ此繭が立つ
繭ふ蠶、女の心に似て、繭の繭、早く分る
繭ふ蠶、女の心に似て、繭の繭、早く分る
繭ふ蠶、女の心に似て、繭の繭、早く分る
花の吹雪が島田に散つて、ちつと見返る蠶
の揺に白く被ぼ、繭な蠶

愛知　下川
丹波　古城
伯耆　蠶子
同　人
山梨　泉澄
但馬　鷺村
陸中　岡崎
同　人
京都　葉華
同　人
日向　笑人
丹波　虚春
羽前　可昇
伯耆　蠶子
愛知　閑水
同　人

▲五彩

蚕絲工女は何宰かから、雪の中にも笑ふ梅
切れ絲となる前の宰さ、泉に結んだ二つ繭
主の浮き絲なぶ思ふ故か、解けぬ繭さへ浮き沈み
思ふ路と見られぬ平い、お蠶の筒に夜桑搗み
村の興作は好い、蠶買ふた、蠶上手で繰数よし

愛知　機逸
阿波　芳舟
愛知　雅庵
丹波　紫蘭

▲人賞
郭は工女の手元にかゝり　愛知　村上下川

▲地賞
泣いて別れる二つ繭　愛知　村上下川

▲天賞
明けて目出度い松竹梅を　肥後　平山才太郎
絹の上着に浮模様　近江　奥谷菊次郎

▲選者吟
弱い身體と着物にさへも　鬼川
厚き貫綿の重ね入れ
富士の白雪朝日でとける
雪の白繭湯でとける

懸賞募集 一と口噺（第二十三回抜萃）

▲秀逸

◎蠶絲豫想
甲「今年の蠶絲豫想にどうだらう」乙「さうさねい、さんじ十二分だらうよ」　愛知　尾鷲頼波

◎食へぬ奴
高利貸の子「お父様の事な貴問で食へぬ奴だと云つてますよ」父「だから使お食つてやるさ」　京都　大根古城

◎他人の飯
甲「家の子供が他人の飯を食つたことがないから我儘で困る」乙「やん所で使はれる」　栃木　中島露徑坊

◎蠶絲場の夕暮
甲「今年の蠶絲豫想にどうだらう」乙「さうさねい、さんじ十二分だらうよ」　丹波　小蔵芳抄

◎徳利の破れ
甲「君の宅の隙子は破れて居て見苦しいから貼り替ひ給へ」乙「君は實によく氣がつくが、何所から見たかね」甲「僕の宅の隙子の破れから見た」　徳島　中村高龍

◎尻口の目方
甲「口や尻の目方は何の位あるだらう」乙「そんな馬鹿な話があるものか」甲「だつて口が輕いとか尻が重いとか云ふてはないか」　栃木　中島露徑坊

◎製絲場の夕暮
甲「今年の蠶絲豫想にどうだらう」乙「さうさねい、さんじ十二分だらうよ」　丹波　小蔵芳抄

◎卒業記念
甲「今年の蠶絲豫想にどうだらう」乙「さうさねい、さんじ十二分だらうよ」　枚早　玉水露

懸賞募集 寫生文

高橋鬼川選

▲秀逸

◎倒桑の法
巡回教師「お主婦さんもつと桑を揺へて倒らなければなりませんよ」主婦「それでも大分盛に大小が出來ましたから」　愛知　彦坂紫仙

◎蠶絲場の夕暮
黄昏の空に十四日の月が銀の金盥のやうにかゝると、工場が緑のやうに鳴蟲に鳴かいた。　丹波　小蔵芳抄

◎卒業記念
枚早　玉水露

『此邊を見てください』と若い寫眞師が一人活動して居る、成だけ旨く寫りたいと思ふと首筋が痛いやうだ、曇り勝な雲間から折々日光がチラリと洩れる、寫眞師は顔をしかめた先生や生徒は瞬きもせず見詰めて居る、卒業記念の撮影だ。

◎工場の晨　丹波　泉盧春

今朝一の汽笛が鳴つた、急ぎ床を離れ起き洗面場に立ち、歯を磨きながら空を仰いで見ると、下弦の朝月は煙突の上に冬の寒い色が光つて居る、靄は暗しい製絲工場も寂しい程静である

▲人賞

◎お正月　愛知　尾關銀波

あゝ樂しい〳〵お正月は來た、年をとらうが皺がよらうが、笑ふものは笑へ、四方の山も一度に笑へ、今に桑の芽が膨張する、よし、今年こそは大蠶をして立派な繭をとり、組合中の人にアッと云はしてやらう。

▲地賞

◎寒い朝　京都　田橋晩塵

霜枯れた草を踏んで桑園へ出た、颯と吹く北風は骨を刺すやうだ、桑の樹はピュウ〳〵と鳴つて、足許の落葉はカラ〳〵と飛ぶ、向うの畑から白い煙が上つて冷たさうな乾いた空へ消えて行く、清く晴れた寒い朝だ。

▲天賞

◎隣の花ちやん　丹波　宮下花外

桑園の耕耘に疲れたので、隣の五右衛門風呂につかつた、娘の花ちやんが豆殻をパリ〳〵と焚いてくれながら來年の事を語る、僕は前の菊ちやんはお嫁に行くのだと云つたら、花ちやんは只だうつむいて何も云はなかつた。

蠶海涓滴

△米國近年　絹綿交織物の流行顯著なるも是一時的流行にして到底永く米國人の好尚を滿足せしむるに足らずと紫藤生絲檢査所長語る希は然かありたし。

△製絲工業　は單純の作業長時間就業するに於て衞生上何等の障害を認めず若し此時間を短縮せば國富の増進を妨ぐとは上田商業會議所の答申眞に然り。

△長野縣下　一昨四十一年度の桑園荒廢反別三千八百七十九町七反歩にして縣下全桑園反別三萬九千四百三十七町六反に對して荒廢桑園九分八厘に當る。

△同縣下桑　園全部に整理を行ひ假りに一反歩三百貫を摘桑し得るとし一貫目貳拾錢に積算せば貳百貳拾參萬七百參拾七圓の純益也と遺利頗る大なる哉。

△愛知縣東　三生絲製造同業組合は同縣下東三地方に安樂育蠶に行ばれ其弊害大なりとて該法禁止の請願書を知事に提出不利と知つて改めぬは頑迷の極。

△德島縣矢　野伊勢八氏が新案特許の登錄を受けたる矢野式經濟養蠶器は人夫の節減病蠶の自然淘汰空氣の流通等に注意したる發明也と果して然らば妙。

△大日本蠶　絲會は製絲業に對して工場法の適用外を要求す餘りに勝手な言草とやまと子罵る本會答申の内容如何を研めずしての盲評一笑の價だに無し。

△熊本蠶病　豫防事務所の昨年春秋蠶種檢査枚數十三萬六千餘枚此蛾數三百八十二萬餘蛾にして病毒歩合百蛾に對し五乃至十四五の範圍と先づ好成績か。

△長野縣輸　出生絲の生産額三千五百萬圓其製絲釜數四萬七千餘にして之に從事する工女數四萬八千餘人なりとは盛んなり製絲業國の名ある亦宜なる哉。

△米國に於　る絹布需要の前途一層有望なるも唯我國の工業幼稚にして進んで絹布の供給をなすべき設備なきを憾むと渡米實業團の一人阪口孝兵衞歎く。

△佛國生絲　課税案年々下院議員モーレーより議會に提出政府の同意なき爲今日迄實施されざりしが今年は上下兩院共に通過すと外電に見ゆ果して眞か。

△日本製絲　家自己の利害に頗る不熱心一度之を横濱の外國商人若くは問屋に委託せば夫れ以上は捨てゝ構はぬ風情也と町田辰之助慨歎す是れ頂門の一針。

叙任辭令

蠶絲業に關係あるものにして其筋より叙任辭令を受けられたる諸氏左の如し。

和田日英博覽會事務官長英國へ出張中事務取扱を命ず　農商務次官　押川則吉

叙任	職	氏名
二級俸下賜	農商務技師	月田藤三郎
叙正五位	生絲檢査所技師 五位勲五等	本多岩次郎
叙正五位	農商務省技師 五位勲五等	今西直次郎
叙勲四等授瑞寶章 四級俸下賜	農商務技師 五位勲五等	芳賀權四郎
陞叙高等官三等	蠶業講習所技師 正六位	宮原[illegible]正
陞叙高等官四等 七級俸下賜	蠶業講習所技師 從七位	石居[illegible]郎
陞叙高等官五等	蠶業講習所技師 正七位	土屋泰
陞叙高等官六等	蠶業講習所技師 從七位	町田儀
陞叙高等官六等	蠶業講習所技師 從七位	肥後俊恵
六級俸下賜	蠶業講習所技師	川島[illegible]太郎
七級俸下賜	蠶業講習所技師	石川[illegible]次郎
八級俸下賜	蠶業講習所技師	中村[illegible]八郎
八級俸下賜	農商務省技手	中下[illegible]郎
任蠶業講習所技師 叙高等官七等	蠶業講習所技手	木多實芳
任蠶業講習所技師 叙高等官七等	蠶業講習所技手	寮直三

寄贈書目

蠶病豫防事務成績
生絲檢査所事業案内
愛知縣蠶業[illegible]統計便覽
養蠶手引
東京府蠶業會議所統計年報
公許會社[illegible]勸業年報
鹿兒島縣勸業[illegible]
鹿兒島の蠶業概要
群馬縣蠶病豫防事務成績
今[illegible]
主[illegible]と組合小作要覽
[illegible]
檢[illegible]
牧[illegible]
蠶病豫防事務成績

證券商業　自六〇五六—六一六五八號
月刊[illegible]　第一三一—一三二五號
大日本山林會報　第一〇—一二〇號
農[illegible]教育　第一四一—一一二號
日本學士會[illegible]　第一四—一一四二號
工業化學雜誌　第二六—一四號
學士會月報　第三四一—一二三號
大日本農會報　第三一九號
大日本私立衞生會雜誌　第一二—一三號
農業世界

山形縣内務部
生絲檢査所
愛媛縣蠶業[illegible]
博文館
東京[illegible]
農商務省
川村[illegible]
岡[illegible]
中[illegible]
佐賀縣[illegible]
農商務省[illegible]
岡[illegible]
農[illegible]
盛岡高等農林學校
福島縣蠶病豫防事務所
外務省通商局
横濱商業會議所
大日本山林會
農商務省
證券新報社
工業化學會
學士會
大日本農會
大日本私立衞生會
博文館

誌名	號數
農事[illegible]	第一三六—一三九號
氣象集[illegible]	第一八一—一八二號
北海道[illegible]	第八五九—一二〇號
大日本[illegible]	第二三—二一二九號
京都府農會報	第二〇—七四號
島根縣農會報	第一七一—一八〇號
玉縣農會報	第五〇—一七號
新潟縣農會報	第一三三—二二號
埼[illegible]農會報	第六八—七〇號
蠶業新報	第一九—二二一號
岐阜縣農會報	第八—一二號
島根縣農會報	第三一六—一〇號
北海道農會報	第一〇四—一八〇號
圖書[illegible]月報	第一一四—一〇七號
中央農事報	第一一四—一三一號
動物學雜誌	第二五—二七五號
染織時報	第二七四—四二八號
會[illegible]月報	第四五〇—七四號
何鹿郡蠶業月報	第三一—二三四號
兵庫縣蠶業月報	第二一—一〇六號
生[illegible]報	自八月至十二月
中外商業新報	自八月至十二月
横濱貿易新報	自八月至十二月
統計集誌	第一六二—一九四六號
山梨[illegible]國民[illegible]	第五六—〇一號
愛國婦人會時報	第一八—一一五一號
植物學雜誌	第二七—二一七號
衣[illegible]會時報	第三五—九九號
城[illegible]蠶絲學會時報	第四八—八八號
農學會報	第八四—四九號
土佐縣蠶業報	第八四—八六號
山口縣蠶業報	第七〇—七四號
日本農業[illegible]會時報	第八一—一〇號
産之組家[illegible]	第四六—五〇號
扶桑[illegible]	第八四—八八〇號

農事[illegible]社
大日本[illegible]會
新潟[illegible]會
帝國農家一致協會
京都府農會
廣島縣農會
埼玉縣[illegible]
新潟縣[illegible]
蠶業新報社
岐阜縣農會
島根縣農會
北海道農會
東京書籍商組合事務所
全國農事會
東京動物學會
大日本織物協會
長野縣蠶種同業組合聯合會
何鹿郡蠶業組合
兵庫縣蠶業[illegible]
名[illegible]
商況[illegible]
横濱[illegible]
東京統計協會
山[illegible]
愛國婦人會
東京植物學會
衣笠[illegible]
城丹蠶業講習所[illegible]
農學會
土佐[illegible]
山口縣[illegible]
日本[illegible]
大日本蠶絲會
扶桑[illegible]

Statistkue de la production en la s[illegible]ia
en, Franoe et a L'eranger
Bollettion dei Sericoltori No 24—47.
Pubbienta a Cura dell, Associozione dell,
indristrea tedel Commercis della sete in Italia
Bulleton des soieg & des soieries No. 1665—1680
Revwe heb domadaire Lyonnaise indapendante
The Calendar of the
Tokyo Sangyo koshujo
(Sericultural institute) For 1909—10

文藝懸賞募集

俳句

二月分課題一月末日ゞ切讀來授書

▲選者　花の本花翁宗匠

▲課題　春の曙。松の花。鶯。長閑。若菜

▲懸賞　天(一人)ゞ會報中ゞ年分◎人(一人)會報三ゞ月分◎地(一人)會報中ゞ年分◎人(一人)會報三ゞ月分

▲規則　一句づゝ入に付五句限り用紙の端に記し京府市郡北一二三松林花園外と記し住地の郡町村番号住名雅號共明記せらるべし。之れなき者は縱令其選に入るも贈賞せざるべし。

狂句

柳川

▲選者　高橋鬼川先生　(原稿ゞ切締月三十日限り)

▲課題　蠶絲業に關係あるものならば何にてもよし

▲懸賞　天(一人)ゞ會報一ゞ年分◎地(一人)會報中ゞ年分◎人(一人)會報三ゞ月分

俚謠

(都々逸)

▲選者　高橋鬼川先生　(原稿ゞ切締月三十日限り)

▲課題　蠶絲業に關するものにて女工などに聞はしめても差支なきもの(但し卑猥なるものは授書とす)

▲懸賞　天(一人)ゞ會報一ゞ年分◎地(一人)會報中ゞ年分◎人(一人)會報三ゞ月分

一と口噺

(原稿ゞ切締月三十日限り)

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　何にてもよし但し卑猥なるものは授書とす

▲懸賞　天(一人)會報一ゞ年分◎地(一人)會報中ゞ年分◎人(一人)會報三ゞ月分

五行文

(生文)

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　蠶絲業に關する百般の事を見聞した儘面白く記すこと文體は原意

▲懸賞　天(一人)ゞ會報一ゞ年分◎地(一人)會報中ゞ年分◎人(一人)會報三ゞ月分

選用課題

紙端書一枚に一題限り一行二十字詰にして五行に認すこと

懸賞

天(一人)ゞ會報一ゞ年分◎地(一人)會報中ゞ年分◎人(一人)會報三ゞ月分

注意

(狂句、俚謠應募者は用紙一枚に付き五句限り(一人ゞ會々員若くは會員外と記し住地の郡町村番号住名雅號と共明記し住所氏名を無き分は縱令其選に入るも贈賞せざるべし)▲用紙は郵便はがきに限る宛て送らるべし

特等

回數	特等	並等
一回乃至(六回に付)	一貫半貫	四分ノ一貫
(七回以上)	拾貳圓	拾五圓
(一回に付)	拾七圓	拾貳圓
	拾圓	八圓
	拾圓	七圓
	六圓	五圓
	拾貳圓	四圓

●會員は右料金の二割引とす●四分の一貫未滿は謝絶す●前金にあらざれば掲載せず●一貫は一行二十七字詰七十二行とす

●本報定價　一冊　金拾五錢　一ヶ年分前金壹圓七拾錢

明治四十三年一月二十日印刷發行

東京市神田區錦町三丁目十八番地
編輯兼發行人　小池松市

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍活版所

東京市神田區錦町三丁目十八番地
發行所　大日本蠶絲會
(電話本局一四七三番)

栞轉載

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(December 1909.)

	Brought over.	Arrivé. Arrived.	Vendu. Sold.	Exporté. Exported.	Renvoyé. Sent back	Brought forward.
Filature. Filature.	19.421 *Picul.*	12.380 *Picul.*	11.808 *Picul.*	— *Picul.*	932 *Picul.*	19.043 *Picul.*
Zaguri. Reeled.	4.132	1.421	1.853	—	172	3.528
Kakeda. Orihayoshi.	900	1.105	925	—	95	985
Autres. Other.	103	60	—	—	16	146
Total.	24.555	14.966	14.604	7.488	1.215	23.702
1908.	23.072	13.559	12.083	—	602	24.338

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(December 1909.)

MARCHE DES SOIES.

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Citons sommairement la situation de notre marché au mois de Décembre dernier.

La fluctuation des cours du change à la Banque de numéraire ayant considérablement favorisé les marchands exportateurs, et les marchands, tant d'Europe que d'Amérique, ayant commencé grandement leurs achats profitant de la baisse des prix de soie, plus de 20,000 balles ont été vendues en une quinzaine de jours. La situation a brusquement changé, les prix ont monté de quelque 50 yen et Shinshu Extra No. 1 s'est vendu enfin à des prix de yen 860. L'année s'écoula ainsi dans une splendide situation.

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le mouvement de la soie durant la même période.

RAWSILK MARKET

THE RAW-SILK MARKET OF YOKOHAMA.

Owing to the fluctuation of the quotation of foreign exchange of the Yokohama Specie Bank, the exporting merchants were in a very advantageous situation, and, moreover, merchants of Europe and America all assumed an active attitude, as the prices were low. From these two reasons, we saw that, during only half a month, 20,000 odd bales already actually changed hands. As a consequence, the price at a bound got Y. 50, and Extra No. 1 of Shinshu was transacted at Y 860. Altogether, things seemed all bright and satisfactory.

The following table shows the movements of silk during the relative period:—

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filatures.	Prix. Prices.
	Soie. Silk.				Maximum du prix. Highest prices.	
	Piculs.	*Piculs.*	*Piculs.*	*Piculs.*		*Yen*
1	494	579	19	—	Jyōnansha.	900
2	435	583	33	151	Shinteisha.	850
3	654	483	34	—	Kōnansha.	920
4	451	440	25	—	Yajimasha.	900
5	—	—	—	478	——	—
6	1131	451	77	—	Tsunatakan.	815
7	340	782	53	—	Kokuhōsha.	890
8	553	490	49	—	Kaisyosha.	905
9	632	696	42	—	Mitsuigumi.	865
10	492	425	92	—	Yuzunoseishi.	910
11	628	586	98	1888	Kokuhōsha.	910
12	—	—	—	1199	——	—
13	882	722	40	—	Sōsikan.	915
14	648	826	55	—	Jyonansha.	920
15	509	593	85	—	Sinpusha.	890
16	521	882	70	285	Kaimeisha.	930
17	433	727	56	—	Kokuhōsha.	940
18	601	779	6	622	Ōyamakan.	930
19	—	—	—	—	——	—
20	729	975	52	—	Tamakawasha.	935
21	624	955	28	1008	Seisansha.	940
22	406	492	39	—	Kaiseisha.	900
23	480	221	84	—	Kaimeisha.	930
24	486	333	68	—	Kōnansha.	940
25	339	142	41	487	——	—
26	—	—	—	—	——	—
27	1002	757	20	—	——	—
28	682	259	11	627	Setayonegumi.	875
29	456	545	12	—	——	—
30	353	—	26	743	——	—
31	—	—	—	—	——	—
Total	14,966	14,604	1,215	7,488	——	—

1 yen want environ fr. 2.50. 1 Pical = 60 kilg environ.

On sépare les vers qui sortent des oeufs quelques jours après la ponte, en automne, quoiqu'ils soient à la seconde génération de race bivoltine. De plus, nous avons des races polyvoltines; mais l'élevage n'en est pas répandu, parce que la qualité du cocon est bien inférieure aux autres et le climat n'est pas assez chaud pour l'élevage d'une quatrième génération, même au sud du Japon.

Il faut remarquer ici, que dans la grotte où l' on conserve les graines de vers à soie, la temperature qu'on y maintient est de beaucoup inférieure à celle de l' air extérieur, surtout en été; cette température intérieure ne doit subir que de très légers écarts par an.

Dans une grotte située dans la pr-fecture de Nagano, on observe que la température est en centigrades:

	dans la grotte	á l'extérieur
en Janvier	−4° (min.)	−3° (min.)
en Février	−3°	−2°
en Mars	−2°	+2°
en Avril	+1°	8°
en Mai	2°	11°
en Juin	3°	17°
en Fuillet	6°	21°
en Août	8°	22° (max.)
en Septembre	11° (max.)	17°
en Octobre	6°	12°
en Novembre	1°	6°
en Décembre	−3°	+1°

Dans une autre grotte située à 800 metres au-dessus du niveau de la mer, on observe que la température est en centigrades:

en Avril	1°,1	en Juillet	2°,2
en Mai	1°,4	en Août	4°,2
en Juin	1°,7	en Septembre	8°,1

Ces grottes diffèrent un peu des autres; c'est une sorte de petite caverne pratiquée dans les montages. Elles se trouvent aux diverses couches de terrains comme les schistes cristallins, les terrains tertiaires, les roches éruptives anciennes et récentes, etc Les roches y sont cassées; au printemps et en été, un courant d' air assez froid vient pénétrer toujours de l' intérieur à l' extérieur. Au bout de quelques semaines quand la température de l'air extérieur est parvenue à son maximum, le courant d'air de la grotte disparait presque complétement jusqu' au printemps.

Quand on a trouvé un endroit convenable sur le flanc d'une montagne, si l' on veut l' utiliser pour l' hivernatin des graines, il faut y construire un petit magasin

propre à les y recevoir. Quelquefois, même sur la surface du terrain montagneux, il y a certains endroits où le courant d'air froid vient de l' intérieur du sol au lieu de l' eau à la fontaine. En ce cas, il faut creuser le sol pour faire un puits latéral. Le magasin des graines dans la grottes ou le puits a deux toits l' un extèrieur, l'autre intérieur, pour eviter la chaleur du soleil. Aux deux côtés, dans le magasin qui n'a qu'une chambre, on place l'étagère avec des claies comme dans une magnanerie. Les graines conservées dans les boites hermétiquement fermées sont placées sur des claies.

On reconnait que la fin de fevrier ou le commencement de mars est l'époque la plus propice pour rentrer les graines quand les températures intérieure et extérieure sont à peu près égales. Les graines sont conservées avec sécurité jusque vers la mi-août dans le magasin dont la température en été ne doit pas dépasser 8° C. Mais si l'air intérieur est très humide, les oeufs se déteriorent facilement. Aussi faut-il éviter soigneusement l'humidite, de même dans les boites contenant les graines.

Le magasin contient non seulement les graines de races bivoltines mais encore les graines de races annuelles qu'on cultivera jusqu' à la mi-août. Ainsi, on trouve au Japon, l'élevage des vers comme suite, d'Avril à Septembre:

1. des vers annuels au printemps,
2. des vers bivoltins de seconde génération, en été,
3. des vers même, en automne,
4. des vers annuels en été ou en automne,
5. des vers polyvoltins de quatrième génération.

Les cocons de la première génération de races bivoltines et ceux des trois générations précédentes de races polyvoltins sont utilisés exclusivement pour la reproduction; ils sont très faibles en la richesse soyeuse. Mais les cocons de vers annuels élevés en été ou en automne sont d'aussi bon qualité que ceux produits au printemps, si l' on nourrit les vers avec des feuilles tendres; et les cocons de races bivoltines produits en automne sont aussi bons que ceux produits en été. Actuellement 120 grottes ou cavernes sont utilisées pour l' hivernation des graines de ces deux races.

D. Hirosé.

année Meiji	A. D.	Quantitées de cocon frais de pingtemps	Quantitées de cocons frais d' été	Quantitées de cocons frais d' automne	Total
		Koku	Koku	Koku	Koku
36	1903	1.682.385	378.897	555.800	2.587.082
37	1904	1.850.903	390.958	583.815	2.825.676
38	1905	1.771.754	367.673	583.906	2.723.333
39	1906	1.865.001	413.589	629.137	2.970.727
40	1907	2.241.548	469.360	746.089	3.456.967
41	1908	2.205.491	476.352	848.328	3.530.171

Pourcentage de quantitées des cocons de pringtemps d' été et d' automne.

	cocons pringtemps	cocon d' été	cocon d' automne
1903	64	15	21
1904	65	14	21
1905	65	14	21
1906	63	14	23
1907	65	14	21
1908	62	14	24

L'année 19 de Meiji (1886) les quantitées de production du cocon d' été et d' automne furent 268.410 koku et 52.000 koku.

Pourquoi y-a-t-il beancoup d'élevage d' été et d' automne comme ci-dessus au Japon?

Cele tient à la conservation des graines des vers à soie dans le froid.

Dans le chapitre suivant je donnerai des détails à ce sujet.

Qu' est ce que le ver d' été et d'automne? Il y a beaucoup de races de vers d' été et d' automne, comme la bivoltin, la polivoltin, le croisement entre l'univolin et la bivoltin. Dans l'amere-Saison pour l'univoltin et les bivoltin, on fait l'elevage d' été et d' automne dans les mois de Juillet et d' aout, Cet-à-dire que le ver d' été ou d' automne est celui qui éclôt en été ou en automne.

BIVOLTIN.

Le premier ver de bivoltin éclôt de même que ce ver pringtemps, Le deuxième ver éclot au mois de Juillet. La durée de l'élevage est environ de vingt six jours c'est le ver d' été.

Si les graines sont conservées dans un endroit à une température basse jus qu' au printemps et si le premier ver éclot tardivement le deuxième ver est employé pour l'élevage des vers d' automne.

POLIVOLTIN.

Il y a un ver qui éclot quatre fois pendent les mois de Mars et d' Aout. Le troisième et le quatriéme ver sont employés pour l'élevage des vers à soie d' automne.

CROISEMENT ENTRE UNIVOLTIN ET BIVOLTIN.

Cet article est pour obtenir de beaux cocons dans l'élevage d'été, Dans le croisement entre la bivoltin femelle avec l'univoltin mâle les graines éclosent comme le bivoltin pendent d' été.

TRIVOLTIN ARTIFICIELLE.

Nous produisons le troisième ver par le bivoltin. Les vers sont comme ceux de l'élevage d'automne.

UNIVOLTIN TARDIF.

Les graines d'univoltin sont conservées dans le froid et au temps désiré nous faisons éclore comme pour le ver d'été ou d' automne.

BIVOLTIN TARDIF.

Les graines de bivoltin se conservent très tard jusqu'au mois d'Aout et le ver est employé pour l'élevage d'automne. Alors les graines ne sont pas encore écloses et changent de couleur et le bivoltin est élevé une fois chaque année comme l' univoltin.

HIVERNAGE ARTIFICIEL.

Il est nécessaire que les granies d'univoltin passent l'hiver autrement la graine n'éclot pas, Alors quand les granies d'univoltin, qui n'est pas encore passé l' hiver, sont couservées quelques jours dans le frais, de ce moment les graines éclosent encore avant d'hiver.

(à suivre)

S. Ishiwata.

La grotte pour l' hivernation des graines de vers à soie.

Au Japon, les vers de la première génération de races biveltines sont cultivés généralement en Mai, ceux de la seconde, en Juillet. Mais à cette époque, l'humidité du climat occasionne diverses maladies à un grand nombre de vers. Paur parer à cet inconvénient, on conserve les grains de la première génération jusqu'en Juin dans une grotte où l'on maintient la température assez froide. Puis, on fait en sorte que l'éclosion ait lieu vers le milieu de Juin ou plus tard. Les vers de la première génération sont cultivés exclusivement pour la reproduction; les papillons pondent leurs oeufs de la fin de Juillet au commencement d'Août.

Traits caracteristique de la Sériculture au Japon. (Application du froid pratiquée pour les graines des vers à soie).

En quelques endroits, on fait écrosion de graine et l'élevage des vers à soie, mênce alors, que la place manque de la temperature suffisante pour le developement des vers à soie, on fait l'élevage par la chaleur artificielle de la chambre. Mais la limite de l'élevage des vers à soie est la limite jasqu' à laquelle pousse le mûrier qui fait leur developement et donne les feuilles pour nourir les vers.

A présent on fait l'élevage des vers à soie jusqu' à près de 48° latitude nord en Europe. L'élevage en Asie aussi s'étend jusqu' à près 48° nord. En Afrique, Amerique sud Australie, et de l Hémisphère sud, on fait aussi l'élevage des vers à soie, mais l'éxtreme limit sud est le Chili et Argentine, et il semble qu'elle ne dépasse pas 50° sud.

Dans la zône temperée les vers éclosent une fois chaque année et on emploie les feuilles du mûrier une fois aussi.

Et dans la zône tropicale les vers éclosent toute l'année et le mûrier pousse très bien et les feuilles sont tousjour vertes.

Les pays de sériciculture d'Europe sont dans première division, et la sericiculture de l' Inde, de Siam, d'annam sont dans la séconde.

Snivant cette division la situation de la Sériciculture du Japon est dans la Sériciculture de la zône tempérée.

Et les races qu'on élève dans chaque pays sont differentes et la façon de l'élevage n'est pas la même. Au Japon n'ya-t-il qu'une récolte de vers à soie, vu que le pays est dans la région tempérée? Non, A présent nous faisons l'élevage des vers à soie depuis le pringtemp jusqu'à ce que les feuilles de mûrier tombent.

L'élevage de pringtemps est le même que celui des autres pays de zône tempérée, et il s'appelle "*Haruko*" "le ver de pringtemps" on fait aussi un élevage en été et en automne.

L'élevage des vers été et automne n'est pas pratique pour les autres pays de la zône tempérée, nous savons que des recherches l'élevage d'été et d' automne ont été faites et un peu pratiquées en Euroupe.

Au Japon, l'élevage de la race de bivoltain est pratiquée depuis longtemp (euviron de l'ère de Hôreki) L'élevage des vers à soie des races d'été et d' automne est devenu très développe ces quelques années. Nous connaisons le produit des cocons separément pour de printemps d' été et l'automne.